氷見市埋蔵文化財調査報告第22冊

氷見バイパス関連遺跡調査報告 Ⅳ

― 阿尾島田A遺跡 ―
― 阿尾島尾山砦跡 ―

１９９６年３月
氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第22冊

氷見バイパス関連遺跡調査報告 Ⅳ

― 阿尾島田A遺跡 ―
― 阿尾島尾山砦跡 ―

１９９６年３月
氷見市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成４・５年度に発掘調査を実施した、富山県氷見市阿尾所在の阿尾島田Ａ遺跡と、平成５年度に発掘調査を実施した、同所在の阿尾島尾山砦跡の報告である。

2　調査は、一般国道１６０号氷見バイパスの建設工事に先立ち、建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。また、遺物整理等の作業は、同じく平成６・７年度に実施した。

3　調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。事務担当者は以下のとおり。

平成４年度　課長：玄　義昭、課長代理：坂本男蔵、文化係長：西井紀夫、
主任：坊美代子、社会教育主事：浦　勇仁、主事：高野弘文

平成５年度　課長：玄　義昭、課長代理：山岸啓次、文化係長：西井紀夫、
社会教育主事：浦　勇仁、主事：高野弘文、主事：宮下和子

平成６年度　課長：島　勝彦、課長代理：山岸啓次、文化係長：西井紀夫、
社会教育主事：浦　勇仁、社会教育主事：高野弘文、主事：宮下和子

平成７年度　課長：島　勝彦、課長代理：井波咲朗、文化係長：西井紀夫、
主任：池田幸代、主任：池田秀正、社会教育主事：高野弘文

4　調査は、氷見市教育委員会生涯学習課学芸員鈴木瑞麿と同大野　究が担当した。

5　調査参加者は、以下のとおりである。

調査補助員：三矢恵京

発掘作業員：上野正一・小島信義・沢井正雄・伊藤美治・浜本清作・土合幸作・城下正雄・菅田富美子・沢井きみ・坂口愛子・島峰子・田中すみ・二崎きみ・松原秀子・山本ヨシエ・沢井とし・山崎嘉代子・城下米子・中村哲夫・栗正次・水谷良三・荒光藤一・栗末子・中村すみ子・栗一枝・坂田かづい・中村かず子・中村みず江・船山かず・中村よつゑ・高一男・鳥内好三・向春子・梅本修作・要門知之

整理作業員：三矢恵京・伊藤文代・栗山寿美・関谷明美・嵩尾朋昭

6　本書の編集・執筆は、鈴木瑞麿の協力を得て、大野　究が担当した。

7　調査および本書の作成にあたって、以下の機関・個人から指導・協力をいただいた。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市文化財審議会・氷見市立博物館・氷見市シルバー人材センター・小島俊彰（金沢美術工芸大学）・茶谷邦子（地元）

8　出土遺物と調査にかかわる資料は、全て氷見市立博物館が保管・管理している。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の地理的環境 …… 2

第２節　遺跡の歴史的環境 …… 2

第３章　阿尾島田Ａ遺跡発掘調査の成果

第１節　調査の方法 …… 5

第２節　層位 …… 5

第３節　遺構 …… 6

第４節　遺物 …… 19

第５節　まとめ …… 42

第４章　阿尾島尾山砦跡発掘調査の成果

第１節　調査前の知見 …… 48

第２節　調査の方法 …… 48

第３節　遺構 …… 48

第４節　まとめ …… 52

報告書抄録

図　目　次

第１図　周辺の遺跡 …… 4
第２図　土層模式図 …… 5
第３図　グリッド配置図 …… 5
第４図　主要遺構配置図 …… 7
第５図　遺構実測図（１） …… 9
第６図　遺構実測図（２） …… 10
第７図　遺構実測図（３） …… 11
第８図　遺構実測図（４） …… 12
第９図　遺構実測図（５） …… 13
第10図　遺構実測図（６） …… 14
第11図　遺構実測図（７） …… 15
第12図　遺構実測図（８） …… 15
第13図　遺物実測図（１） …… 19
第14図　遺物実測図（２） …… 20
第15図　遺物実測図（３） …… 21
第16図　遺物実測図（４） …… 22
第17図　遺物実測図（５） …… 25
第18図　遺物実測図（６） …… 26
第19図　遺物実測図（７） …… 27
第20図　遺物実測図（８） …… 29
第21図　遺物実測図（９） …… 30
第22図　遺物実測図（10） …… 31
第23図　遺物実測図（11） …… 32
第24図　遺物実測図（12） …… 33
第25図　遺物実測図（13） …… 35
第26図　遺物実測図（14） …… 36
第27図　遺物実測図（15） …… 37
第28図　遺物実測図（16） …… 38
第29図　遺物実測図（17） …… 39
第30図　ほ場整備前の遺跡周辺 …… 46
第31図　阿尾島尾山砦跡平面図 …… 49
第32図　阿尾島尾山砦跡堀切断面図 … 51

表　目　次

第１表　掘立柱建物一覧表 …… 18
第２表　阿尾島田Ａ遺跡の食器組成 … 44
第３表　古代遺物観察表 …… 53

図　　版

1　阿尾島田Ａ遺跡・阿尾島尾山砦跡空中写真
2　阿尾島田Ａ遺跡空中写真
3　遺構（１）
4　遺構（２）
5　遺物：縄文時代
6　遺物：古代
7　遺物：古代
8　遺物：古代
9　遺物：古代
10　遺物：古代
11　遺物：古代
12　遺物：古代
13　遺物：古代
14　遺物：古代・中世
15　遺物：中世
16　阿尾島尾山砦跡遠景

第１章　調査に至る経緯と経過

氷見市教育委員会は、一般国道160号氷見バイパスに係る埋蔵文化財について、昭和61・63年度に実施した分布調査、及び平成元・２年度に実施した試掘調査の結果に基づき、阿尾島尾Ａ遺跡・阿尾島田Ａ遺跡・阿尾島尾山砦跡[注]・山崎城跡・阿尾瀬戸ケ谷内横穴群の５か所の遺跡の本調査を予定した。

本調査は平成２年度から取り掛かり、まず最初に用地買収のほぼ終了している阿尾島尾Ａ遺跡を２か年計画で開始した。しかし平成３年度は、災害復旧工事に先立ち、山崎城跡の本調査を急きょ実施することになったため、阿尾島尾Ａ遺跡の調査は10月で中断し、残りの部分は平成４年度に実施した。なお、平成３年度には阿尾瀬戸ケ谷内横穴群の調査も行った。次いで平成４年度は、阿尾島尾Ａ遺跡終了後、阿尾島田Ａ遺跡の調査に取り掛かったが、表土を除去するのに止まった。平成５年度は阿尾島田Ａ遺跡の残りの作業と、阿尾島尾山砦跡の調査を実施し、現地作業は全て終了した。

一方、報告書は平成３年度に山崎城跡と阿尾瀬戸ケ谷内横穴群、平成４年度に阿尾島尾Ａ遺跡概報、平成５年度に阿尾島尾Ａ遺跡を刊行し、平成６年度は阿尾島田Ａ遺跡と阿尾島尾山砦跡の報告を行う予定であったが、整理作業が遅れたため本年度に刊行することとした。本書の刊行をもって、氷見バイパス関連の遺跡調査事業は、ひとまず完了することになる。

なお、本書分の現地調査期間は次のとおりである。

阿尾島田Ａ遺跡：平成４年度　９月14日～12月４日（実働39日）
　　平成５年度　４月19日～９月29日（実働53日）
阿尾島尾山砦跡：平成５年度　８月１日～10月15日（実働42日）

注：本書から三角山城跡を阿尾島尾山砦跡に改称する（第４章参照）。

参考文献

氷見市教育委員会　1990　『一般国道160号氷見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告Ⅰ』
氷見市埋蔵文化財調査報告第11冊

氷見市教育委員会　1991　『一般国道160号氷見バイパス埋蔵文化財試掘調査報告Ⅱ』
氷見市埋蔵文化財調査報告第12冊

氷見市教育委員会　1992　『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅰ』
氷見市埋蔵文化財調査報告第13冊

氷見市教育委員会　1993　『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅱ』
氷見市埋蔵文化財調査報告第15冊

氷見市教育委員会　1994　『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅲ』
氷見市埋蔵文化財調査報告第18冊

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢、人口は約６万人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山間部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、潟が陸化した平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

海に面した市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡を結ぶＪＲ氷見線が通り、主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道１６０号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道４１５号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市などの市外へ通勤する人も多い。

一方、能登半島入口の観光地として、市内には旅館・民宿が立ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

阿尾島田Ａ遺跡は、市街地北側の海岸に面した平野の、海岸から約350ｍの所に位置する。遺跡の立地する平野は、余川川河口北側に長さ約700ｍのゆるやかな海岸線を描いて広がり、西から北にかけては標高約50～60ｍの丘陵に取り囲まれた、標高約４ｍ前後の堆積地である。遺跡は、この平野の奥まった地点にあたり、丘陵を背に遺跡に立つと、正面海越しに二上山を望むことができる。

遺跡は、昭和49年のほ場整備で遺物が出土し、周知された。試掘調査の結果、阿尾島尾Ａ遺跡同様に、砂丘上に立地していることが確認された。現況は水田である。

阿尾島尾山砦跡は、阿尾島田Ａ遺跡の北東約200ｍの丘陵上に位置する。ここは余川谷と八代谷の間の丘陵の先端にあたり、砦跡は二つの高まりから成る。北西の高まりは標高52.4ｍ、南東の高まりは標高49.1ｍであり、現状は山林と墓地である。

第２節　遺跡の歴史的環境

阿尾島田Ａ遺跡付近で確認されている遺跡は、いずれも縄文海進以後のものである。

縄文海進は、氷見地域の海岸部に多くの地形的変化をもたらした。丘陵裾や丘陵端部の海への出入口には砂丘が形成され、平野の中央部は潟もしくは湿地として取り残された。また、海に面した断崖には、海食洞が幾つも穿たれた。

縄文前期前葉の稲積後池遺跡の様な例もあるが、海岸沿いの地域への人類の（再？）進出は、

縄文前期末頃から本格化するものと思われる。

朝日貝塚では縄文前期末には人が定住し、大境洞窟も縄文中期中葉には住居として利用されている。フッ素含有量の多い人骨が発見され、縄文早・前期と考えられた泊洞穴も、洞窟の成因を考えた場合、むしろ年代が下がるものと思われる。[注]

弥生時代は、前期・中期の様相は不明であるが、阿尾城跡とその北側の畑地にある阿尾遺跡から後期末の遺物が出土している。

古墳時代では、13基以上と推測される指崎向山古墳群があり、昭和24年に発掘された13号墳からの出土遺物として、直刀１・碧玉製管玉９・須恵器１・須恵器甕約10破片があり、木棺・礫床も確認された。

６世紀後半から７世紀には付近の丘陵斜面に阿尾城山横穴群・阿尾瀬戸ケ谷内横穴群・藪田薬師横穴群が造営されている。

古代に入ると、数多くの散布地が確認されているが、発掘調査によりある程度内容が把握されているのは、本遺跡と阿尾島尾Ａ遺跡のみである。なお、北八代地区には延喜式内社の箭代神社が鎮座している。

中世の阿尾地区は、氷見から能登への三街道「荒山道」「石動山道」「海浜道」の分岐点にあたり、また海上交通も把握できることから、軍事的にも重要な拠点であったと思われ、阿尾島尾山砦跡の他、阿尾城跡・山崎城跡・八代城跡・稲積城跡などの城や砦が築かれた。

また、15世紀代の藪田薬師中世墓は、古墳時代の横穴を改変したやくら状の形態をとるもので、五輪塔・宝篋印塔・板石塔婆・一石一尊仏・土師器・銅銭などが出土している。

一方阿尾島尾Ａ遺跡は、阿尾城の城下の一角と思われ、15世紀後半から17世紀初めの資料が出土している。

注：大境洞窟や泊洞穴の成因については、松島洋氏に地質学の立場からご教示を得ている。

参考文献（第１章の参考文献の他に）

氷見高校歴史クラブ　1964　『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』

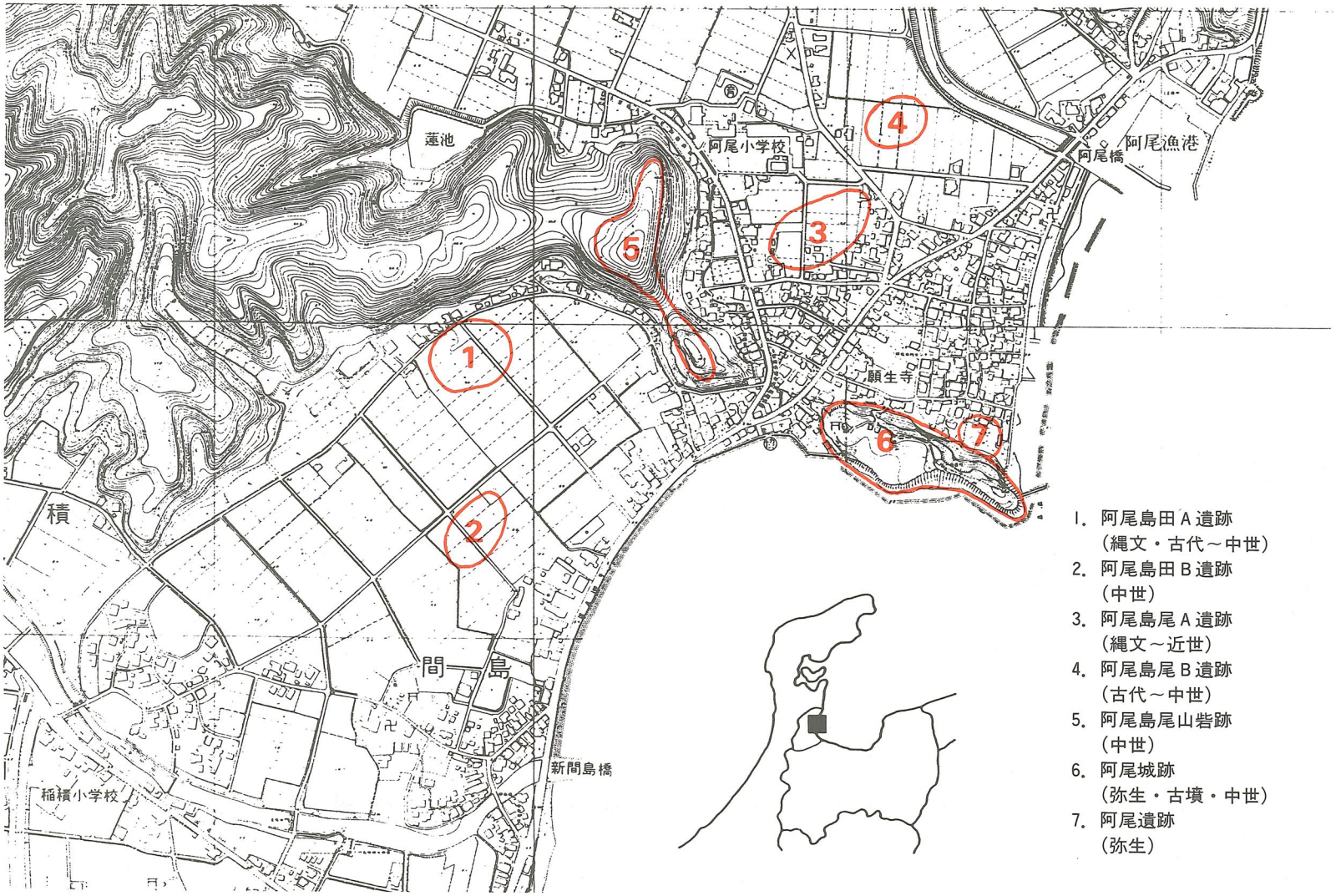
氷見市教育委員会・富山県砂防課　1985　『富山県氷見市藪田薬師中世墓発掘調査報告書』

小片　保・加藤克知・六反田　篤　1989　「富山県氷見市泊洞穴から出土した人骨の形質について」『人類学雑誌』97号

大野　究　1990　「余川川流域の遺跡資料」『氷見市立博物館年報』第８号

氷見市教育委員会　1993　『氷見市遺跡地図［第２版］』氷見市埋蔵文化財調査報告第14冊

氷見市教育委員会　1993　『県指定史跡阿尾城跡文化財調査中間報告書』



1. 阿尾島田A遺跡
   (縄文・古代～中世)
2. 阿尾島田B遺跡
   (中世)
3. 阿尾島尾A遺跡
   (縄文～近世)
4. 阿尾島尾B遺跡
   (古代～中世)
5. 阿尾島尾山砦跡
   (中世)
6. 阿尾城跡
   (弥生・古墳・中世)
7. 阿尾遺跡
   (弥生)

第1図　周辺の遺跡（1/10,000）

第３章　阿尾島田Ａ遺跡の調査成果

第１節　調査の方法

調査にあたっては、既に敷設されている建設省の測量杭を利用し、予定路線のセンターラインを基準に一辺５ｍのグリッドを設定した。グリッド名は南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を振り、その組み合わせで表現した（第３図）。グリッド南北ラインは、真北から西に31°振っている。

阿尾島尾Ａ遺跡での教訓を生かし、表土除去から全て手作業で発掘した。排土は調査地区横の国道用地内に置き、調査後はそれで埋め戻した。

遺跡全体の平面測量については、ヘリコプターによる空中測量を実施した。

第２節　層位の状況（第２図）

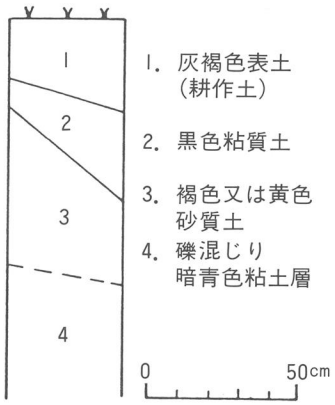
遺跡付近は、昭和49年度にほ場整備が実施され、旧来の地形がかなり改変されている。遺跡を横切る市道阿尾３号線も、ほ場整備後に新たに敷設されたものである。

この工事によって、遺跡の上部（遺物包含層）はかなり撹乱されたと思われ、出土した遺物の中にも、地点が離れているにもかかわらず接合できるものが多々あった。中には市道を越えて接合された資料もあった。

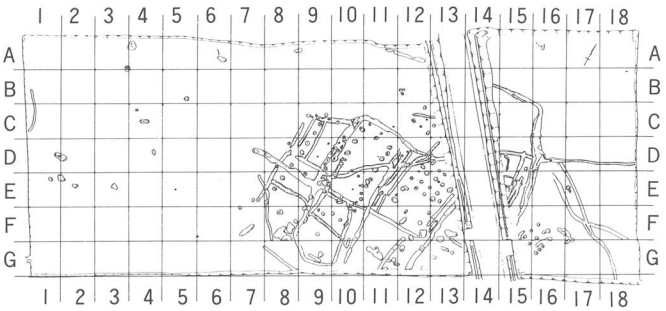
こうした状況は、試掘調査の段階で予測されたことであり、本調査ではまず、遺物を取り上げながら掘り下げ、試掘で遺構を確認した黄褐色砂層を面的に検出した。

従って、本書でいうところの遺物包含層とは、黄褐色砂層の上に位置する撹乱された地層のことをいい、また整理・報告にあたっては表採資料や表土（耕作土）出土の資料も、包含層出土の資料に含めた。

遺跡全体の基本層序は、試掘調査の段階で確認したものと知見に変化はない。また遺構の覆土については、いくつかの例外を除いて、ほとんどが黒色砂質土であった。



第２図　阿尾島田Ａ遺跡土層模式図



第３図　阿尾島田Ａ遺跡グリッド配置図（１辺５ｍ）

第３節　遺構

本節では、発掘調査で検出した遺構のうち主要なものを扱う。

遺構のうち時期の判明するものは、古代のもののみである。種類では掘立柱建物・溝・土坑がある。以下、種類ごとに記述する。

a　掘立柱建物

８棟確認しており、主要なデータは第１表にまとめた。いずれも古代の建物であり、調査地区のほぼ中央にかたまっている。柱穴の覆土は特に記述しない限り、黒色砂質土である。

ＳＢ－０１：調査地区中央北側で検出した。一部調査地区外。２間×２間の総柱建物。平面形は正方形に近いが、やや東西の方が長い。柱穴から土師器破片が出土。

ＳＢ－０２：調査地区中央西寄りで検出した。４間×２間。東側の柱穴はＳＤ－２４より新しい。柱穴から須恵器・土師器破片が出土。

ＳＢ－０３：調査地区中央で検出した。３間×２間又は４間×２間。柱穴の覆土に白い砂が混じる。柱穴から須恵器・土師器破片が出土。

ＳＢ－０４：調査地区中央で検出した。３間×２間。ＳＢ－０５と重複し、それよりも古いと思われる。柱穴から須恵器・土師器破片が出土。

ＳＢ－０５：調査地区中央で検出した。２間×２間の総柱建物。ＳＢ－０４と重複し、それよりも新しいと思われる。柱穴から土師器破片が出土。

ＳＢ－０６：調査地区中央西側で検出した。３間×２間。ＳＤ－１３・１７より新しい。柱穴から須恵器・土師器破片が出土。

ＳＢ－０７：調査地区中央南寄りで検出した。一部調査地区外。３間×２間か。柱穴から土師器破片が出土。

ＳＢ－０８：調査地区東側で検出した。２間×２間の総柱建物。

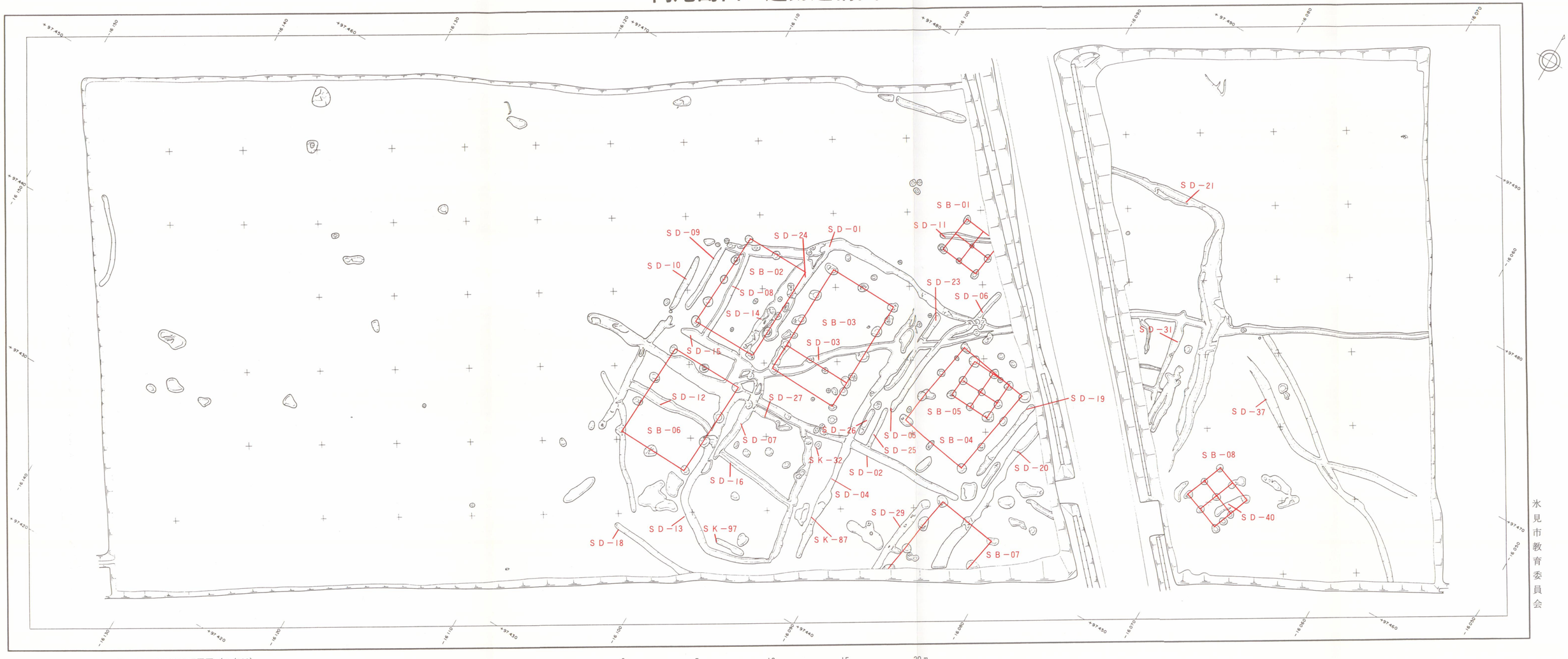
b　溝

溝は40条確認した。いずれも幅20～100㎝程の浅いもので、調査地区の中央から東側にかけて集中している。約25％の溝は遺物の出土がなく、直接時期を決定する資料を欠くが、状況からみて、いずれも古代のものと考える。全体の傾向としては、掘立柱建物の桁行方向に平行するもの、梁行方向に平行するもの、その他のものに分かれる。以下、遺物の出土したものについて報告する。覆土は特に記述をしない限り、黒色砂質土である。

ＳＤ－０１：遺構集中区の北側をほぼ東西方向に流れる。確認した長さは約20ｍ、幅は60～100㎝である。ＳＢ－０３の梁行方向と平行する。覆土に白い砂が混ざる。ＳＢ－０２より新しい。土師器・須恵器破片が出土。

ＳＤ－０２：遺構集中区のほぼ中央に位置し、東西方向にほぼ直線にのびる。確認した長さは約28ｍ、幅は60～100㎝である。ＳＢ－０６・ＳＤ－０４より古い。土師器・須恵器破片が出土。

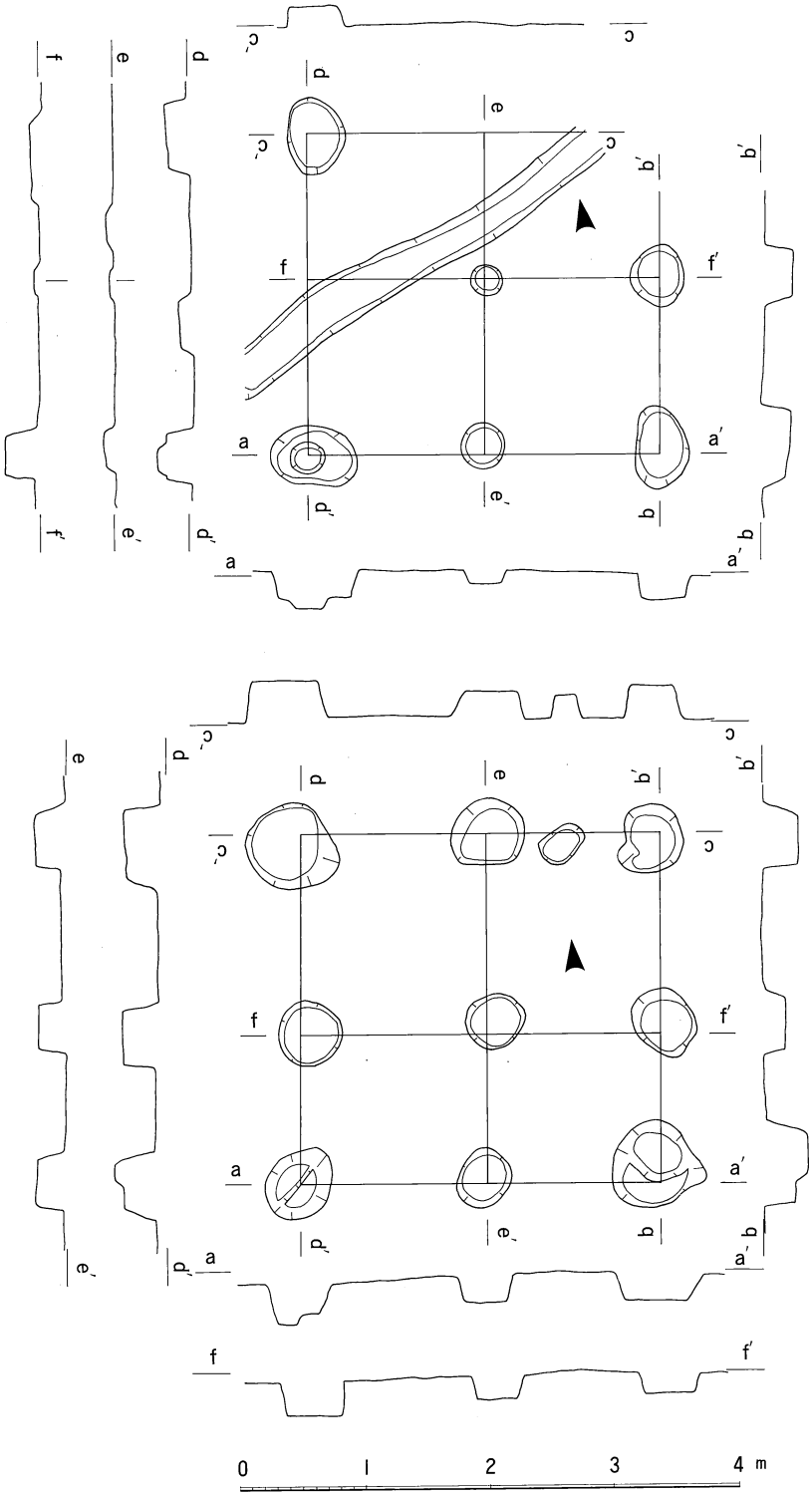
阿尾島田Ａ遺跡遺構図



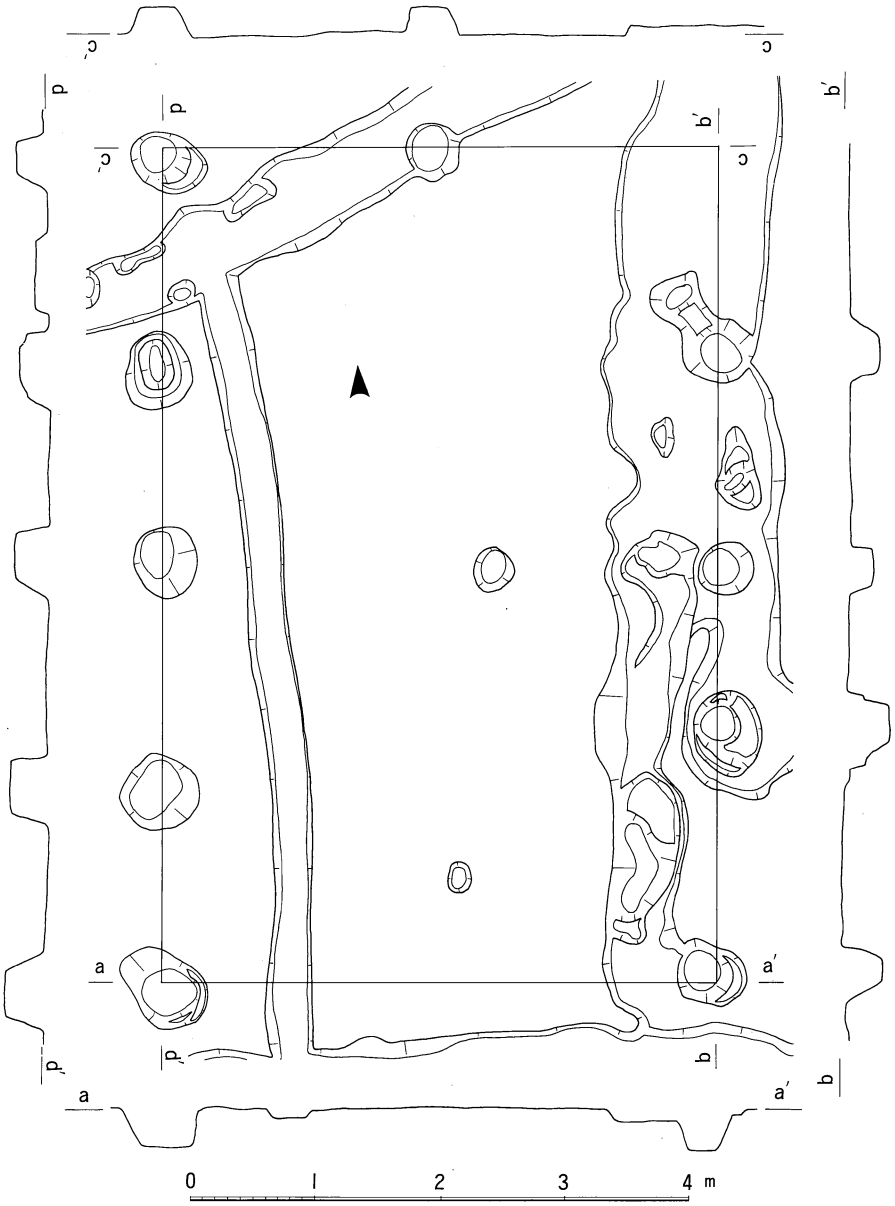
第４図　主要遺構配置図（１/200）

0　5　10　15　20 m

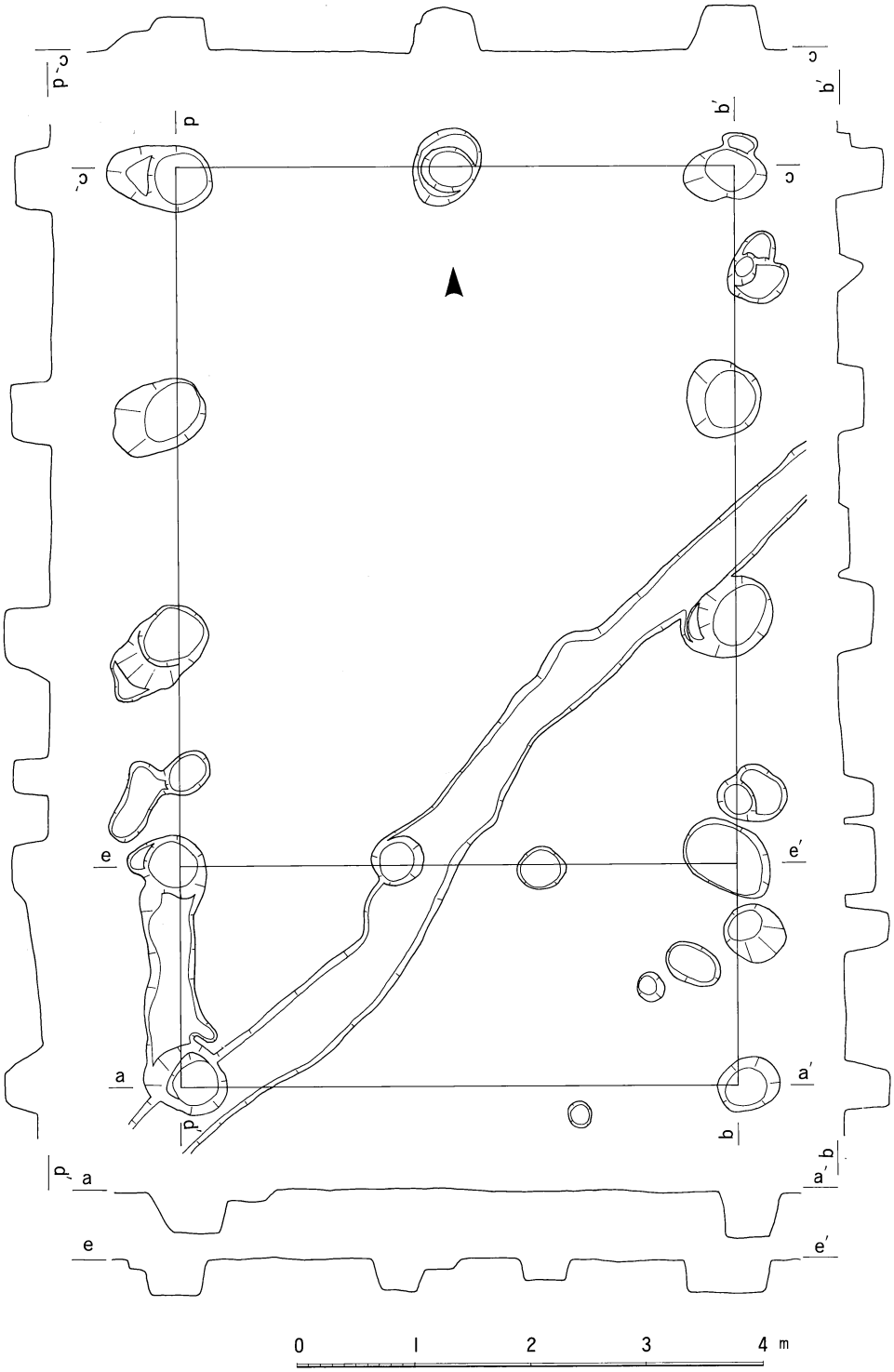
氷見市教育委員会



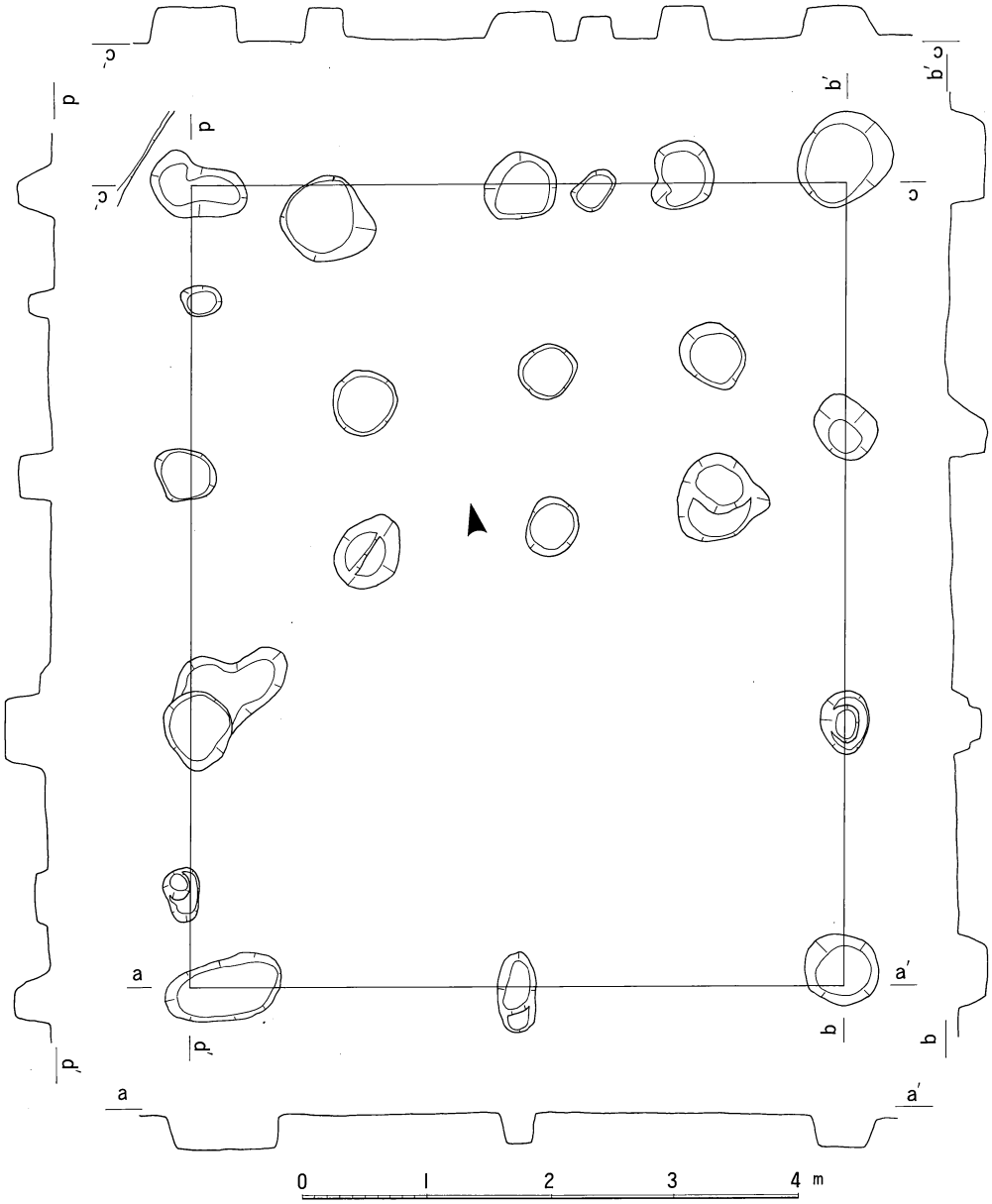
第５図　遺構実測図(1)　ＳＢ－０１（上）・ＳＢ－０５（下）（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



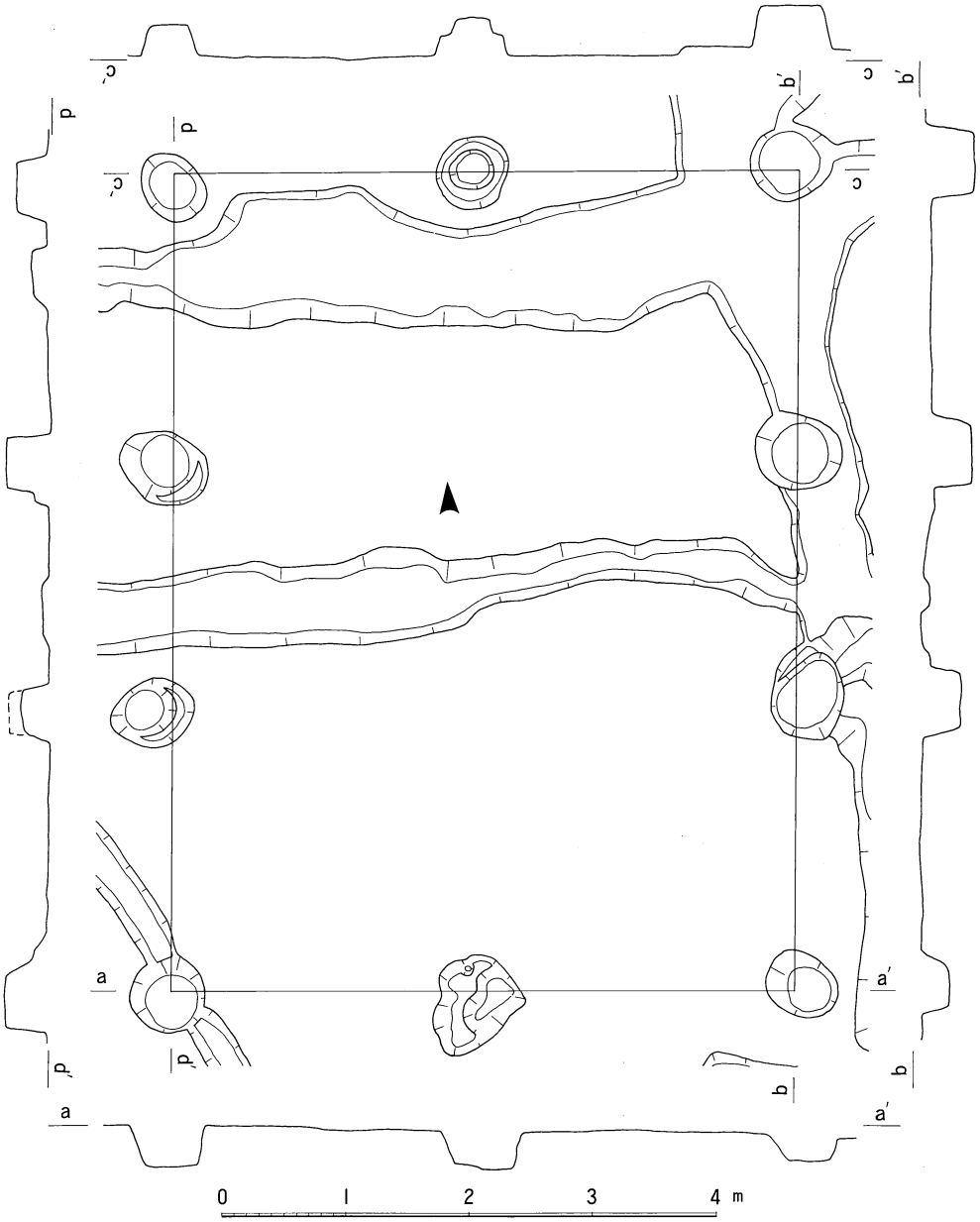
第６図　遺構実測図(2)　ＳＢ－０２（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



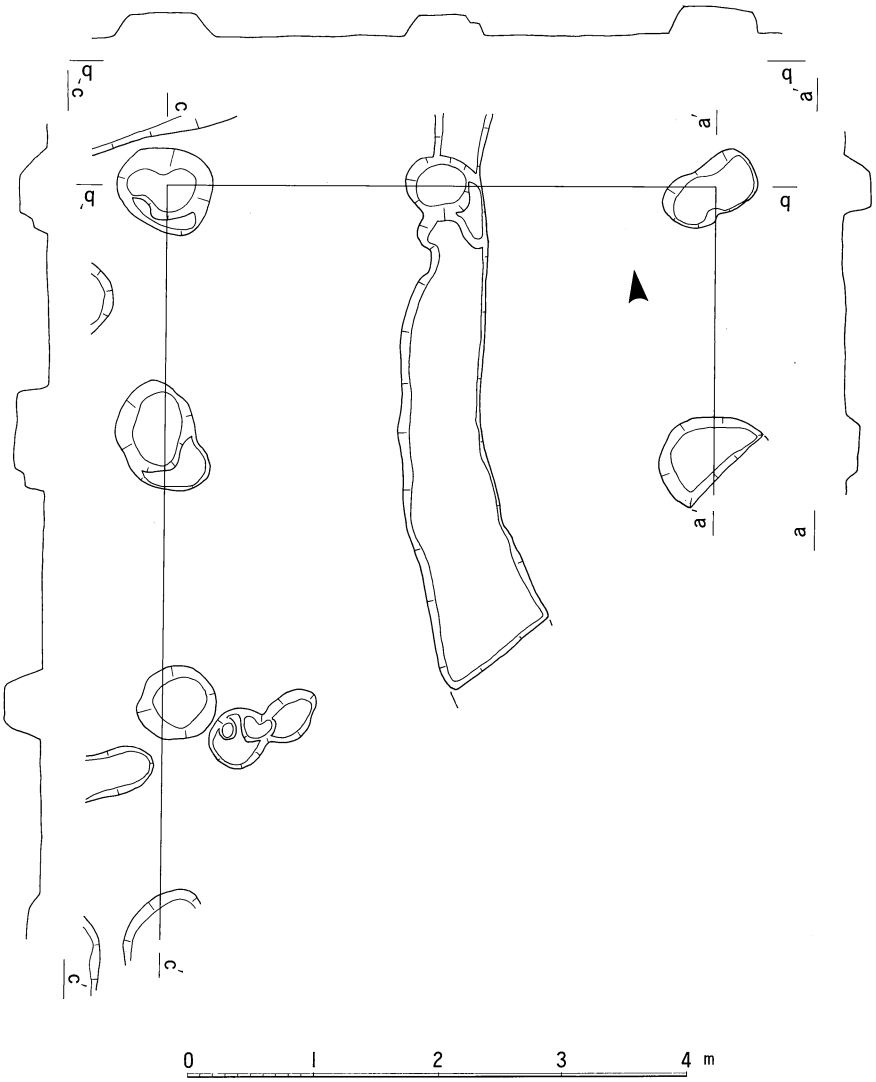
第７図　遺構実測図(3)　ＳＢ－０３（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



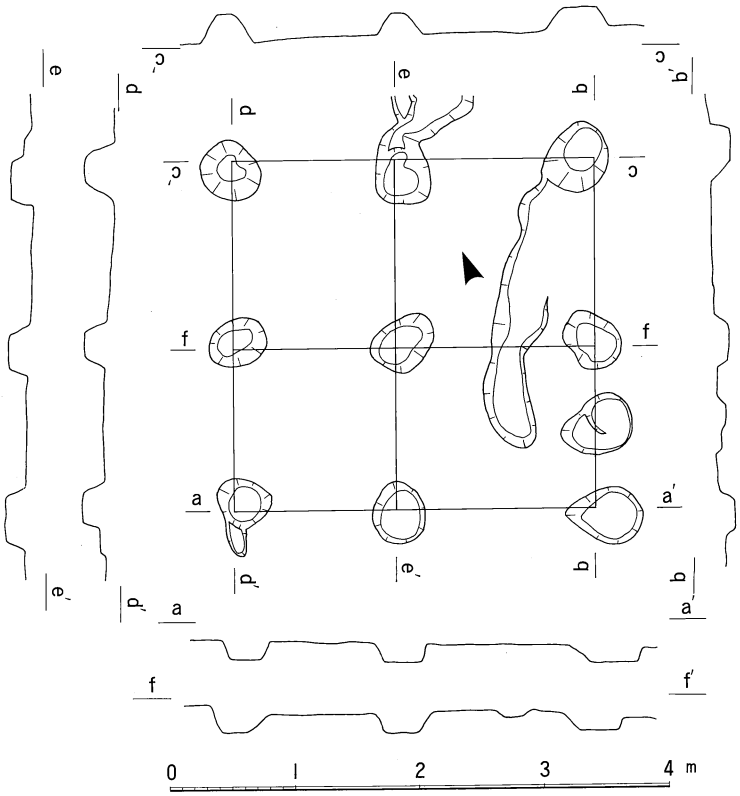
第８図　遺構実測図(4)　ＳＢ－０４（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



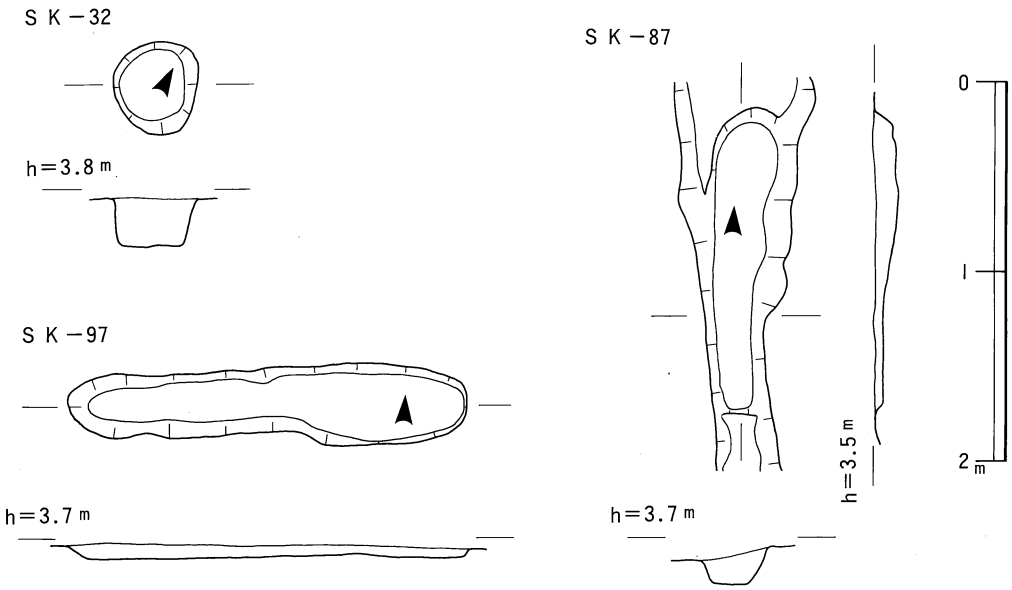
第９図　遺構実測図(5)　ＳＢ－０６（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



第10図　遺構実測図(6)　ＳＢ－０７（１/60）断面の基準高は３．８ｍ



第11図　遺構実測図(7)　ＳＢ－０８（１/60）断面の基準高は３．７ｍ



第12図　遺構実測図(8)　ＳＫ－３２・ＳＫ－８７・ＳＫ－９７（覆土はいずれも黒色砂質土）

ＳＤ－０３：遺構集中区の中央を、北東・南西方向に流れる。確認した長さは約35ｍ、幅は60～80㎝である。建物とは方向が一致しない。ＳＤ－１５・ＳＢ－０３より新しい。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－０４：遺構集中区ほぼ中央に位置し、南北方向にほぼ直線にのびる。確認した長さは約19ｍである。北側はＳＤ－０３と交差する付近で曖昧になる。幅は60～100㎝で、北半はＳＢ－０３の桁行と約1.5ｍ離れて平行する。ＳＤ－０２より新しい。主に北側で須恵器破片と、土師器破片が多数出土した。うち12点を図示した。

ＳＤ－０５：遺構集中区ほぼ中央を南北方向に流れる。確認した長さは約８ｍ、幅は約40㎝である。ＳＢ－０４の桁行方向に平行する。土師器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－０６：遺構集中区北側を南北方向に流れる。確認した長さは約２ｍ、幅は約40㎝。ＳＤ－０５とつながる可能性がある。土師器破片が出土。

ＳＤ－０７：遺構集中区西側を南北方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約60㎝。ＳＢ－０６の桁行方向とほぼ平行する。ＳＤ－１５と直角につながる可能性がある。ＳＤ－１６・２７より新しく、ＳＤ－０３より古い。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－０８：遺構集中区西側を南北方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約40㎝。土師器・須恵器破片が出土。

ＳＤ－０９：遺構集中区西側を南北方向に流れる。確認した長さは約５ｍ、幅は約40㎝。ＳＢ－０２の桁行方向と平行する。土師器破片が出土。

ＳＤ－１０：遺構集中区西側を南北方向に流れる。途中でいったん途切れるが、長さは約14ｍ、幅は約60㎝。ＳＢ－０６の桁行方向と平行する。ＳＤ－０２・１７より新しい。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－１１：遺構集中区北側を北東・南西方向に流れる。確認した長さは約３ｍ、幅は約20㎝である。土師器破片が出土。

ＳＤ－１２：遺構集中区を東西方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は40～60㎝である。土師器破片が出土。

ＳＤ－１３：遺構集中区南側に位置し、一辺約10ｍの「コ」の字状に流れる。ＳＢ－０６より古い。土師器・須恵器破片が出土。うち４点を図示した。

ＳＤ－１４：遺構集中区西側を南北方向に流れる。確認した長さは約８ｍ、幅は約80㎝である。ＳＤ－２４と接するが、新旧関係は不明。ＳＢ－０３の桁行方向と平行する。土師器・須恵器破片が出土。うち６点を図示した。

ＳＤ－１５：遺構集中区西側を東西方向に流れる。確認した長さは約５ｍ、幅は約60㎝である。ＳＢ－０６の梁行方向と平行する。ＳＤ－０７と直角につながる可能性がある。土師器破片が出土。

ＳＤ－１６：遺構集中区南側を東西方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約40㎝であ

る。ＳＤ－０７より古い。土師器破片が出土。

ＳＤ－１８：遺構集中区南端を東西方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約40cmで、調査区外へのびる。土師器破片が出土。

ＳＤ－１９：遺構集中区東側を南北方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約40cmである。ＳＢ－０４の桁行方向と平行する。土師器・須恵器破片が出土。

ＳＤ－２０：遺構集中区東側を南北方向に流れる。確認した長さは約14m、幅は40～60cmで、調査区外へのびる。土師器・須恵器破片が出土。

ＳＤ－２１：遺構集中区北端を東西方向に流れたのち、やや直角に南方向に折れ曲がる。確認した長さは約40m、幅40～140cmである。土師器・須恵器破片が出土。

ＳＤ－２３：遺構集中区東側を南北方向に流れる。確認した長さは約７ｍ、幅は約40cmである。ＳＤ－０４と平行する。土師器破片が出土。

ＳＤ－２４：遺構集中区西側を南北方向に流れる。確認した長さは約７ｍ、幅は約80cmである。ＳＤ－１４と接するが、新旧関係は不明。ＳＢ－０２より新しい。土師器・須恵器破片が出土。うち５点を図示した。

ＳＤ－２５：遺構集中区中央を南北方向に流れる。確認した長さは約３ｍ、幅は約30cmである。土師器破片が出土。

ＳＤ－２６：遺構集中区中央を南北方向に流れる。確認した長さは約２ｍ、幅は約30cmである。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－２７：遺構集中区中央を東西方向に流れる。確認した長さは約３ｍ、幅は約40cmである。ＳＤ－０７より古い。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＤ－２９：遺構集中区南側を南北方向に流れる。確認した長さは約６ｍ、幅は約40cmで、調査区外へのびる。ＳＢ－０７の桁行方向と平行する。土師器破片が出土。

ＳＤ－３１：遺構集中区東側を南北方向に流れる。確認した長さは約７ｍ、幅は約30cmである。土師器破片が出土。

ＳＤ－３７：調査区東側を北西・南東方向に流れる。確認した長さは約15m、幅は約40cmである。土師器破片が出土。

ＳＤ－４０：調査区東側を北東・南西方向に流れる。確認した長さは約２ｍ、幅は約30cmである。須恵器破片が出土。１点を図示した。

ｃ　土坑

土坑は58基確認した。いずれも古代のものである。ここでは遺物を出土したものの中から主要なものを報告する。覆土は黒色砂質土である。

ＳＫ－３２：遺構集中区中央に位置する。直径約45cmの円形を呈し、深さは約25cmである。土師器・須恵器破片が出土。うち１点を図示した。

ＳＫ－８７：遺構集中区南側、ＳＤ－０４の下に位置し、80×20cmを測り、深さは溝底から

約10cmである。土師器・須恵器破片が出土。うち２点を図示した。

ＳＫ－９７：遺構集中区南側に位置する。100×20cmの楕円形を呈し、深さは約10cmである。土師器・須恵器破片が出土。うち３点を図示した。

ＳＢ	桁行柱間	梁行柱間	桁行長 cm	桁行長 尺	桁行長 平均cm	梁行長 cm	梁行長 尺	梁行長 平均cm	平面積 (㎡)	桁行柱間cm（尺）	梁行柱間cm（尺）	棟方向	方位	備考
1	2	2	284	9.5	142	258	8.6	129	7.3	140(4.7),144(4.8)	140(4.7),118(3.9)	－	N10°E	総柱建物
2	4	2	669	22.3	167	446	14.9	223	29.8	160(5.3),180(6.0) 154(5.1),175(5.8)	215(7.2),231(7.7)	南北棟	N３°E	
3	4	2	792	26.4	198	480	16.0	240	38.0	190(6.3),200(6.7) 190(6.3),212(7.1)	235(7.8),245(8.2) e－e′190(6.3),120 (4.0) ,170 (5.7)	南北棟	N１°E	
4	3	2	650	21.7	217	530	17.7	265	34.5	210(7.0),210(7.0) 230 (7.7)	265(8.8),265(8.8)	南北棟	N13°E	
5	2	2	290	9.7	145	280	9.3	140	8.1	140(4.7),150(5.0)	120(4.0),160(5.3)	－	N５°E	総柱建物
6	3	2	660	22.0	220	506	16.9	253	33.4	227(7.6),200(6.7) 233 (7.8)	240(8.0),266(8.9)	南北棟	N４°E	
7	3	2	604	20.1	201	440	14.7	220	26.6	190(6.3),200(6.7) 214 (7.1)	220(7.3),220(7.3)	南北棟	N８°E	梁行３間で復原
8	2	2	290	9.7	145	280	9.3	140	8.1	160(5.3),130(4.3)	130(4.3),150(5.0)	－	N20°E	総柱建物

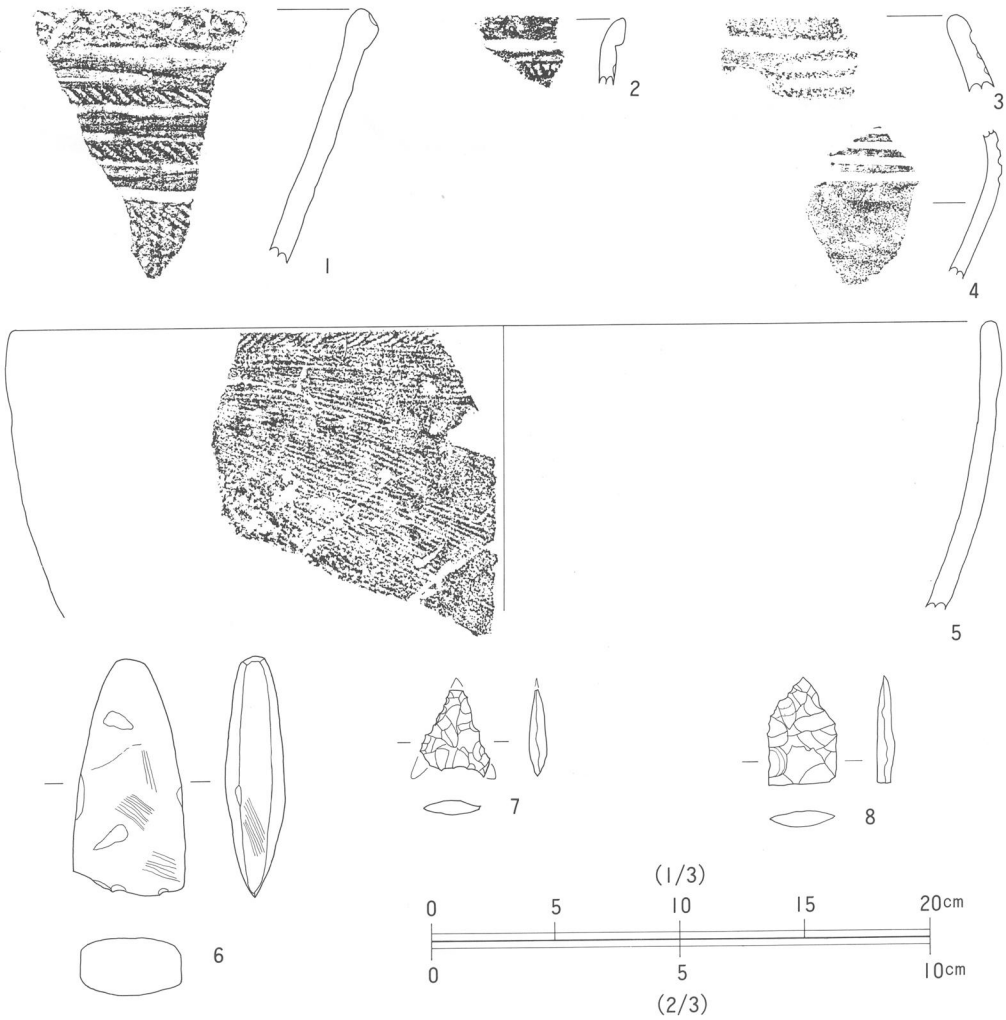
第Ｉ表　掘立柱建物一覧表

第４節　遺物

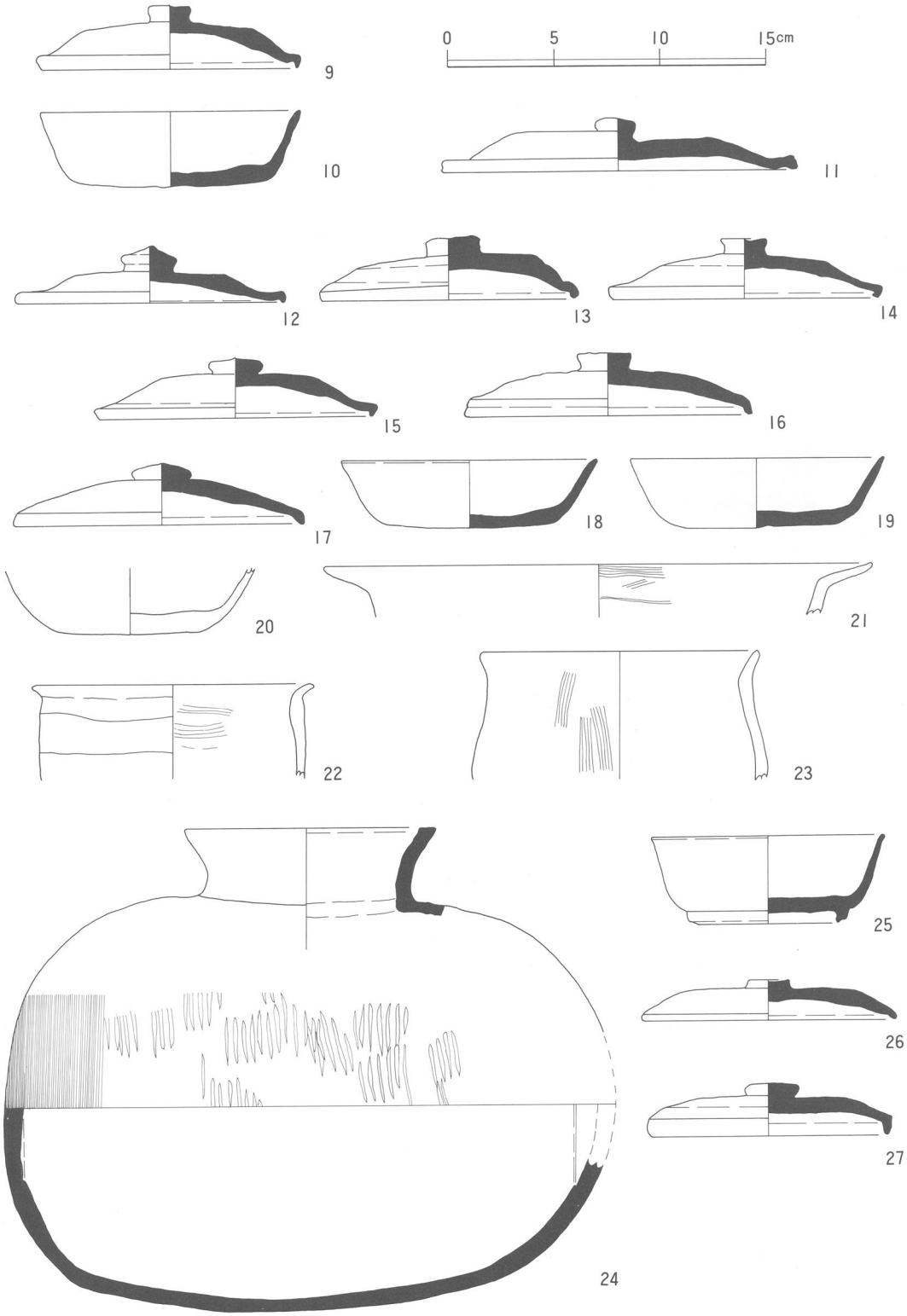
遺物は縄文土器、石器、古代須恵器、古代土師器、中世土師器、中世陶磁器がある。このうち、縄文時代と中世の遺物は、いずれも包含層のみの出土である。古代の遺物は、遺構出土のものについては遺構ごと、その他については包含層出土としてまとめて記述する。なお、古代の図化資料については、巻末に観察表を掲載した。

ａ　縄文土器（第13図１～５）

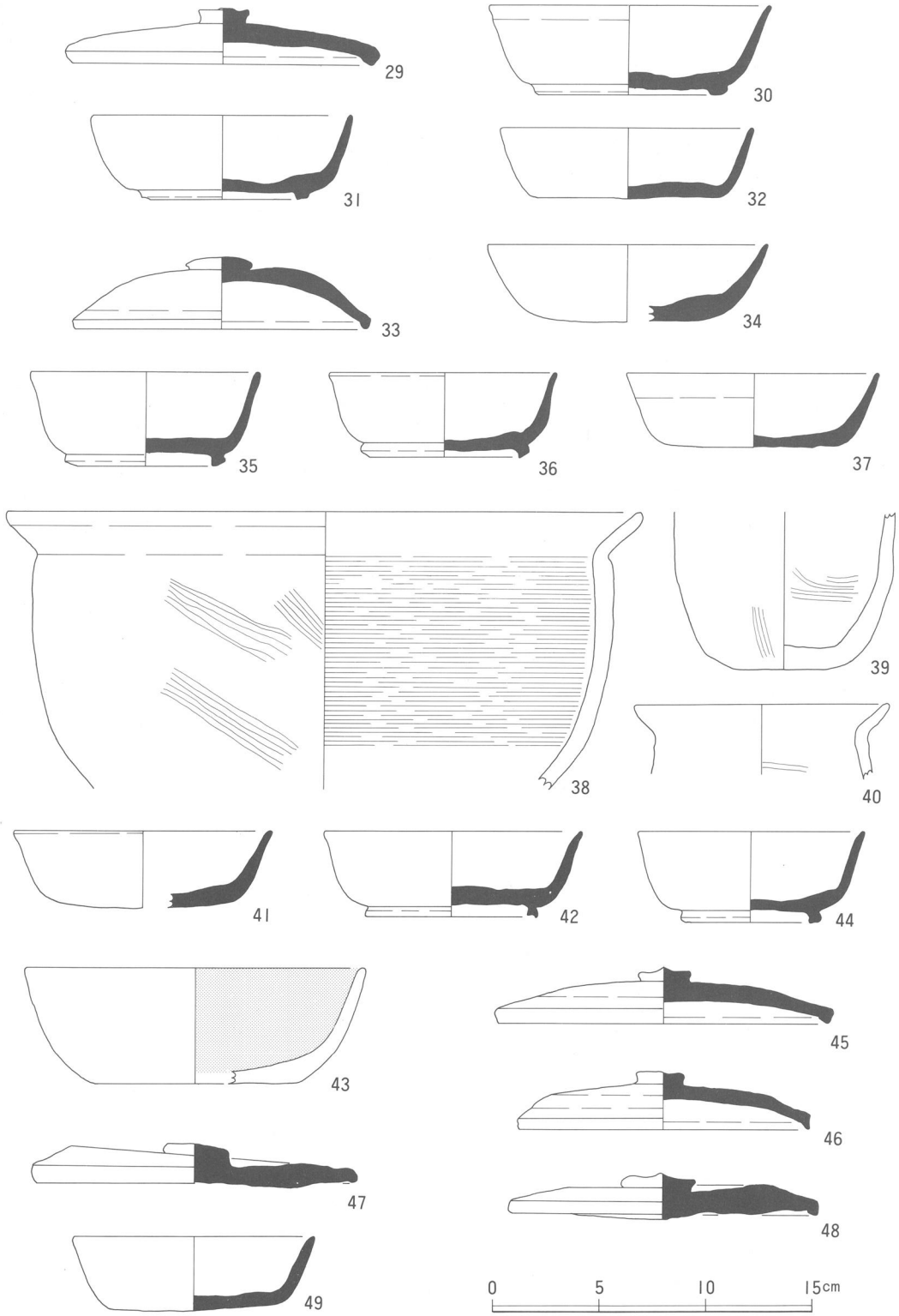
いずれも破片の出土であり、全体をうかがえる資料はない。個体数で約10個体か。いずれも後晩期のものと思われる。うち５点を図示した。１は平縁の深鉢。幅広の浅い沈線帯と縄文を施し、口縁部が肥厚する。後期のものであろう。２は平縁の深鉢で、三角形刺突文を施す。後



第13図　遺物実測図(1)　包含層：縄文時代（７・８は２／３）



第14図　遺物実測図(2)　遺構：古代



第15図　遺物実測図(3)　遺構：古代

期のものか。３・４は浅鉢で沈線を施す。晩期のものか。５は大型の深鉢で口径は約19㎝。口縁部に斜行縄文を施し、体部に右下がりの条痕文を施す。晩期後葉か。

ｂ　石器（第13図６～８）

縄文時代の石鏃４点と磨製石斧１点がある。石鏃は２点を図示した。７は無茎のもので重量は0.7ｇ、石材はメノウである。８は基部を欠き、重量は1.2ｇ、石材は玉髄である。石槍の可能性もある。図示しなかった２点はいずれも無茎で、石材はチャートであるが、摩滅が激しい。重量は、2.1ｇと0.7ｇである。６は磨製石斧で、石材は凝灰岩。長さ9.5㎝、幅4.6㎝、厚さ2.3㎝で、重量は140ｇ。後晩期のものか。

ｃ　古代土器（第14図～第25図・第29図）

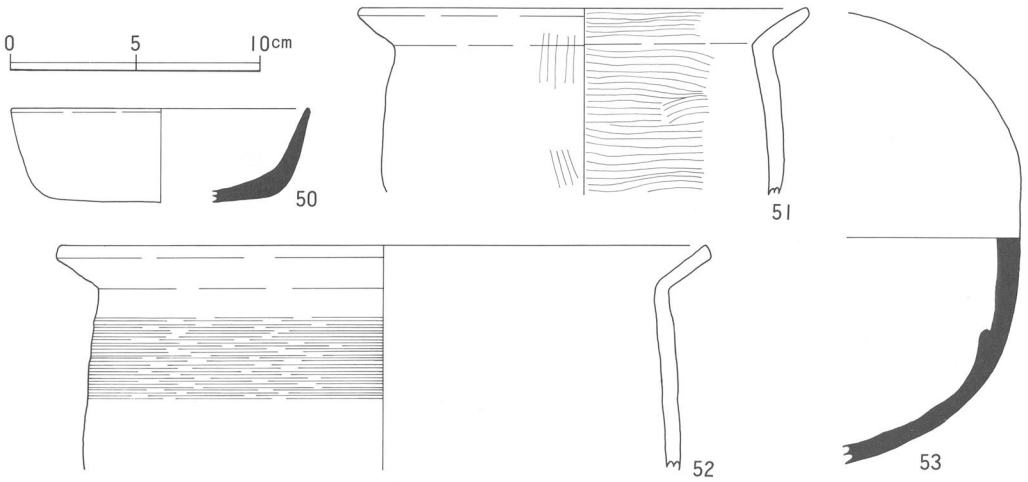
須恵器は杯・杯蓋・高杯・鉢・蓋・瓶・横瓶・甕があり、土師器は杯・杯蓋・甕・鍋・製塩土器がある。なお杯蓋のうち、内面にかえりのあるものを杯Ａ蓋、無いものを杯Ｂ蓋、高台の無い杯を杯Ａ、高台のある杯を杯Ｂと記述する。

ＳＢ－０３：９は須恵器杯Ｂ蓋である。口径12.0㎝、器高3.0㎝を測る。口縁端部は真下におろし、頂部外面は回転ナデを施す。つまみはボタン状である。10は須恵器杯Ａである。口径12.2㎝、器高3.6㎝を測る。底部はヘラ切り未調整。共に柱穴覆土から出土した。

ＳＢ－０４：11は須恵器杯Ｂ蓋である。口径16.5㎝、器高2.5㎝を測る。口縁で一度くびれ、端部の折れは甘い。頂部は回転ナデを施し、内面にヘラ記号「｜」がある。柱穴覆土から出土した。

ＳＤ－０３：12は須恵器杯Ｂ蓋である。口径12.5㎝、器高2.8㎝を測り、宝珠状のつまみが着くが、体部は偏平で、口縁端部も小さい。頂部は回転ナデを施す。

ＳＤ－０４：13～17は須恵器杯Ｂ蓋である。口径は11.8～13.7㎝、器高は2.9～3.0㎝を測る。



第16図　遺物実測図(4)　遺構：古代

いずれも頂部は回転ナデ調整であり、16～17の口縁端部は外反する。13・14・16のつまみはボタン状で、15・17のつまみは偏平な宝珠状である。16は内面にヘラ記号「×」があり、漆が付着している。18・19は須恵器杯Ａである。18は口径11.8cm、器高3.2cmを測り、19は口径12.0cm、器高3.3cmを測る。共に口縁のやや外反する浅い器形で、底部外面はヘラ切り未調整である。25は須恵器杯Ｂである。口径11.0cm、器高4.1cmを測る。口縁はやや外反し、高台は内傾する。底部外面は回転ナデ調整であり、ヘラ記号「×」がある。24は須恵器横瓶である。接合によりほぼ全形を知ることができ、口径22.0cmを測る。口縁端部は水平である。胴部外面は、一部カキメで、他は粗い叩き目を残す。内面は、ナデ調整である。また胴部の閉塞円盤が両側で確認できる。20は土師器又は生焼けの須恵器杯か。底部は厚く、体部は薄い。底部外面はヘラ切り未調整である。21は土師器鍋であろう。口径25.8cmを測り、非ロクロ成形。内面ハケメ、外面の調整は不明である。22は土師器小形甕である。口径12.0cmを測り、非ロクロ成形。外面ヨコナデ、内面ハケメ調整で、口縁内側に漆が付着している。23は土師器甕である。口径12.8cmを測り、非ロクロ成形。外面ハケメ、内面ヨコナデ調整。

ＳＤ－０７：26は須恵器杯Ｂ蓋である。口径12.0cm、器高1.9cmを測る。つまみは偏平で、口縁端部は軽く折り曲げる。頂部は回転ナデ調整を施す。

ＳＤ－１０：27は須恵器壷蓋であろう。口径11.0cm、器高2.5cmを測る。つまみは偏平で、頂部は回転ナデ調整を施す。口縁端部は高く、真下におろす。

ＳＤ－１３：29は須恵器杯Ｂ蓋である。口径14.0cm、器高2.7cmを測る。全体的に厚めのつくりで、頂部は回転ナデ調整を施す。口縁端部の断面は三角形である。30・31は須恵器杯Ｂである。30は口径13.3cm、器高4.3cmを測り、31は口径12.2cm、器高4.0cmを測る。30の高台は水平、31はやや内傾する。共に破片が摩滅している。32は須恵器杯Ａである。口径11.8cm、器高3.3cmを測る。底部はヘラ切り未調整であり、ヘラ記号「×」がある。

ＳＤ－１４：33は須恵器杯Ｂ蓋である。口径13.7cm、器高3.4cmを測る。偏平なつまみを有し、山笠状の体部で、口縁端部は真下におろす。頂部外面は回転ナデ調整を施す。34・37は須恵器杯Ａである。34は口径13.1cm、器高3.6cmを測る。底部と体部の境が不明瞭で、体部の傾斜がゆるい器形である。底部はヘラ切り未調整で、ヘラ記号「×」がある。破片が摩滅している。37は口径11.9cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切り未調整。35・36は須恵器杯Ｂである。35は口径10.6cm、器高4.5cmを測る。口縁がやや外反し、高台は内傾する。底部は回転ナデ調整を施す。36は口径10.7cm、器高4.0cmを測る。口縁がやや外反し、高台は内傾する。底部は回転ナデ調整を施し、ヘラ記号「×」がある。38は土師器鍋である。口径30.0cmを測る。外面ヨコナデ、内面カキメ調整を施す。外面に煤が付着する。

ＳＤ－２４：41は須恵器杯Ａである。口径12.0cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラ切り未調整であり、漆が付着する。42は須恵器杯Ｂである。口径12.2cm、器高4.0cmを測る。口縁はやや外反し、高台は外傾する。底部はヘラ切り未調整である。43は土師器の内黒杯である。口径15.8cm、

器高5.5cmを測る。底部と体部の境が明瞭で、口縁端部は丸くおさめる。39・40は小型甕である。39は非ロクロ成形で、内外面にハケメを施す。煤が付着する。40は口径12.0cmを測り、非ロクロ成形で、調整は内面ハケメ、外面は不明である。

ＳＤ－２６：44は須恵器杯Ｂである。口径10.6cm、器高4.3cmを測る。口縁はやや外反し、高台は水平である。底部はヘラ切り未調整である。

ＳＤ－２７：45は須恵器杯Ｂ蓋である。口径15.5cm、器高2.7cmを測る。偏平な宝珠状つまみに、偏平な体部がつく。口縁端部の断面は三角形である。頂部外面は回転ナデ調整を施す。

ＳＤ－４０：46は須恵器杯Ｂ蓋である。口径13.7cm、器高2.7cmを測る。やや偏平なボタン状つまみを有し、口縁端部はやや外反する。頂部外面は回転ナデ調整を施す。

ＳＫ－３２：47は須恵器杯Ｂ蓋である。口径15.0cm、器高2.0cmを測る。焼き歪みがひどい。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。

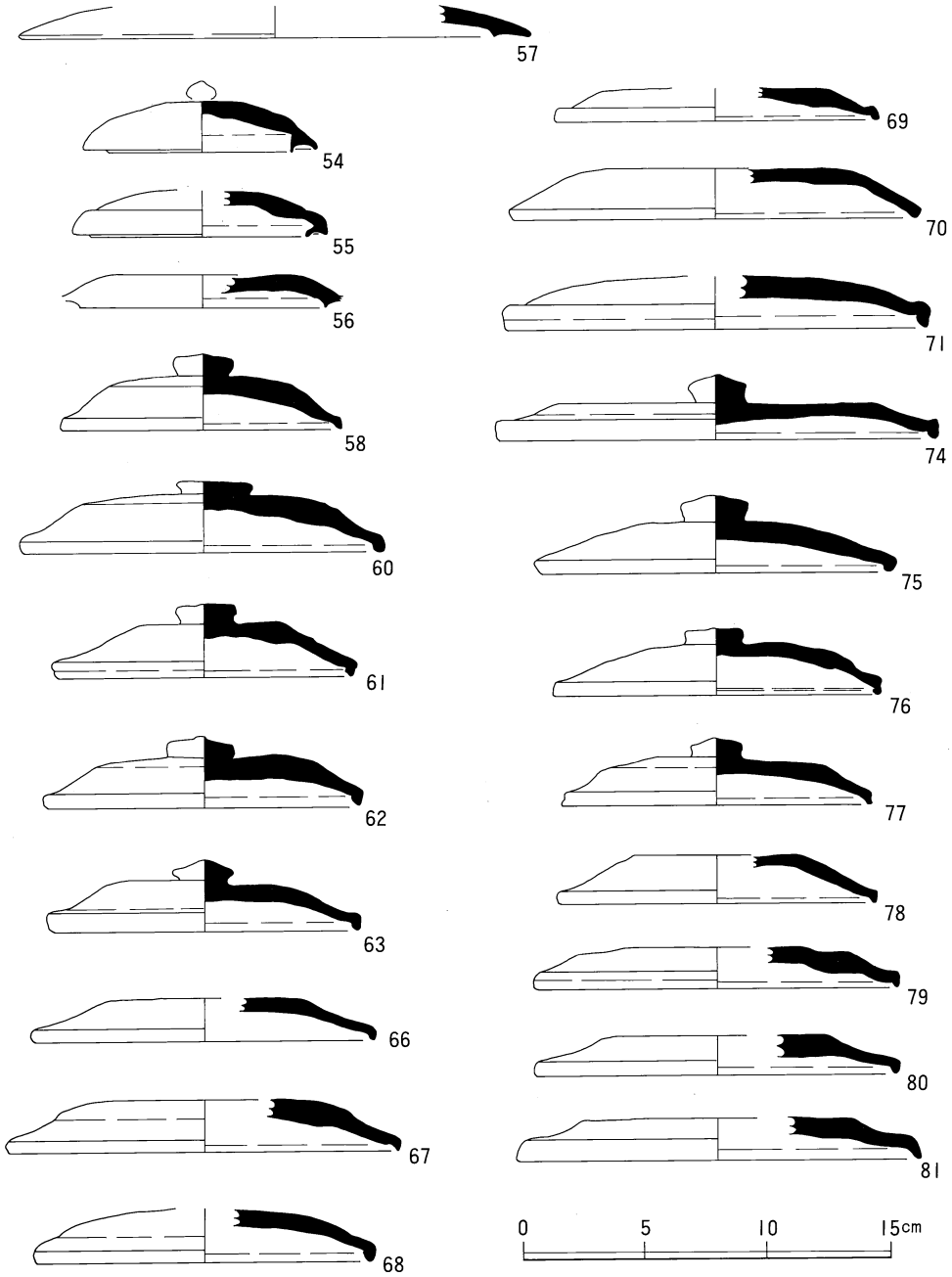
ＳＫ－８７：48は須恵器杯Ｂ蓋である。口径14.5cm、器高2.2cmを測る。焼き歪みがひどい。厚ぼったい作りで、頂部外面は回転ナデ調整を施す。49は須恵器杯Ａである。口径11.3cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラ切り未調整である。

ＳＫ－９７：50は須恵器杯Ａである。口径12.0cm、器高3.8cmを測る。底部は回転ナデ調整を施す。53は須恵器横瓶である。胴部の破片であり、閉塞円盤が観察できる。調整は内外面ともヨコナデである。51・52は土師器甕である。51は口径18.0cmを測る。非ロクロ成形で、内外面ハケメ調整である。52は口径26.0cmを測る。調整は外面カキメ、内面ヨコナデである。口縁端部は面をとり、角をもつ。

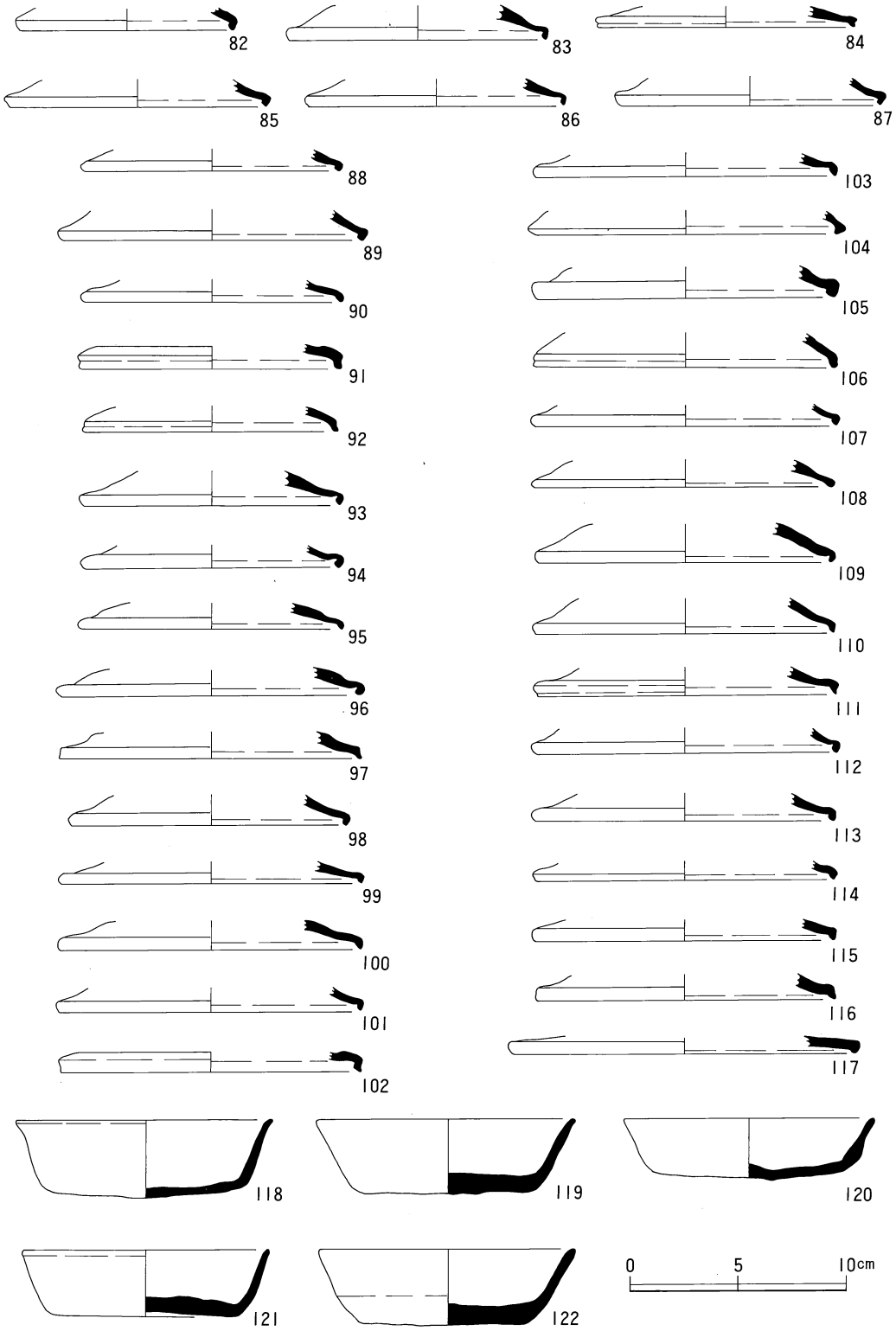
包含層：

54～57は須恵器杯Ａ蓋である。54は口径9.6cmを測る。つまみを欠くが、接合面の径から、宝珠状のものがつくと思われる。かえりは、口縁端部より下方に引き出す。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。55は口径10.4cmを測る。かえりは、口縁端部より下方に引き出す。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。56は口縁端部を欠く。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。57は口径20.8cmを測る。かえりはかなり低い。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。

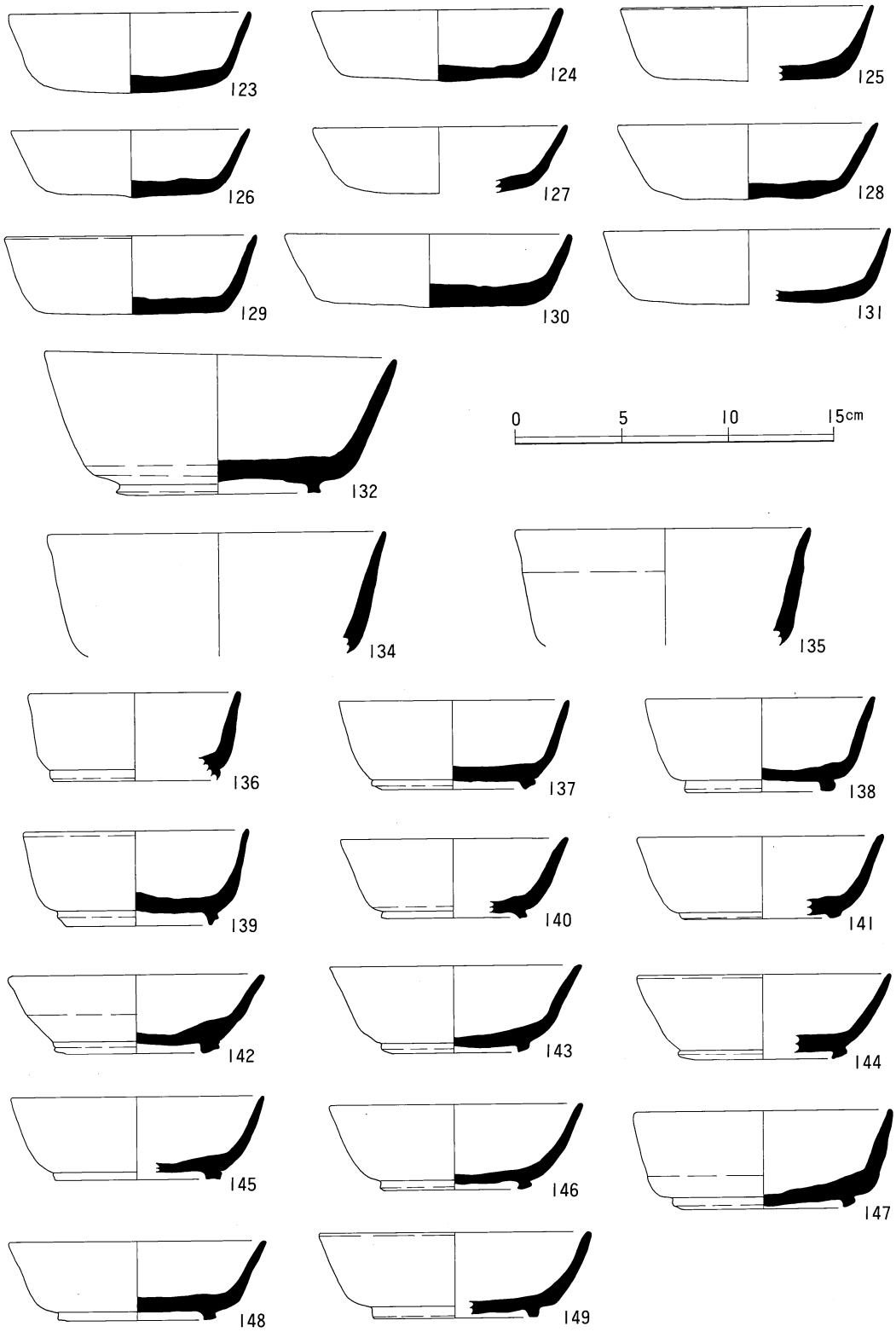
58～117・296・297は須恵器杯Ｂ蓋である。器高の判明した資料は少ないが、2.6cmから3.3cmのものがあり、3.0cm前後のものがほとんどである。つまみは宝珠状のもの（58・62・63・65・74・75・77・296）とボタン状のもの（60・61・76・297）があり、直径は2.0～3.0cmである。口縁端部は、真下におろすもの、内傾するもの、外反するもの、あまり折れないものなど、各種ある。頂部外面の調整は、確認できたもののうち22%が回転ヘラケズリ、78%が回転ナデである（遺構出土の資料を含むと、前者が15%，後者が85%になる）。なお、62には「｜」のヘラ記号がある。なお、杯Ｂ蓋の口径は図化しなかった資料も含めると、10.0cmから18.0cmのものまでがあり、12.0cm前後・12.8cm前後・14.0cm前後・15.0cm前後・16.0cm前後のものが多く、このうち主体となるのは14.0cm前後のものである。



第17図　遺物実測図(5)　包含層：古代



第18図　遺物実測図(6)　包含層：古代



第19図　遺物実測図(7)　包含層：古代

118～131・298・299は、須恵器杯Ａである。口径11.2cmから13.4cmのものがあり、11.8cm～12.0cmのものが多い。器高は2.8cmから3.8cmのものがあり、3.5cm前後のものが多い。底部はすべてヘラ切り未調整である。119・121・124・129・131には「×」のヘラ記号がある。また、131は漆が付着する。

132～153・300～305は須恵器杯Ｂである。口径16.0cm～18.0cm、器高6.0cm～7.0cmのもの（132～135・300～302）と、口径9.8cm～13.4cm（主体は11.8cm～12.0cm）、器高3.5cm～4.7cm（主体は4.0cm前後）のものがある。高台は内傾するものが多く、次いで水平なものがある。底部の調整は、確認できたもののうち67％が回転ナデを施し、残り33％はヘラ切り未調整である。151・152は「×」の、139は「｜」の、144は判読不明のヘラ記号がある。

なお、図化しなかった杯を含めた口径の分布は、7.0cmから18.0cmまでであり、10.0cm～11.0cm、12.0cm前後、13.0cm～14.0cmが多く、主体は12.0cm前後である。

154は須恵器高杯であろう。脚径12.6cmを測る。

155は須恵器壷蓋であろう。155は口径10.0cmを測る。

157は鉢である。口径19.5cm、器高11.1cmを測る。内面はカキメ調整、外面は上半カキメで下半はヨコナデ調整を施す。158も鉢か。306も鉢である。口径12.8cm、器高5.8cmを測る。

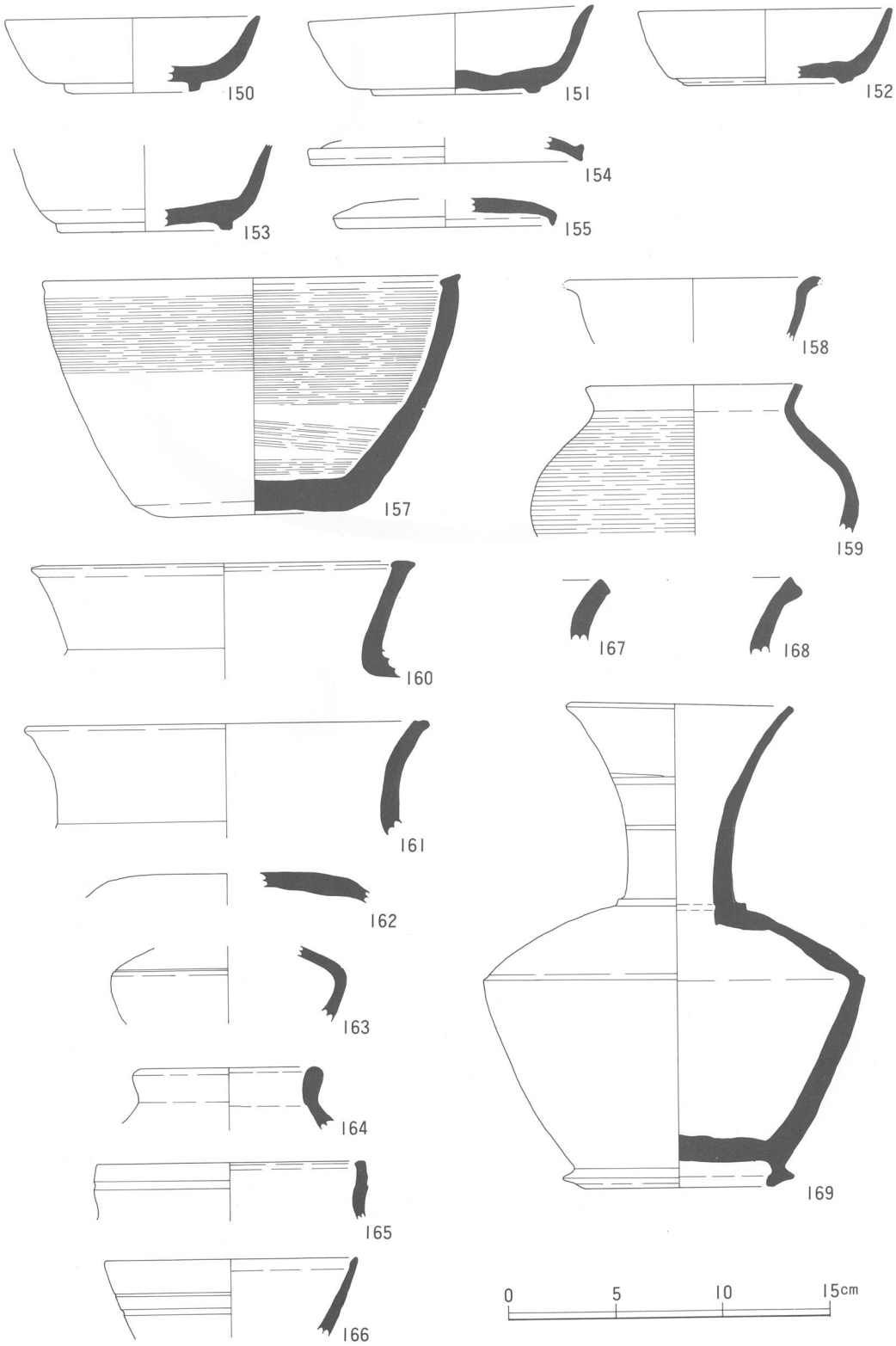
159～169は須恵器の瓶類である。159は口径9.6cmを測る。外面は粗いカキメを施す。160・161・167・168は広口瓶で、160は口径16.4cm、161は口径18.6cmを測る。162・163は体部の破片であり、164は口径8.2cmを測る。165は口径12.6cm、166は口径12.0cmを測る。169は長頸瓶である。接合により全形を知りうる。口径10.2cm、器高22.8cm、台径9.0cmを測る。口縁端部は軽く面取りをし、頸部付根に段をつくる。高台は幅広で内傾する。底部外面にヘラ記号「｜」がある。

170～173は須恵器横瓶である。170は口径10.0cmを測る。口縁端部は内傾する。体部は叩きとカキメによる調整を施す。171は口径12.0cm前後の口頸部にやや長い体部がつく。体部は叩きとカキメによる調整を施す。閉塞円盤は片方のみと思われる。172は口径10.0cm前後の口頸部にやや短い体部がつく。体部は叩きと、カキメによる調整を施す。173は体部のみの破片である。カキメ調整が観察できる。

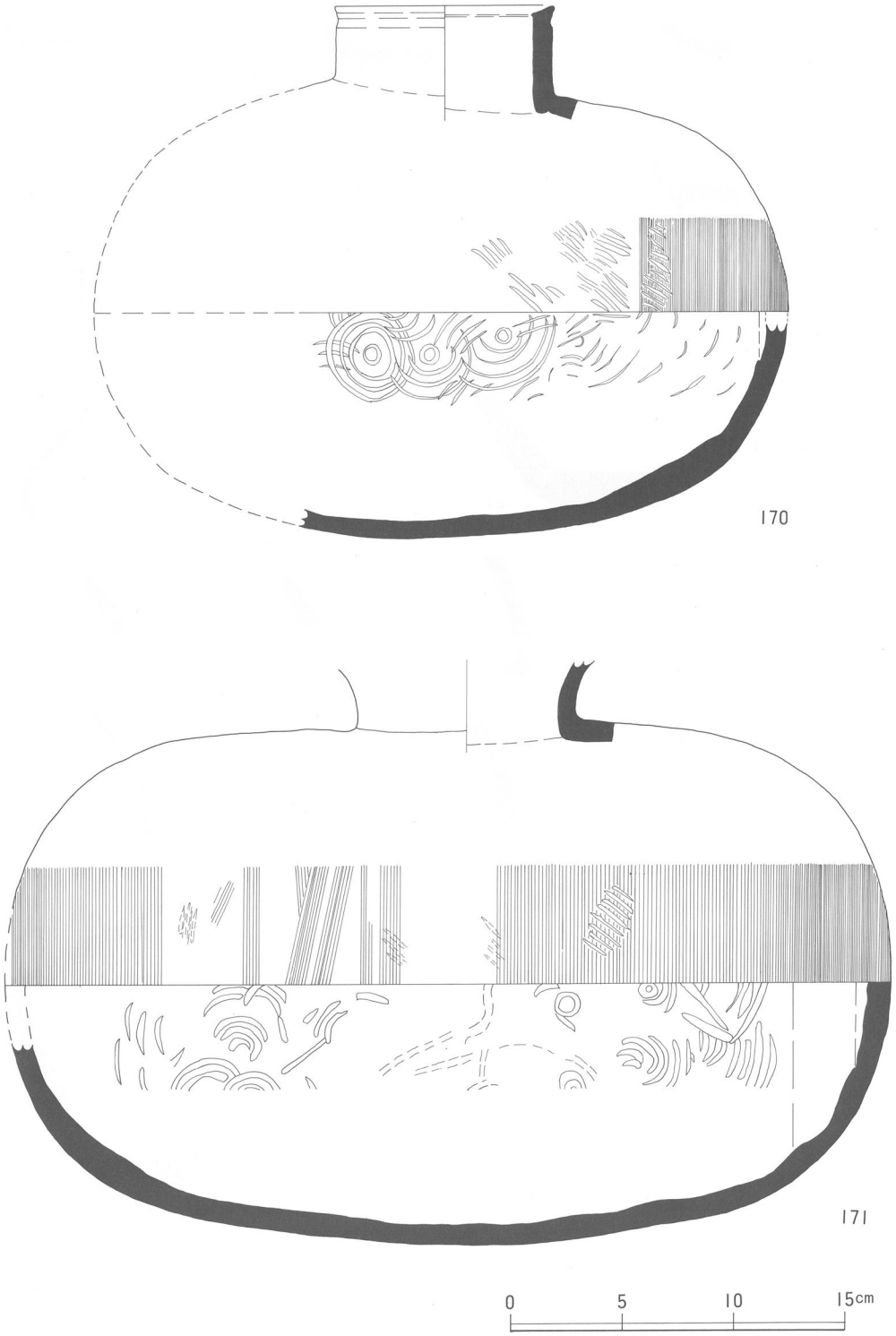
174～183は須恵器甕である。175は小型甕であり、口径15.6cmを測る。176は口径21.6cm、177は口径18.0cmを測る。178は口径31.6cm、179は口径23.9cm、180は口径26.0cmを測る。181は接合によって全形を知りうる資料である。口径23.0cm、器高47.2cmを測る。容積は約391である。182は口径19.5cm、183は口径20.8cmを測る。

184～185は土師器杯蓋であるが、成形・調整は須恵器と同じ技法である。184は口径13.4cm、器高3.0cmを測る。宝珠状のつまみを有し、頂部外面は回転ナデ調整を施す。185は口径13.0cmを測る。口縁端部は薄くなる。

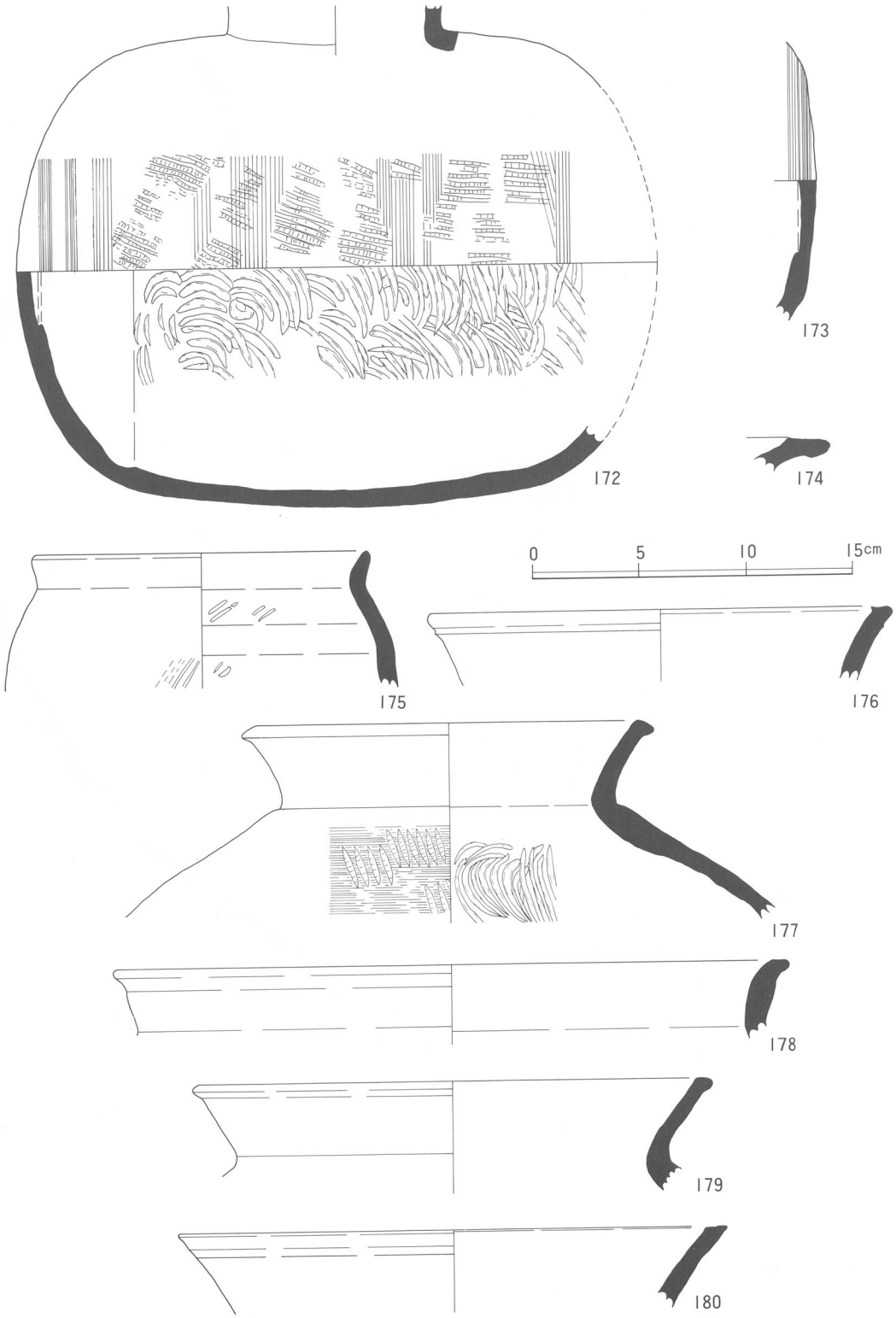
186・187は土師器杯である。186は口径19.8cm、器高5.4cmを測る内黒杯である。口縁端部が外反し、体部下半はヘラケズリを施す。187は口径14.0cmを測る内黒杯であり、外面は赤彩を施



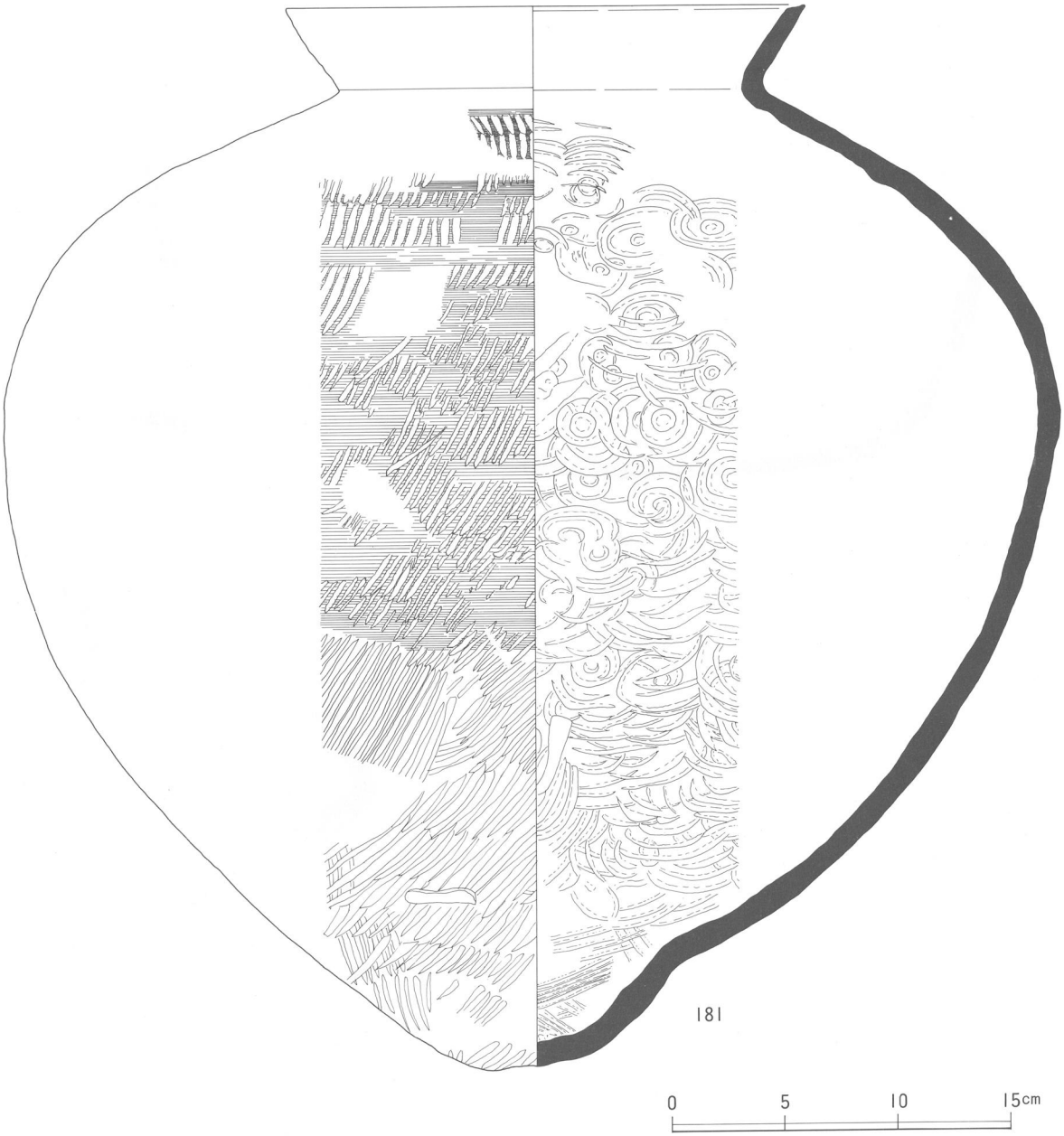
第20図　遺物実測図(8)　包含層：古代



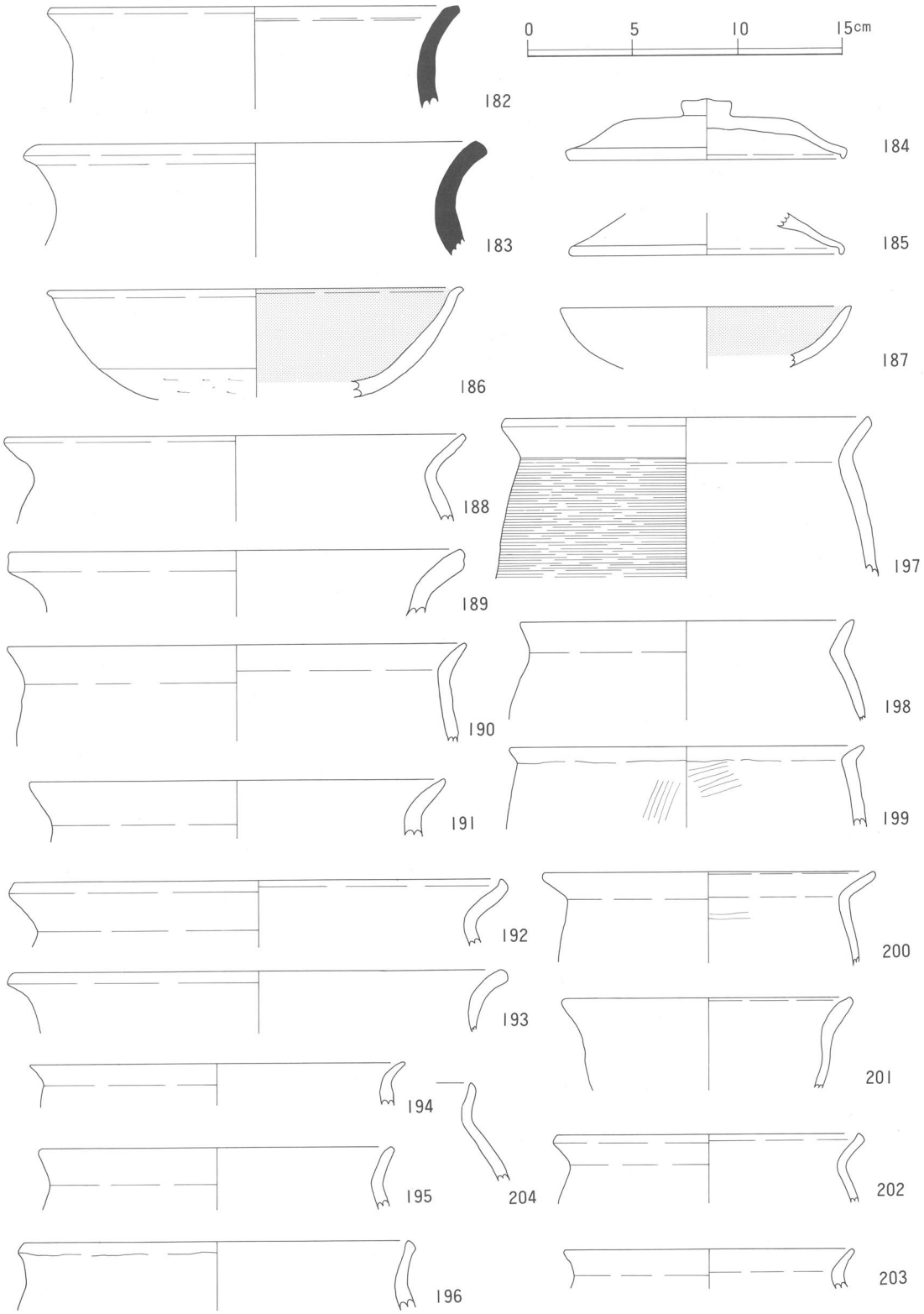
第21図　遺物実測図(9)　包含層：古代



第22図　遺物実測図(10)　包含層：古代



第23図　遺物実測図(11)　包含層：古代



第24図　遺物実測図(12)　包含層：古代

す。

188～207は土師甕である。甕はほとんどが細片であり、全形を知りうるものはない。以下、口縁部の残存した破片を中心に、主要なものを図示した。口径では、10.0cm前後の小型品である206・207を除いて、13.6cmから23.4cmのものがある。196・199・201は非ロクロ成形である。196は口縁がゆるく外反し、端部を面取りする。199は口縁部を外に折り曲げる。内外面ハケメ調整を施す。201は肥厚した口縁がゆるく外反する。他の資料は口縁部の形態によって、「く」の字状で端部の丸いもの（190・191・194・195・198・203）、「く」の字状で端部を面取りするもの（188・193・197・202）、口縁端部を真上に引き上げるもの（192・200）、その他（189・177）がある。調整を観察できるものでは、197は外面カキメ内面ヨコナデ調整、190・198・200が内外面ヨコナデ調整である。205は体部下半の破片である。外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ調整である。206・207は非ロクロ成形の小型甕である。206は口縁がゆるく外反し、207は外に折り曲げる。

208～211は土師器鍋である。209と210は非ロクロ成形である。208は口径37.0cmを測る。内外面カキメ調整を施す。口縁端部は面取りする。209は口径34.0cmを測る。外面ヨコナデ、内面ハケメ調整を施す。肥厚した口縁がゆるく外反する。210は口径22.0cmを測る。内面にハケメ調整を施す。211は口径18.0cmである。内面ハケメ調整か。

212～221の10点は、棒状尖底製塩土器の底部破片である。いずれも胎土に砂粒を多く含み、黄褐色～赤褐色を呈する。尖底部の長さが３cm前後の215・216・218・219・220と、４cm以上の212・213・214・217・221の２群に分類できる。このタイプの製塩土器は７世紀代を中心に、能登地域で盛行したものである。氷見市内でも製塩遺跡とされる九殿浜遺跡をはじめ、大境洞窟・藪田遺跡・阿尾島尾Ａ遺跡で確認されている。本遺跡には７世紀の資料が少ないが、近年の調査で棒状尖底製塩土器は８世紀以降にも残存することが明らかになってきているため、本遺跡例は古代土器の年代に沿うものと考え、時期については幅をもたせておく。

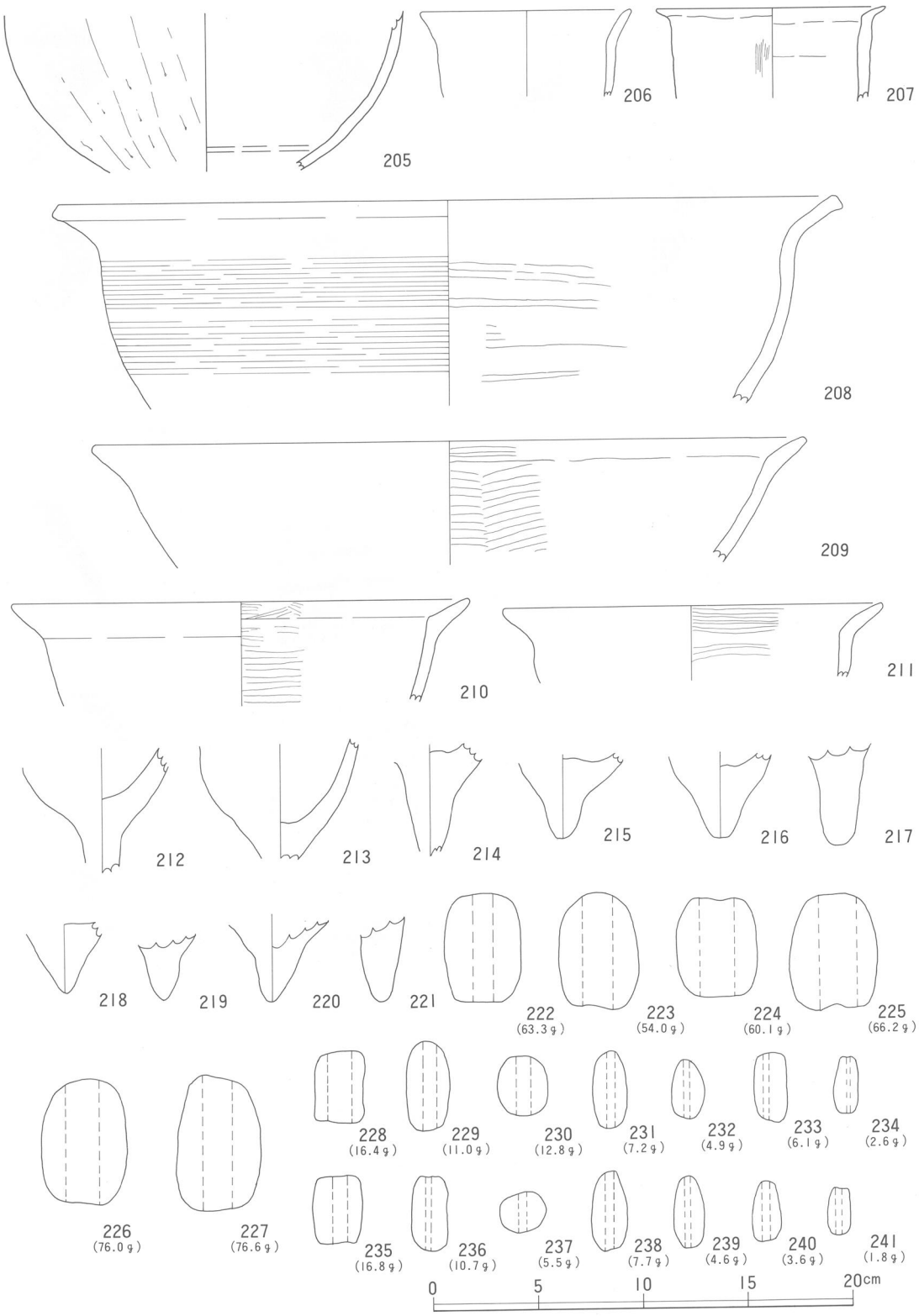
222～241は土錘である。古代のところで扱うが、中世のものである可能性もある。大型のもの（222～227）と小形のもの（228～241）の２群に分類できる。大型のものは、長さ4.7～6.4cm、幅3.7～4.3cm、重量54.0～76.6ｇである。小形のものは、長さ2.0～4.3cm、幅1.1～2.4cm、重量1.8～16.8ｇである。

ｄ　中世（第26図～第28図）

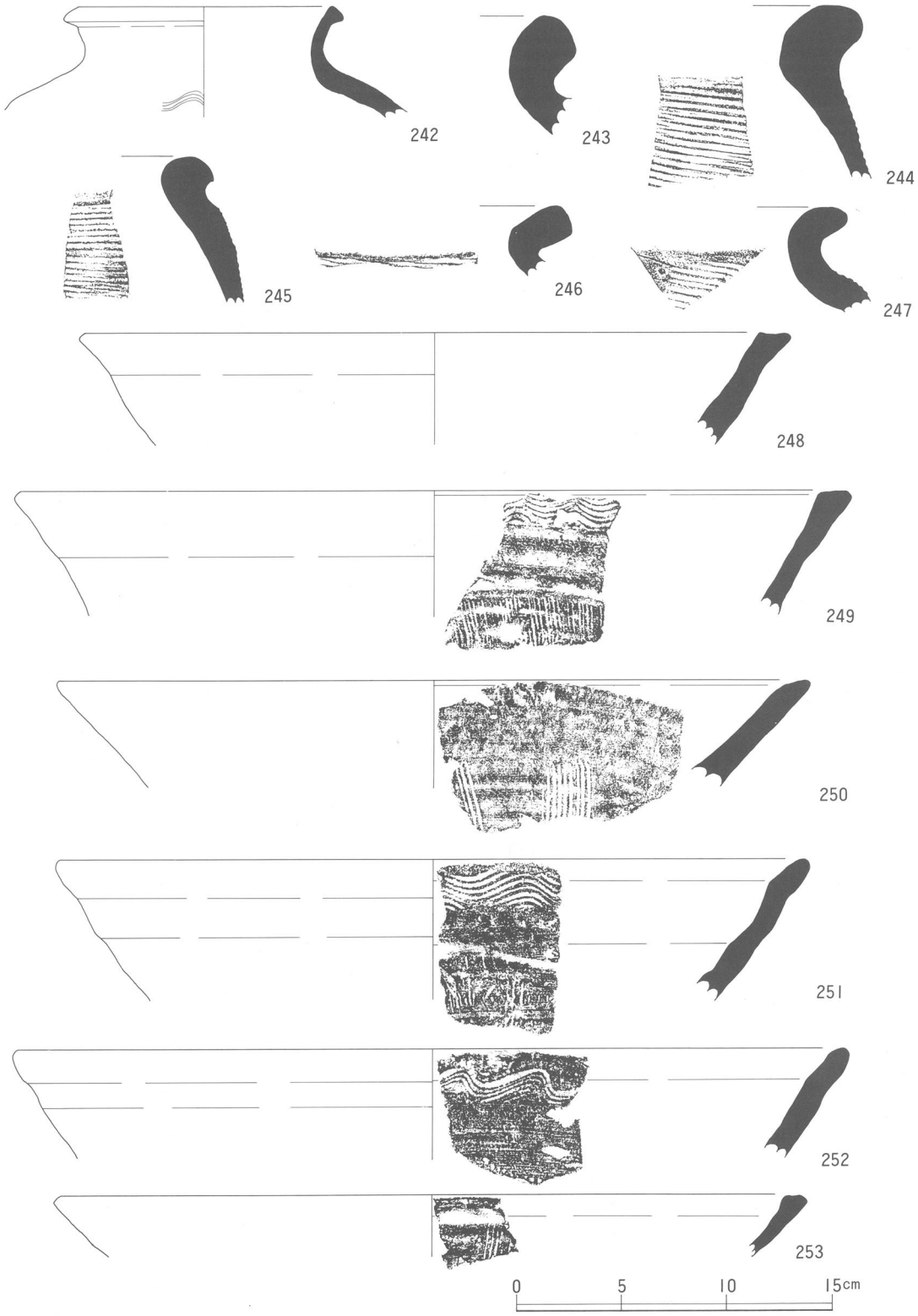
242～266は珠洲である。242は壷で、口径12cmを測る。口縁端部断面は三角形で、肩部に櫛目波状文を施す。13世紀のものか。

243～247は甕である。いずれも13世紀後半～14世紀前半頃のものか。

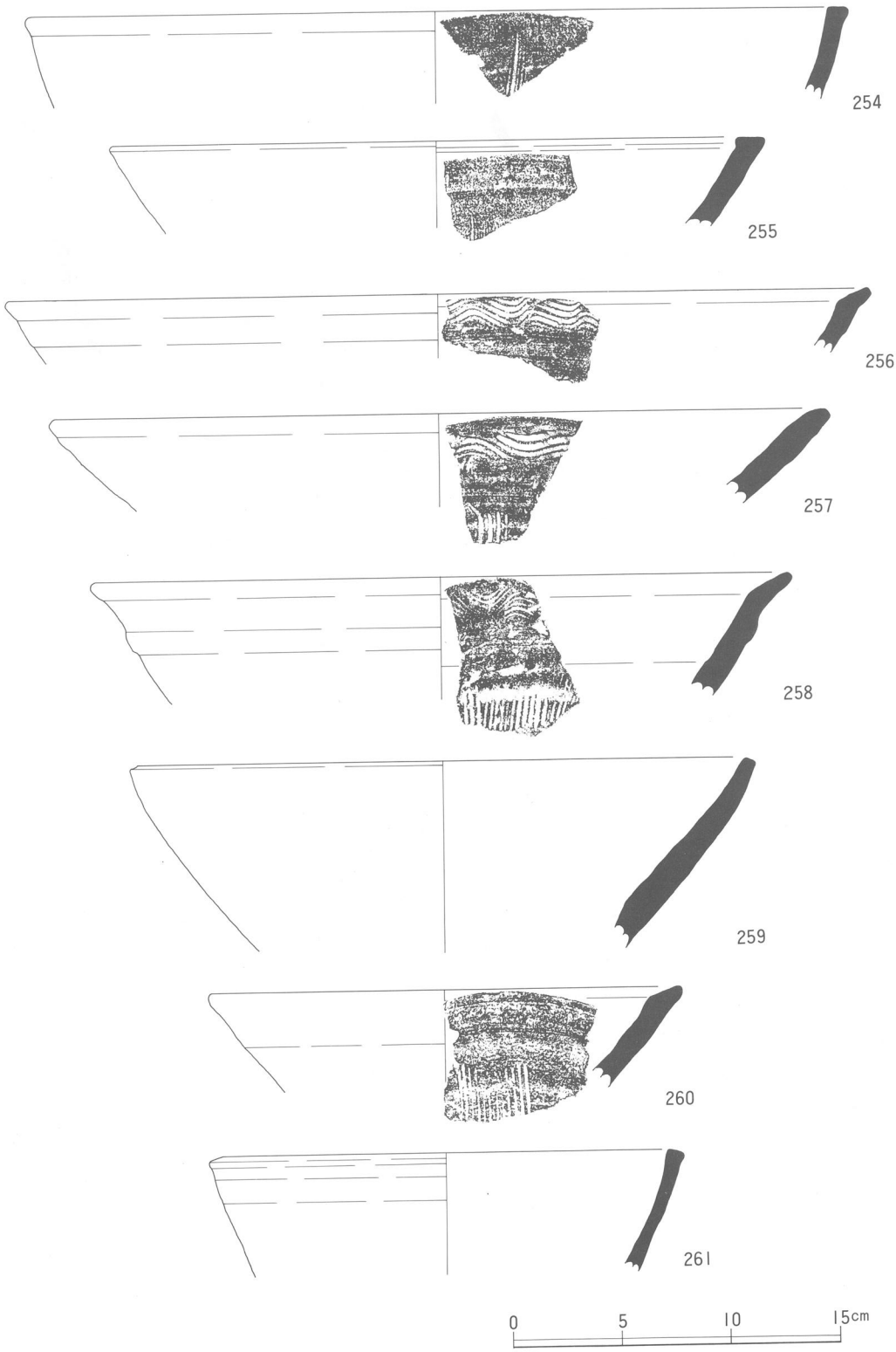
248～266はすり鉢である。248は口径33.4cmを測り、口縁端部を水平に作る。内面にすすが付着する。249は口径39.2cmを測り、ほぼ水平に作った口縁端部に櫛目波状文を施す。卸し目は密に施されるが、かなり摩滅している。250は口径35.6cmを測り、口縁端部はゆるく内傾する。９



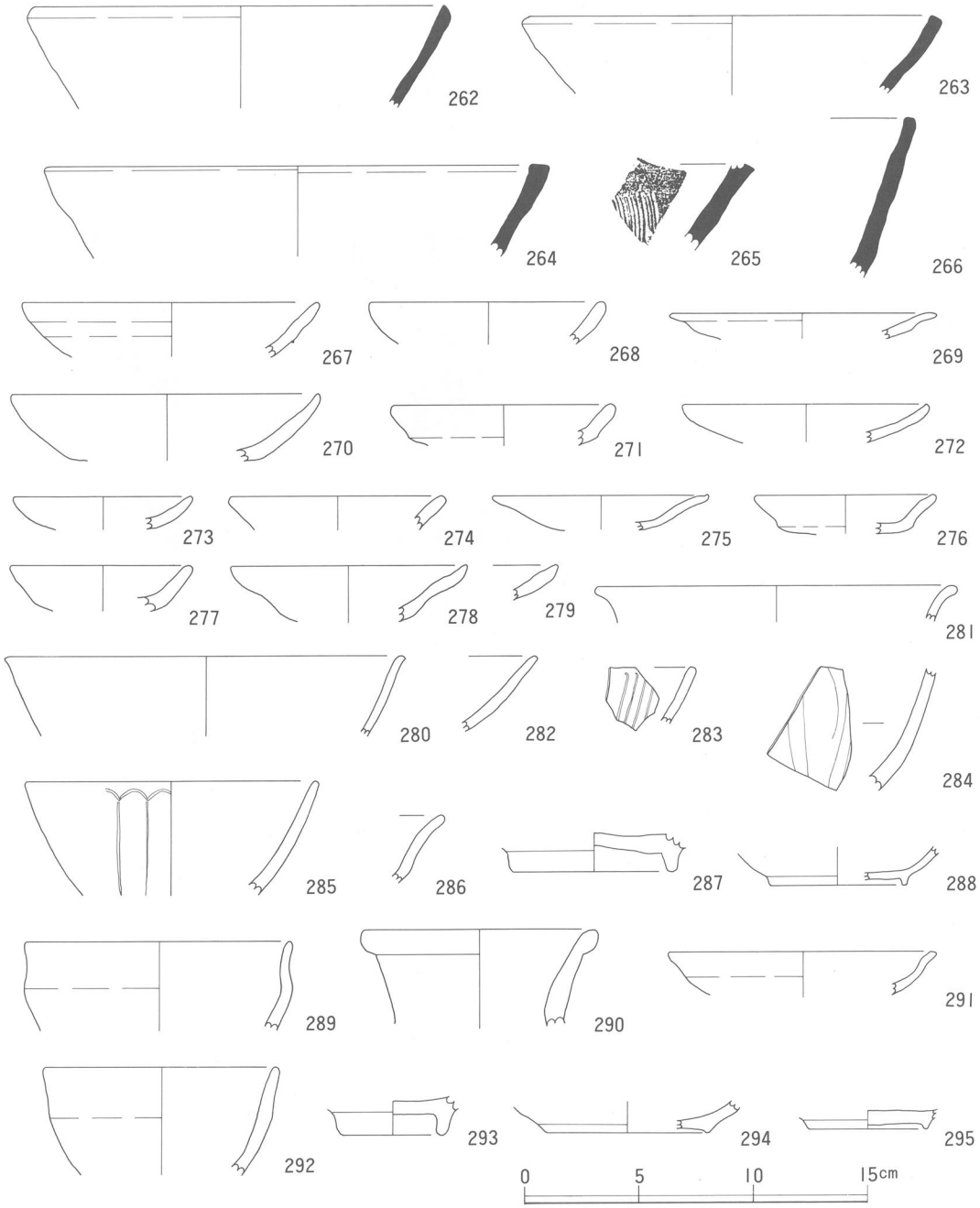
第25図　遺物実測図(13)　包含層：古代・その他



第26図　遺物実測図(14)　包含層：中世

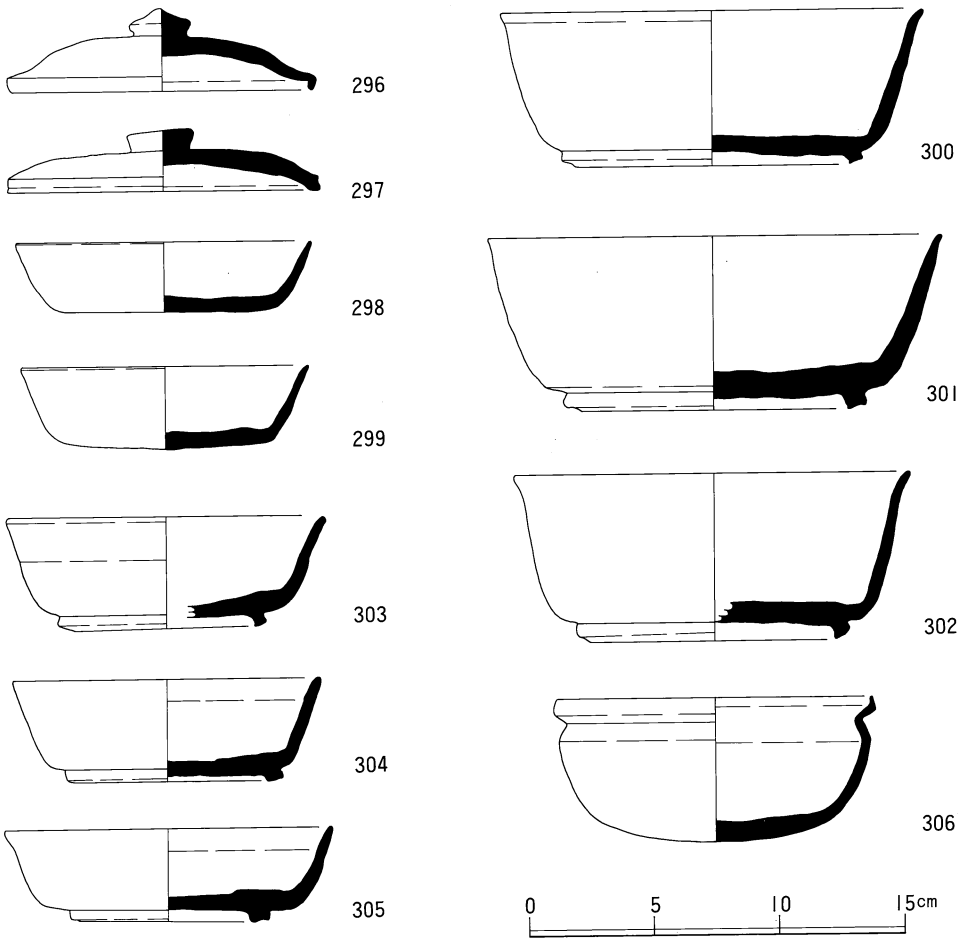


第27図　遺物実測図(15)　包含層：中世



第28図　遺物実測図(16)　包含層：中世

条１単位の卸し目が施される。251は口径35.4cmを測り、ほぼ直線的に開く器形である。口縁端部内側に、櫛目波状文を施す。卸し目は粗雑である。252は口径39.4cmを測り、直線的に開く器形である。口縁端部に櫛目波状文を施す。253は口径35.2cmを測り、肥厚した口縁である。254は口径37.4cmを測り、口縁端部を水平に作る。卸し目は５条１単位か。255は口径30.0cmを測り、口縁端部を水平に作る。256は口径39.6cmを測り、口縁は外方に開く。端部に櫛目波状文を施す。257は口径35.4cmを測り、口縁は丸くおさめる。端部に櫛目波状文を施す。卸し目は４条１単位か。258は口径31.8cmを測り、口縁は外方へ開く。端部に櫛目波状文を施す。卸し目は密に施す。259は口径28.0cmを測り、口縁端部は方形で外傾する。260は口径21.6cmを測り、直線的に開く器形である。口縁端部は内傾する。卸し目は12条１単位か。261は口径20.6cmを測り、方形の口縁はやや外傾する。262は口径17.8cmを測り、直線的に開く器形である。263は口径17.6cmを測



第29図　遺物実測図(17)　包含層：古代

り、方形の口縁はやや外傾する。264は21.8cmを測り、口縁端部は水平に作る。265は方形の口縁がやや外傾する器形と思われる。266は口縁端部を水平に作る。259・261・262・263は13世紀代のものか。248・249・253・254・255・264・265・266は14世紀前半～中頃、250・256・260は14世紀後半～15世紀前半、251・252・257・258は15世紀後半に比定される。

267～279は土師器皿である。267は口径12.8cmを測る。口縁をヨコナデし、端部は丸くおさめる。口縁に油煙痕がある。268は口径10.0cmを測る。肥厚した口縁を丸くおさめる。269は口径11.6cmを測る。口縁を強くヨコナデする。270は口径13.4cmを測る。口縁端部を上方にやや引き上げる。内外面に漆が付着する。271は口径9.6cmを測る。強いヨコナデにより、体部と底部の境がつく。272は口径10.6cmを測る。口縁端部をつまみ上げる。内外面に漆が付着する。273は口径7.6cmを測る。274は口径9.4cmを測る。275は口径9.6cmを測る。口縁端部をつまみ上げる。内外面に漆が付着する。276は口径7.8cmを測る。強いヨコナデにより、体部と底部の境がつく。外面に漆が付着する。277は口径7.8cmを測る。278は口径10.4cmを測る。体部をヨコナデする。279は口縁端部をつまみ上げる。油煙痕がある。これらの土師器のうち、271・276は15世紀前半、278は15世紀中頃、272・275・279は16世紀後半に比定される。

280は白磁椀であり、口径17.2cmを測る。口縁端部が短く外方へ折れる。11世紀後半～12世紀前半のものか。

281～287は青磁である。281は鉢か。口径15.6cmを測る。残りの資料は椀であろう。285は口径12.6cmを測り、287は高台径7.0cmを測る。283・284・285は蓮弁文が施される。いずれも龍泉窯系のものと思われる。284は13世紀、285は14～15世紀、283は16世紀のものか。

288は染付皿であり、高台径5.8cmを測る。

289～295は瀬戸美濃の製品である。289は口径11.6cmの天目茶碗であり、鉄釉を施す。290は口径10.0cmの四耳壷である。淡緑色の灰釉を施す。291は灰釉の皿であり、口径11.6cmを測る。292は口径10.2cmの椀であり、鉄釉を施す。293は椀底部で高台径は4.6cmを測る。194は皿の底部で7.2cmを測る。295は皿の底部で高台径は5.2cmを測る。290は13～14世紀、291・292は16世紀前半、289は17世紀初め頃のものに比定できる。

e　古代土器の年代について

古代の遺物は量が多いため、ここでは杯A蓋・杯B蓋・杯A・杯Bの主要器種を中心に、年代を考察したい。

杯A蓋は、わずか４点の出土である。射水郡内の窯跡に照らせば、小杉丸山１号窯の資料に近く、７世紀中頃から後半に比定される。図化した資料のなかにはこれらに対応する杯身はないが、口縁破片の中に対応する口径のものがあるので、蓋と身のセットとしてとらえることができると思われるが、この時期の資料は量的には少ない。

杯B蓋は、口径10.8cmから17.8cmまでの資料がある。16cm以上の大型のものは少なく、13cmから14cmのものが最も多い。また12cm前後の資料も一定の割合を占めている。器高は口径にか

かわらず、３㎝前後のものが多い。一方、口縁端部の形態は、下方に折り曲げるもの、三角形断面を呈するもの、内側に折り曲げるもの、屈曲せず丸くおさめるものなど、多様である。また、頂部の調整は回転ヘラケズリ調整のものより、回転ナデ調整のものが圧倒的に多い。

杯Ａは、口径11.2㎝から13.5㎝までの資料があり、ほとんどが12㎝前後のものである。器高は3.5㎝前後にほとんどがおさまる。底部外面は、ほとんどがヘラ切り未調整である。

杯Ｂは、口径9.8㎝から18.0㎝までの資料がある。14㎝以上の大型品は少なく、12㎝前後が最も多い。器高は口径10㎝代のものでは4.0～4.5㎝、口径12㎝前後のものでは3.5～4.0㎝のものが多く、口径が大きくなると器高が低くなる傾向がある。また、底部外面の調整は、ほとんどがヘラ切り後軽くナデを施すものである。

これら杯Ｂ蓋・杯Ａ・杯Ｂを、射水郡内の窯跡資料の検討結果［大門町教委1986・池野1987・富山県埋文センター1992］と比較すると、45・70・71のように８世紀前半の特徴を持つものや、11のように８世紀末から９世紀初頭の特徴をもつ資料が若干含まれるが、総体として、杯蓋の端部の形態、法量が小振りのものが多い、回転ヘラケズリを施したものが少ない、ということから、８世紀後半の資料が主体を占めるものと思われる。

次に土師器甕・鍋は、ロクロ製のものと、非ロクロ製のものが認められる。ロクロ製の口縁部の形態には、口縁部内部のナデが強く、断面が三角形状になるものと、口縁端部を上に引き上げるものがあり、前者が多い。これらは８世紀中頃から後半に類例が多い［池野1988］。一方、非ロクロ製のものは、端部が丸くないし尖り気味におさめたものが多い。なお、土師器甕・鍋のロクロ・非ロクロの比率は、前者が40.6%、後者が59.4%であり、非ロクロ製品の占める割合が高い。羽咋市寺家遺跡では、８世紀前半後葉からロクロ製品が増え始め、８世紀末には普遍化する傾向にあり［石川県立埋文センター1988］、富山県内も同様の傾向と思われる［関1988］。これからすると、本遺跡の土師器は８世紀後半でも中頃に近いものと思われる。

以上のことから、本遺跡の古代土器は、７世紀後半から９世紀前半までのものがあるが、主体は８世紀第３四半期に位置付けておきたい。

第５節　まとめ

ここではまとめとして、各時代ごとに遺跡の性格について若干の考察を加えるとともに、阿尾＝間島平野（仮称・第30図参照）という限られた地域の歴史について、触れておきたい。

なお発掘調査の結果、阿尾島田Ａ遺跡はさらに南東側へ続くことを確認している。従って以下はあくまでも遺跡の一部分の知見による考察である。

a　阿尾島田Ａ遺跡と阿尾＝間島平野について

本遺跡の立地する余川川下流左岸の平野を、阿尾＝間島平野と仮称する。阿尾＝間島平野は、東は海に面し、北から西にかけて丘陵がはしり、南には余川川が流れている。余川川は、石川県との境近くの山地に発し、約11kmで富山湾に至る河川であるが、上流部の滞水性に乏しい山地からの流出が急なため、下流部では近年まで堤防の決壊と水田の埋没がくりかえされた歴史がある。こうしたことから、この平野は、地形的に周囲から独立した地域といえるだろう。平野の面積は約50haであり、余川川河口付近に間島集落が、そのやや上流に稲積（下稲積）集落がある。その他海岸線沿いと丘陵裾に集落があるほかは、大部分が水田である。この地域で確認されている遺跡は、今のところ本遺跡の他に、中世遺物の散布地である阿尾島田Ｂ遺跡（未調査）のみである。なお、間島集落は近世初期に開発された新村である。

b　縄文時代について

阿尾島田Ａ遺跡では、包含層から縄文時代の土器と石器が若干出土した。時期的には後晩期に限られるようである。

遺跡の地盤である砂層は、縄文海進を契機として堆積したものと考えられる。従ってこの地域に縄文人が立ち入るようになるのは、陸地化後かなり時間が経過してからであると考えられ、しかもそれは集落を営み、定住をするようなものではなく、一時的な立ち寄りであったと思われる。

この状況は、同様の立地を示し、丘陵をはさんで反対側に位置する阿尾島尾Ａ遺跡と似ているが、本遺跡の方が期間が短く、痕跡も薄い。

また、阿尾島尾Ａ遺跡が若干ではあるが、弥生・古墳時代の遺物も出土しているのに対して、本遺跡は７世紀まで営みが途絶えてしまっている。未知の遺跡の存在も考えられるが、今のところこの平野は、古代に至るまで、積極的な開発がなかったものと思われる。

c　古代について

掘立柱建物は、総柱建物と側柱建物がある。このうち総柱建物はいずれも２間×２間で平面積８㎡前後のものである。このような建物は、小規模であるにもかかわらず総柱と頑丈な構造であることから、一般的に倉庫と考えられているものである。一方側柱建物は、４間×２間のものと３間×２間のものがあり、平面積はいずれも30㎡前後のものである[1)]。

確認した８棟の建物は、重複するものがあること、接近しているものがあること、方位がずれていることから、８棟全てが同時期に存在したものではなく、時期差のあることがわかる。

建物の方位から分類すると、以下の３群に分かれる。

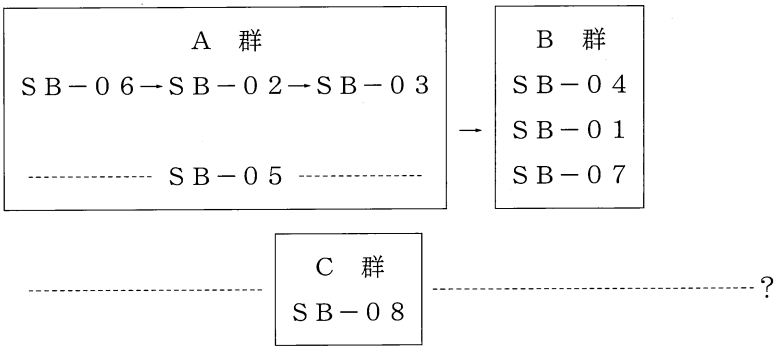
Ａ群：ＳＢ－０６・ＳＢ－０２・ＳＢ－０３・ＳＢ－０５

Ｂ群：ＳＢ－０４・ＳＢ－０１・ＳＢ－０７

Ｃ群：ＳＢ－０８

このうち、Ｃ群については１棟だけ離れて存在し、出土遺物もないことから、判断を保留せざるをえないが、Ａ群とＢ群は、ＳＢ－０４とＳＢ－０５の切り合いや、ＳＢ－０３とＳＢ－０４の出土遺物から、Ａ群の方がＢ群に先行するものと思われる。

さらにＡ群の中では、遺構の切り合いからＳＢ－０６→ＳＢ－０２→ＳＢ－０３の順に建て替えられたと思われる。従って阿尾島田Ａ遺跡における建物遺構の変遷は、とりあえず以下のように推定しておく。



また時期は、出土遺物からＡ群が８世紀第３四半期頃、Ｂ群が８世紀第４四半期から９世紀第１四半期頃と考えたい。

このことから、阿尾島田Ａ遺跡は少なくとも２つの時期に分かれ、各時期とも１棟ないし２棟の建物と、１棟の倉庫から構成されることが判明した。また、建物は全て方向が南北棟であり、その配置がＬ字型あるいはコの字型になるようなものではない。

では、本遺跡の性格はどのようなものであったのか。次に土器の組成から考察してみたい。

阿尾島田Ａ遺跡出土古代土器の口縁部全破片を、口縁部計測法で計測した結果が第２表である。種類・器種別では、須恵器が54.52個体（91.3%）、土師器が5.17個体（8.7%）であり、須恵器が圧倒的に多く、施釉陶器はない。また、器種は食器のみで、硯などの文房具はみられない。一方、用途別では、食膳具が33.93個体（81.5%）、貯蔵具が3.10個体（7.5%）、煮炊具が4.60個体（11.0%）であり、食膳具が多い。また、貯蔵具＝須恵器、煮炊具＝土師器と土器種類による用途が区別されている。

施釉陶器と文房具の欠如は一般村落に近い様相を示すが、煮炊具の量が少ないのは公的性格をうかがわせるものである。さらに大型の建物が存在しないことや、周囲の地勢、倉庫が付随することから、８世紀後半～９世紀初めの阿尾島田Ａ遺跡は、阿尾＝間島平野の開発に携わっ

種類・器種別

	器　種	個　体　数	百分率（%）	備考
須恵器	杯A蓋	0．63	1．1	
	杯B蓋	18．54	31．1	■
	杯　A	14．16	23．7	■
	杯　B	16．87	28．3	
	高　杯	*		
	鉢	0．66	1．1	■
	蓋	0．56	0．9	
	瓶　類	1．40	2．3	▲
	甕　類	1．70	2．8	▲
計		54．52	91．3	
土師器	椀	*		
	内黒椀	0．08	0．1	□
	蓋	0．49	0．8	□
	鍋　類	3．44	5．8	△
	甕　類	1．16	2．0	△
計		5．17	8．7	
合　計		59．69	100．0	

用途別

用　途		個　体　数	百分率（%）	備　　考
食膳具	須恵器	33．36	80．1	■の合計
	土師器	0．57	1．4	□の合計
	計	33．93	81．5	
貯蔵具	須恵器	3．10	7．5	▲の合計
煮炊具	土師器	4．60	11．0	△の合計
合　計		41．63	100．0	

※個体数は口縁部計測法による。＊は存在するが数値に表われないもの。

※須恵器杯の口縁部破片は、杯A・杯Bの比率で振り分けた。土師器鍋・甕の区別が不明なものについても同様の処理をした。

第２表　阿尾島田Ａ遺跡の食器組成（７世紀末～９世紀初頭、８世紀後半主体）

た有力農民の拠点集落と考えたい。

ところで、阿尾＝間島平野はほ場整備前まで、条里地割と推定される地形が残っていたとされる［中山1956・富山県1976］。改めてこれを検証すると、平野南半には直線的な地割が確認されるものの、遺跡のある北半には直線的な地割はみられない。南半の直線的地割は真北から約17°東に振り、阿尾島尾・白上地区で確認できる地割（Ｎ２°Ｅ）ともずれを生じる。調査で検出した建物の方位と、南半部の地割の方位は、建物Ａ群で12～16°、Ｂ群で４～９°、Ｃ群で３°の差がある。

７世紀後半から小規模な開発の手が伸びた阿尾＝間島平野は、８世紀後半から９世紀初めに積極的に再開発され[2]、その間に条里地割が施行された可能性があるが、まもなく衰退した。それまであまり顧みられなかった小平野にまでこのような開発が及んだことは、８世紀後半における地域社会を知る上で、重要なことであるといえよう。

ｄ　中世について

古代後半には途絶えていた本遺跡での営みであるが、12・13世紀頃から再び認められるようになり、16世紀末あるいは17世紀初め頃までほぼ続くものと思われる。遺構は確認されず、遺物の量も少ないが、珠洲・土師器に加えて、瀬戸美濃や輸入陶磁器も確認されることから、細々ではあるが、遺跡周辺に小規模な集落が存続したものと思われる。

阿尾＝間島平野北側の阿尾城跡とその城下である阿尾島尾Ａ遺跡では、15世紀後半から遺物量が増え、後者では土地を区画する大溝が形成されたが、阿尾島田Ａ遺跡ではそのような変化は見られない。阿尾島田Ｂ遺跡との関連を含めて、今後の課題としておきたい。

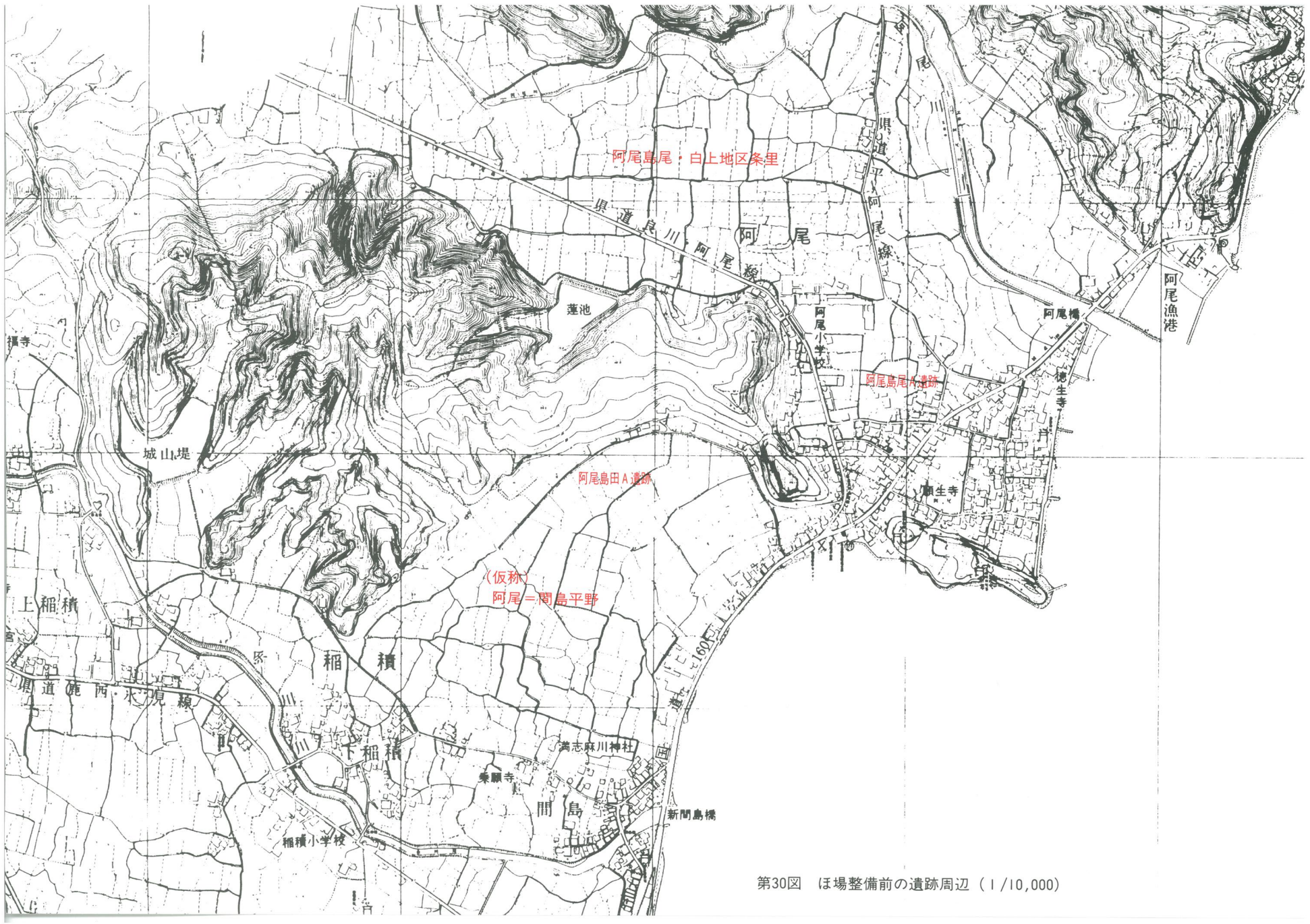
なお、近世においては平野南部に稲積（下稲積）集落が形成されたのに対して、阿尾地区側は農地のみで、明治８年の地籍図でも人家は確認されない。また前述のように、間島集落は近世初期に開発された新村である。

また、立地・遺物から想定される漁業（古代・中世）・製塩（古代）については、遺物の量からして集落内の補助的な生業・生産と考えられ、それ以上の積極的な評価は今のところ困難である。

注

1　本遺跡では、建物の桁行と平行する溝が数条確認された。ＳＢ－０２に対するＳＤ－０９、ＳＢ－０５に対するＳＤ－０５・ＳＤ－１９、ＳＢ－０７に対するＳＤ－２９などである。これらは柱列から60～90ｃｍ離れ、溝の長さはほぼ桁行の長さと一致する。また柱穴と比べて浅いことや地盤が軟らかい砂層であることから、これらの溝は人為的なものというより、建物の軒先から落ちる雨水によって穿たれた可能性がある。とすれば、少なくともＳＢ－０２・０５・０７の３棟の屋根構造は、切妻造であったことが指摘出来よう。ただ、このように解釈するには、いずれの溝も建物よりやや短い傾向にあること、ＳＢ－０２・０７については西側でしか溝が確認されないていないこと、他の建物になぜ溝が付随しないのか、といった問題点が残る。今後の検討課題としておきたい。

2　万葉集には「英遠（あお）の浦に行きし日に作る歌一首」として「英遠の浦に寄する白波いや増しに立ち重（し）き寄せ来（く）東風（こち）を疾（いた）みかも（巻18　4093)」という大伴家持の歌がみえ、「英遠」は氷見市阿尾に比定されている。しかし、阿尾地区はこれ以外に古代文献では空白の地域である。



第30図　ほ場整備前の遺跡周辺（1/10,000）

参考文献

池野正男　1987　「射水丘陵における８世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号　富山考古学会

石川県立埋蔵文化財センター　1988　『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』

稲積教育百年史編さん委員会　1978　『稲積教育百年－教育と歴史－』

岸本雅敏　1983　「富山県における土器製塩の成立と展開」『北陸の考古学－石川考古学研究会々誌』第26号

関清　1988　「越中における古代前半期の土師器」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

大門町教育委員会　1986　『石名山窯跡発掘調査報告』

中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

富山県　1976　『富山県史』通史編Ⅰ原始・古代

富山県埋蔵文化財センター　1992　『石太郎Ⅰ遺跡・石太郎Ｊ遺跡』ジャパンエキスポ関連遺跡群発掘調査報告書Ⅱ

富山考古学会　1993　『シンポジウム古代荘園遺跡が語るもの』資料

富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会　1991　『能登滝・柴垣製塩遺跡群』富山大学考古学研究報告第５冊

中島町教育委員会　1995　『ヤトン谷内遺跡』

中山有志　1956　「氷見平野における条里遺制」『越中史壇』第９号

氷見市教育委員会　1975　『富山県氷見市九殿製塩遺跡調査報告書』

氷見市教育委員会　1993　『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告第15冊

氷見市教育委員会　1993　『県指定史跡阿尾城跡文化財調査中間報告書』

氷見市教育委員会　1994　『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅲ』氷見市埋蔵文化財調査報告第18冊

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第４章　阿尾島尾山砦跡の調査成果

第１節　調査前の知見

阿尾島尾山砦跡は、これまで三角山（みすまやま）城跡として周知されてきた遺跡である。

三角山城は、南北朝時代の文献にわずかに登場する城である。観応３・正平７（1352）年、越中で幕府に背いた桃井直信の拠点のひとつとしてその名がみえ、同年６月15日に幕府方吉見氏頼軍が三角山城に押し寄せ、白井弥八・渡部源八らを討ち取り、二人の主級を稲積河鰭に懸けたという（『富山県史』史料編Ⅱ　３２７号文書）。

この史料から、三角山城跡は氷見市稲積地区近くにあるものと推定され、氷見高校歴史クラブ『故郷の城址』（昭和36年）では、「「みすま山」という地名がある」として、城跡の場所を阿尾城跡向かいの丘陵端部、標高49.1ｍの地点付近と推定している。

三角山城跡はその後『富山県遺跡地図』（昭和47年）に埋蔵文化財包蔵地として登録されているが、『氷見市遺跡地図』（昭和58年）では、場所が北西に接する標高52.4ｍの丘陵の方に移されている。

その後、バイパス建設に先立つ分布調査で現地を確認し、両方の高まりを改めて城跡として登録した。

城跡は、上記のように大きく二つの地区に分けられる。北西の地区は、発掘調査地区であるので以下を参照願いたい。南東の地区は、標高49.1ｍの地点を中心に、北西からの尾根筋でつながり、残り三方は急斜面になっている。北西からの尾根筋に切岸があるほかは、特に城の施設と考えられる地形はない。

このように、文献史料からも現状地形からも、詳細不明の城跡であった。

第２節　調査の方法

発掘調査はバイパス建設工事にかかる城跡北西部分の約900㎡について実施した。

調査地区は全て山林であり、建設省による樹木伐採と片付け作業が終了したのち、現況地形の空中測量を実施し、発掘に取り掛かった。

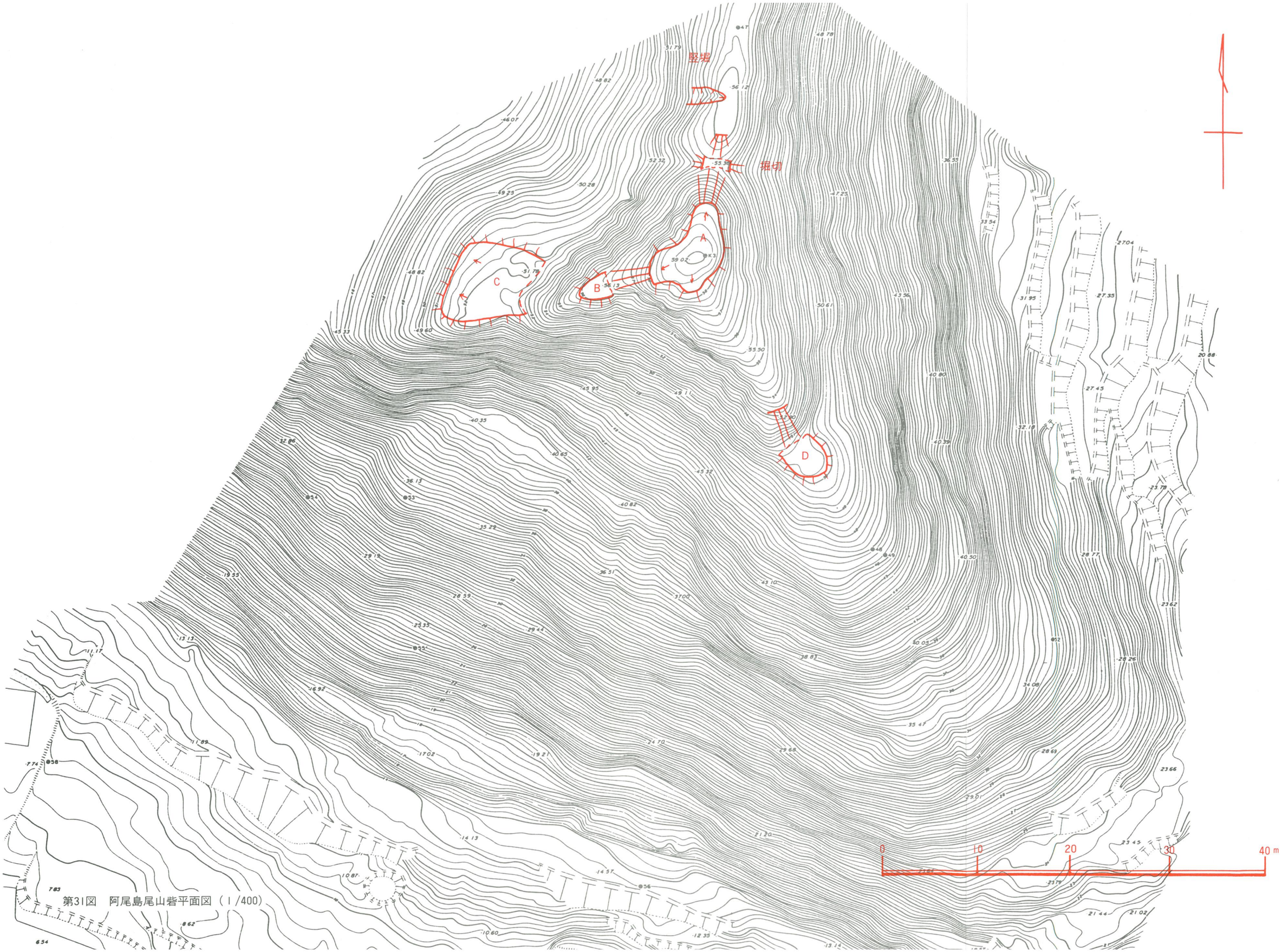
発掘は全て手作業で行い、排土は事業地内の丘陵下に流し落した。

第３節　遺構

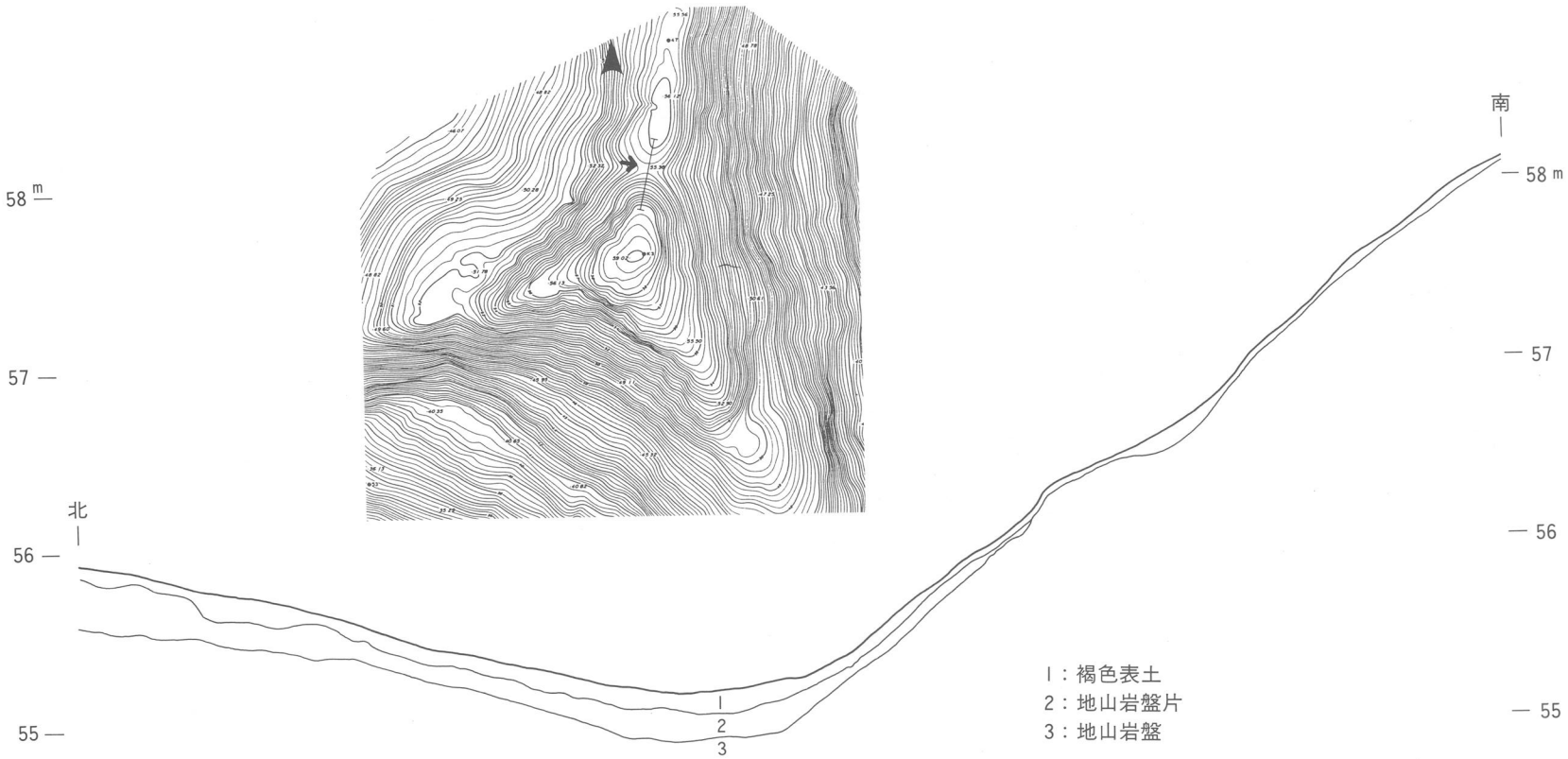
遺跡は概して表土が薄く、すでに地山岩盤が露出している場所もあった。調査の結果、表面観察で確認した堀切・平坦面・竪堀以外の遺構は、確認されなかった。

平坦面Ａ：三方向からの尾根が集まる最高地点に位置し、南北約９ｍ、東西約７ｍである。周囲は堀切や切岸によって画されるが、完全に平坦ではなく、中央と隅で約１ｍの比高差がある。なお、この地点からの眺望は大変に良く、阿尾城跡・山崎城跡・守山城跡をはじめ、氷見市街・富山湾を見通すことができる。

平坦面Ｂ：平坦面Ａから西にのびる尾根に位置し、南北2.5ｍ、東西2.5ｍである。平坦面Ａ



第31図　阿尾島尾山砦平面図（1/400）



第32図　阿尾島尾山砦跡堀切断面図（1/40）

と画する段差約２ｍの切岸の直下にあたる。

平坦面Ｃ：平坦面Ｂから西に約４ｍ下がった地点に位置し、南北約８ｍ、東西約９ｍである。城跡の中では最も広い平坦面であるが、東から西へゆるやかに傾斜している。

平坦面Ｄ：平坦面Ａから南東にのびる尾根に位置し、南北約４ｍ、東西約４ｍである。平坦面Ａから約15ｍ離れた段差2.5ｍの切岸の直下にあたる。

堀切：平坦面Ａの北側に位置し、幅約８ｍで尾根を遮断する。堀底と平坦面Ａの段差は約３ｍである。堀底はなだらかで、地山岩盤を深くえぐるような造作はない。

竪堀：堀切の北約３ｍの西側斜面に位置する。長さ３ｍ、幅１ｍの浅いもの。

出土遺物は、近現代の磁器破片が２片あるのみで、中世の遺物はない。

第４節　まとめ

今回の発掘調査により、新たな知見はあまり得られなかった。

平坦面は４カ所確認したが、いずれも面積が狭く、水平なものではないため、建物などの施設があったとは考えにくい。また、大人数が立てこもるような場所でもない。しかし、阿尾城下や周辺の街道を見下ろす好位置にあることから、この遺跡は阿尾城の付属施設として、少人数による見張場所として、機能していたのではないだろうか。

この遺跡を以上のように考えると、文献史料に現れる三角山城と比べて性格にかなり差があるように思われる。また、人が常駐した城跡というよりは、一時的な砦跡と考えた方がよさそうである。従ってこの遺跡を文献上の三角山城と一端切り離し、今後阿尾島尾山砦跡と呼称することにする。

文献上の三角山城の位置は、今後改めて検討しなければならないが、本砦跡から西約１㎞に所在する稲積城跡が、立地・規模からして最有力の候補地と考えられる。

第３表　阿尾島田Ａ遺跡古代遺物観察表

凡例

図版番号：報告書の本文・図版・写真図版に付した番号。
実測番号：実測図・遺物本体に記した番号。
出土地区：出土グリッドの番号。複数の地区にまたがる場合は、ひとつを代表させた。
遺　　構：出土した遺構の番号。記載の無いものは、包含層等の出土。
残　　存：口縁部残存率。単位は％。＊は存在するが、数値に表せないもの。
胎　　土：Ａ白色粒子を一定量含む。Ｂ白色粒子を多く含む。Ｃ白色粒子・透明粒子を一定量含む。Ｄ白色粒子・透明粒子を多く含む。Ｅ粒子をほとんど含まない。Ｆその他。
焼　　成：須恵器＝Ａ堅緻。Ｂ堅緻であるが、断面が赤褐色を呈する。Ｃ堅緻であるが、焼き歪みあり。Ｄやや甘い。Ｅやや甘く、焼き歪みあり。Ｆ生焼け。
土師器＝Ａ堅緻。Ｂ砂っぽい。Ｃ生焼け。
色　　調：Ａ青灰色。Ｂ明青灰色。Ｃ暗青灰色。Ｄ黄灰色。Ｅ灰色。Ｆ赤褐色。Ｇ黒灰色。
調　　整：須恵器＝杯の底部外面と杯蓋の天井部外面の調整が確認できるものについて記した。
Ａ回転ヘラケズリ。Ｂ回転ナデ。Ｃ不定ナデ。Ｄヘラ切り未調整。Ｅ回転糸切り。Ｆその他。
土師器＝甕と鍋の口縁部と胴部上半部の調整について記した。
Ａ内外面ハケメ。Ｂ外面ヨコナデ・内面ハケメ。Ｃ外面不明・内面ハケメ。Ｄ外面ヨコナデ・内面ヨコナデ。Ｅ外面ハケメ・内面ヨコナデ。Ｆ外面カキメ・内面ヨコナデ。Ｇ内外面カキメ。Ｈ外面ヨコナデ・内面カキメ。Ｉ内外面不明。
記　　号：ヘラ記号。記載のないものは、記号無し。？は記号の種類が不明なもの。
備　　考：工具痕としたものは、外面調整の最後にハケメ状の工具痕が付けられているもの（写真図版例参照）。

須恵器

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	記号	そ　の　他
9	90	D10	P043	杯Ｂ蓋	12.0	3.0	15	A	B	C	B		ＳＢ３
10	62	D10	P045	杯Ａ	12.2	3.6	37	A	D	F	D		摩滅・ＳＢ３
11	24	D12	P014	杯Ｂ蓋	16.5	2.5	40	A	C	A	B	｜	ＳＢ４
12	15	E11	SD03	杯Ｂ蓋	12.5	2.8	50	A	A	C	B		
13	19	E11	SD04	杯Ｂ蓋	11.8	3.0	35	A	C	A	B		工具痕
14	16	F11	SD04	杯Ｂ蓋	12.6	2.9	53	A	A	A	B		
15	8	D11	SD04	杯Ｂ蓋	12.8	2.9	25	A	A	F	B		
16	26	E11	SD04	杯Ｂ蓋	13.4	3.0	25	A	A	A	B	×	漆付着
17	28	F10	SD04	杯Ｂ蓋	13.7	3.0	54	A	A	A	B		
18	58	D11	SD04	杯Ａ	11.8	3.2	68	B	A	A	D		
19	73	D11	SD04	杯Ａ	12.0	3.3	81	A	A	A	D		工具痕
24	77	D11	SD04	横瓶	22.0	－	23	A	A	A	－		
25	40	E11	SD04	杯Ｂ	11.0	4.1	8	A	A	A	B	×	
26	115	E９	SD07	杯Ｂ蓋	12.0	1.9	24	D	D	E	B		
27	32	E８	SD10	壷蓋	11.0	2.5	45	A	A	E	B		
29	27	F８	SD13	杯Ｂ蓋	14.0	2.7	30	A	A	G	B		
30	45	F８	SD13	杯Ｂ	13.3	4.3	63	B	D	E	D		摩滅
31	46	E９	SD13	杯Ｂ	12.2	4.0	74	A	A	A	B		摩滅
32	53	F10	SD13	杯Ａ	11.8	3.3	25	A	A	A	D	×	工具痕
33	1	D10	SD14	杯Ｂ蓋	13.7	3.4	51	A	E	A	B		工具痕
34	54	D10	SD14	杯Ａ	13.1	3.6	18	E	D	E	D	×	摩滅
35	49	D10	SD14	杯Ｂ	10.6	4.5	35	A	A	A	B		
36	35	O10	SD14	杯Ｂ	10.7	4.0	63	A	C	A	B	×	
37	43	D９	SD14	杯Ａ	11.9	3.5	38	A	A	A	D		
41	56	D10	SD24	杯Ａ	12.0	3.6	38	B	A	A	D		漆付着
42	41	D10	SD24	杯Ｂ	12.2	4.0	68	E	A	A	D		工具痕
44	47	E11	SD26	杯Ｂ	10.6	4.3	63	B	A	C	D		
45	22	E９	SD27	杯Ｂ蓋	15.5	2.7	64	A	A	A	B		
46	2	G16	SD40	杯Ｂ蓋	13.7	2.7	57	A	A	A	B		工具痕
47	7	F10	P032	杯Ｂ蓋	15.0	2.0	86	A	C	F	A		
48	4	F11	P087	杯Ｂ蓋	14.5	2.2	72	A	C	F	B		
49	59	D12	P087	杯Ａ	11.3	3.5	10	A	D	E	D		工具痕
50	204	G９	P097	杯Ａ	12.0	3.8	14	C	F	E	B		

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	記号	その他
53	33	F10	P097	横瓶	−	−	−	A	A	A	−		
54	95	A8		杯A蓋	9.6	−	38	A	A	E	A		
55	96	C8		杯A蓋	10.4	−	23	A	A	E	B		
56	120	F8		杯A蓋	−	−	−	A	A	A	A		
57	124	G7		杯A蓋	20.8	−	2	A	A	E	−		
58	17	F11		杯B蓋	11.4	3.1	67	A	A	A	A		
60	3	E9		杯B蓋	14.6	3.0	23	A	A	E	B		
61	5	G10		杯B蓋	12.0	3.0	16	A	A	F	B		
62	9	F11		杯B蓋	12.8	3.0	44	B	C	C	B		
63	12	F11		杯B蓋	12.4	3.0	33	A	A	A	B		
66	143	G12		杯B蓋	14.0	−	8	A	A	A	−		
67	134	D11		杯B蓋	16.0	−	6	B	A	A	−		
68	91	G9		杯B蓋	13.6	−	31	A	D	A	B		
69	121	A9		杯B蓋	13.2	−	4	B	A	F	A		
70	114	表採		杯B蓋	16.6	−	9	C	A	A	A		
71	116	B1		杯B蓋	17.2	−	6	A	A	A	A		
74	14	F10		杯B蓋	17.8	2.7	30	E	A	E	B		
75	29	F10		杯B蓋	14.2	3.2	26	A	D	E	B		摩滅
76	10	F8		杯B蓋	13.3	2.8	90	A	A	A	B		工具痕
77	13	G10		杯B蓋	12.6	2.8	63	A	A	A	B		
78	11	G9		杯B蓋	12.8	−	51	A	A	C	B		
79	92	C11		杯B蓋	14.8	−	26	A	A	A	B		
80	94	E10		杯B蓋	14.6	−	12	B	A	A	B		
81	117	B5		杯B蓋	16.4	−	11	A	A	F	B		
82	150	F9		杯B蓋	10.0	−	9	A	D	E	−		
83	131	G10		杯B蓋	12.0	−	8	A	A	A	−		
84	154	E8		杯B蓋	12.0	−	10	E	A	A	−		
85	153	F10		杯B蓋	12.0	−	7	A	A	A	−		
86	135	G12		杯B蓋	12.0	−	8	A	A	A	−		
87	133	D10		杯B蓋	12.0	−	9	A	A	A	B		
88	156	E8		杯B蓋	12.0	−	8	A	A	B	−		
89	157	G10		杯B蓋	14.0	−	6	A	A	A	−		
90	136	D9		杯B蓋	12.0	−	6	E	A	A	−		
91	140	E9		杯B蓋	12.0	−	9	C	D	E	−		

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	記号	その他
92	138	E10		杯B蓋	12.0	−	22	A	A	C	−		
93	152	G11		杯B蓋	12.0	−	5	A	A	A	−		
94	149	E11		杯B蓋	12.0	−	7	A	A	A	−		
95	146	G11		杯B蓋	12.2	−	11	A	A	A	−		
96	148	G12		杯B蓋	14.0	−	6	A	A	A	−		
97	130	表採		杯B蓋	14.0	−	9	A	A	A	−		
98	139	F13		杯B蓋	12.8	−	19	A	A	A	−		
99	159	F9		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	C	−		
100	145	E8		杯B蓋	14.0	−	9	A	A	A	−		
101	128	G13		杯B蓋	14.0	−	7	A	A	A	−		
102	151	F10		杯B蓋	14.0	−	7	A	D	E	−		
103	164	G11		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	A	−		
104	160	A11		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	A	−		
105	165	G12		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	E	−		
106	129	E10		杯B蓋	14.0	−	6	A	A	A	−		
107	147	F7		杯B蓋	14.0	−	7	A	A	A	−		
108	142	表採		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	A	−		
109	93	E11		杯B蓋	13.8	−	19	A	A	A	−		
110	141	F10		杯B蓋	14.0	−	9	A	A	A	−		
111	161	表採		杯B蓋	14.0	−	6	A	A	C	−		
112	155	D12		杯B蓋	14.0	−	8	A	A	A	−		
113	163	F11		杯B蓋	14.0	−	5	A	A	A	−		
114	158	表採		杯B蓋	14.0	−	7	A	A	C	−		
115	137	E10		杯B蓋	14.0	−	9	A	A	A	−		
116	162	表採		杯B蓋	14.0	−	6	A	D	E	−		
117	144	表採		杯B蓋	16.0	−	10	A	A	E	−		
118	36	E11		杯A	11.8	3.6	7	A	A	A	D		工具痕
119	44	G10		杯A	12.0	3.4	26	A	A	A	D	×	
120	66	D12		杯A	11.7	2.8	41	B	E	A	D		工具痕
121	65	C9		杯A	11.4	3.1	32	B	D	G	D	×	工具痕
122	60	D12		杯A	12.0	3.5	36	A	D	E	D		
123	61	C10		杯A	11.2	3.8	7	E	A	A	D		工具痕
124	52	F9		杯A	11.8	3.4	65	A	A	A	D	×	
125	55	C13		杯A	11.8	3.5	33	B	C	A	D		

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	記号	その他
126	64	G 9		杯A	11.2	3.2	52	E	A	A	D		
127	57	D 7		杯A	11.8	3.2	33	A	A	A	D		
128	72	D10		杯A	12.3	3.6	24	A	D	E	D		摩滅
129	37	F 8		杯A	11.8	3.7	6	A	A	A	D	×	
130	51	G12		杯A	13.4	3.6	47	A	A	A	D		工具痕
131	63	G10		杯A	13.4	3.5	3	C	D	E	D	×	工具痕・漆付着
132	69	C 9		杯B	16.6	6.6	32	E	A	C	D		摩滅
134	118	C 9		杯B	16.0	−	12	A	A	A	−		
135	119	C10		杯B	14.0	−	15	A	D	A	−		
136	87	表採		杯B	9.8	4.2	4	A	A	A	−		
137	68	B 9		杯B	10.8	4.2	16	A	A	A	B		
138	50	G 8		杯B	10.8	4.5	26	B	A	C	B		
139	39	E11		杯B	10.4	4.5	60	A	A	A	D		
140	89	D10		杯B	10.8	3.8	3	A	A	A	B		
141	86	D12		杯B	11.6	3.9	3	A	D	B	B		
142	34	試1		杯B	11.8	3.7	45	B	A	C	D		工具痕
143	48	E 7		杯B	11.8	4.1	23	A	A	C	B		
144	38	G10		杯B	11.8	4.0	5	B	A	A	B	?	工具痕
145	67	D12		杯B	12.0	3.9	57	B	A	B	B		
146	42	C11		杯B	11.8	4.0	27	B	D	E	D		工具痕
147	88	E11		杯B	12.2	4.7	7	B	A	A	B		
148	83	F 8		杯B	12.0	3.7	2	B	A	A	D		
149	81	C 9		杯B	13.0	4.0	22	B	D	B	B		
150	84	G10		杯B	11.8	3.5	35	A	A	A	−		高台一部ツブレ
151	71	B11		杯B	13.4	4.0	60	B	A	A	D	×	
152	85	G11		杯B	11.8	3.5	10	B	A	A	B	×	
153	82	G 9		杯B	−	−	−	A	A	A	B		
154	126	表採		高杯	−	−	−	A	A	E	−		
155	132	D 6		蓋	10.0	−	11	A	A	E	−		
157	74	F 8		鉢	19.5	11.1	58	A	D	E			
158	112	E 7		鉢	−	−	−	B	A	A	−		
159	100	F 9		瓶	9.6	−	30	B	A	A	−		
160	102	G 9		瓶	16.4	−	9	E	A	A	−		
161	103	不明		瓶	18.6	−	10	E	D	F	−		

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	記号	その他
162	125	表採		瓶	−	−	−	A	A	A	−		
163	101	表採		瓶	−	−	−	A	A	A	−		
164	107	A 9		瓶	8.2	−	7	A	A	A	−		
165	122	不明		瓶	12.6	−	13	B	A	C	−		
166	123	不明		瓶	12.0	−	7	A	A	C	−		
167	109	表採		瓶	−	−	*	E	A	C	−		
168	110	表採		瓶	−	−	*	A	A	A	−		
169	30	G 9		長頸壺	10.2	22.8	35	A	A	A	B		
170	76	D 8		横瓶	10.0		6	A	A	A	−		
171	79	F 8		横瓶	−	−	−	A	A	A	−		
172	78	E 8		横瓶	−	−	−	A	A	E	−		
173	108	E 6		横瓶	−	−	−	A	A	A	−		
174	111	B 1		甕	−	−	*	A	A	A	−		
175	104	D10		小型甕	15.6	−	5	C	A	A	−		
176	105	F13		甕	21.6	−	14	A	A	C	−		
177	127	F 8		甕	18.0	−	16	A	A	A	−		
178	113	E15		甕	31.6	−	5	A	A	A	−		
179	97	F11		甕	23.9	−	32	A	A	E	−		
180	106	C12		甕	26.0	−	8	A	A	A	−		
181	80	G 9		甕	23.0	47.2	52	A	A	G	−		
182	98	G 8		甕	19.5	−	22	A	A	A	−		
183	99	C 9		甕	20.8	−	16	A	D	E	−		
296	297	G12		杯B蓋	12.0	3.3	49	A	A	A	B		
297	289	D10		杯B蓋	12.6	2.5	29	A	D	A	B		
298	292	F 8		杯A	11.8	2.9	46	E	A	A	D		
299	293	D 9		杯A	11.4	3.3	19	E	A	A	D		
300	294	F 7		杯B	16.8	6.2	51	E	A	C	B		
301	295	D 9		杯B	18.0	7.0	7	E	D	E	D		
302	296	C11		杯B	16.0	6.8	16	E	A	C	B		
303	288	G 7		杯B	12.6	4.5	10	C	D	B	B		工具痕
304	290	F 8		杯B	12.4	4.2	25	A	A	A	D		
305	291	B12		杯B	13.2	3.8	23	B	A	A	D		
306	287	C 9		鉢	12.8	5.8	8	A	A	A	−		

土師器

図版番号	実測番号	出土地区	遺構	器種	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	調整	その他
20	173	D11	SD04	杯	—	—	—	C	B	E	—	底部ヘラ切リ未調整
21	181	D11	SD04	鍋	25.8	—	5	D	A	G	C	非ロクロ
22	171	D12	SD04	小型甕	12.0	—	13	D	A	D	B	口縁内側煤付着、非ロクロ
23	178	D11	SD04	甕	12.8	—	15	D	A	G	E	非ロクロ、海綿
38	168	D10	SD14	鍋	30.0	—	17	D	A	D	H	海綿、外面煤付着
39	203	D10	SD24	小型甕	—	—	—	E	A	D	—	非ロクロ、内外面ハケメ
40	179	D10	SD24	小型甕	12.0	—	7	D	B	G	C	非ロクロ
43	169	D10	SD24	杯	15.8	5.5	1	E	A	D	—	海綿、内黒
51	201	G9	P097	甕	18.0	—	10	C	A	F	A	非ロクロ
52	202	G9	P097	甕	26.0	—	10	A	A	D	F	
184	166	D8		杯蓋	13.4	3.0	2	A	A	F	—	頂部回転ナデ
185	167	E10		杯蓋	13.0	—	47	A	A	D	—	
186	170	G12		杯	19.8	5.4	2	C	A	D	—	内黒
187	180	G9		杯	14.0	—	5	E	A	D	—	内黒、外面赤彩
188	197	E8		甕	22.0	—	8	D	B	F	—	
189	189	E4		甕	21.6	—	6	E	B	D	—	
190	194	G9		甕	22.0	—	3	D	B	F	D	
191	188	F7		甕	20.0	—	5	E	B	D	—	
192	187	D8		甕	23.4	—	6	D	B	D	—	
193	196	表採		甕	23.4	—	7	D	B	F	—	
194	191	G11		甕	18.0	—	4	A	A	D	—	
195	172	G10		甕	17.0	—	8	B	B	F	I	
196	175	G11		甕	18.4	—	2	D	B	E	I	非ロクロ
197	193	D10		甕	17.4	—	2	C	B	D	F	
198	199	G11		甕	16.0	—	7	A	B	F	D	
199	176	G10		甕	16.8	—	6	D	B	F	A	非ロクロ
200	195	F8		甕	14.8	—	5	D	B	F	D	
201	183	F8		甕	13.6	—	8	D	B	E	I	非ロクロ
202	190	C10		甕	14.4	—	5	E	A	G	—	
203	192	F10		甕	13.8	—	6	A	A	G	—	
204	177	G10		甕	—	—	—	C	B	F	I	
205	200	G9		甕	—	—	—	D	A	D	—	外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ
206	182	G8		小型甕	10.0	—	10	C	B	G	I	非ロクロ
207	185	G11		小型甕	11.0	—	12	D	A	G	I	非ロクロ、海綿
208	184	D11		鍋	37.0	—	11	D	B	E	G	
209	186	E11		鍋	34.0	—	8	D	B	D	B	非ロクロ
210	174	G9		鍋	22.0	—	5	D	B	F	C	非ロクロ
211	198	G9		鍋	18.0	—	10	D	B	F	C	
212	205	G11		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
213	206	C10		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
214	207	F10		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
215	208	E11		製塩土器	—	—	—	D	B	D	—	
216	209	G9		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
217	210	G10		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
218	211	E9		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
219	212	表採		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
220	213	G7		製塩土器	—	—	—	D	B	F	—	
221	214	D7		製塩土器	—	—	—	D	B	D	—	

図　　版

図版1　阿尾島田A遺跡・阿尾島尾山砦跡空中写真

阿尾島田遺跡・阿尾島尾山砦跡空中写真（左が北）

図版2　阿尾島田A遺跡空中写真

阿尾島田A遺跡空中写真（左が北）

ＳＢ－０１
（北から）

ＳＢ－０２
ＳＢ－０６
（北から）

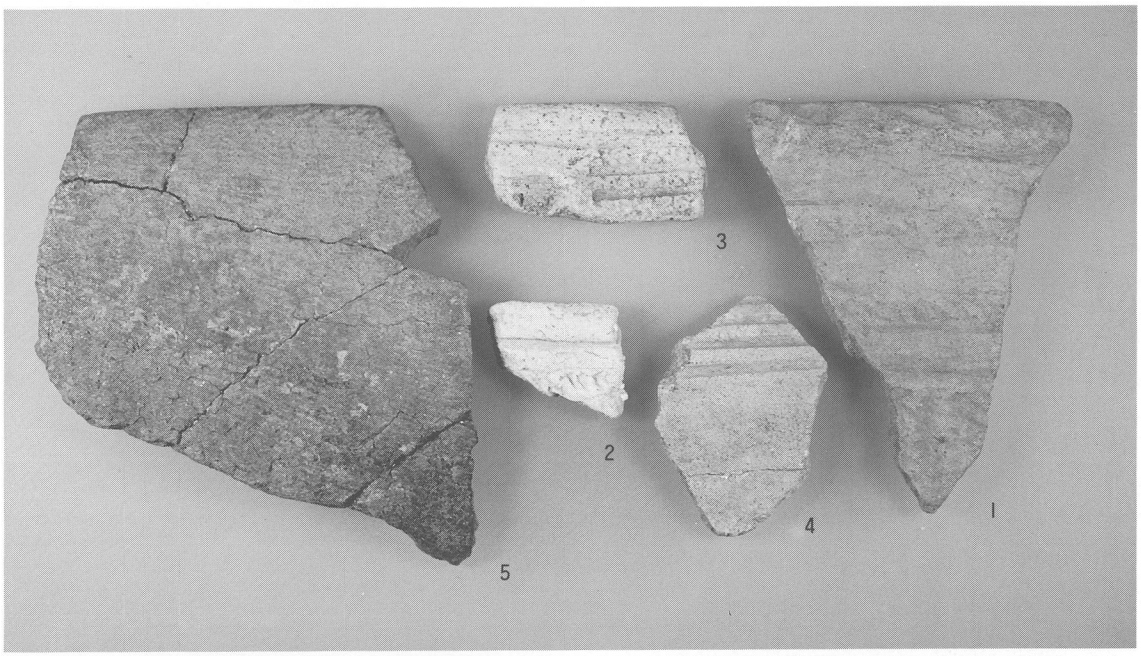
ＳＢ－０３
（北から）

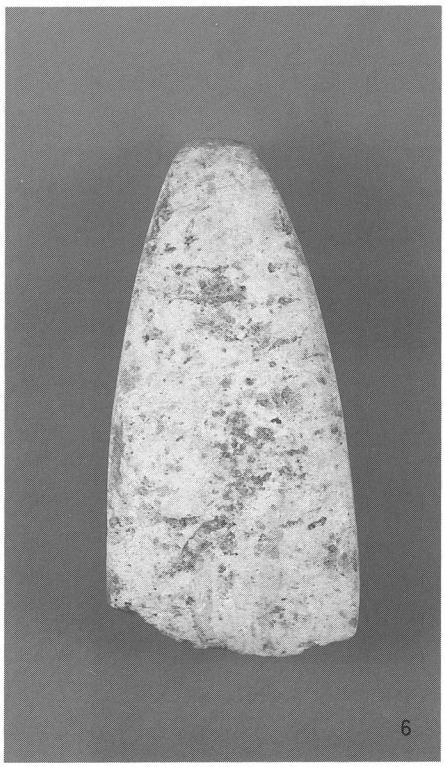
ＳＢ－０４
ＳＢ－０５
（北から）

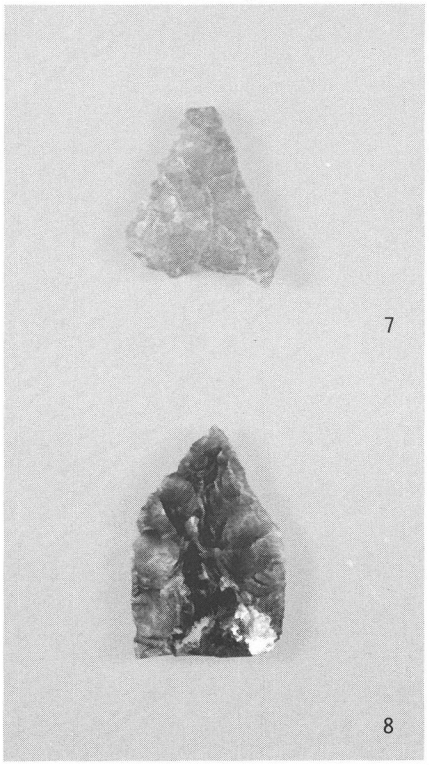
ＳＢ－０７
（北から）

ＳＢ－０８
（北から）

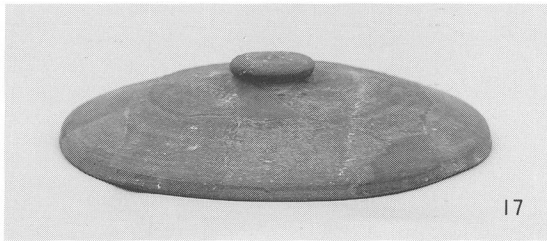
図版5　遺物：縄文時代

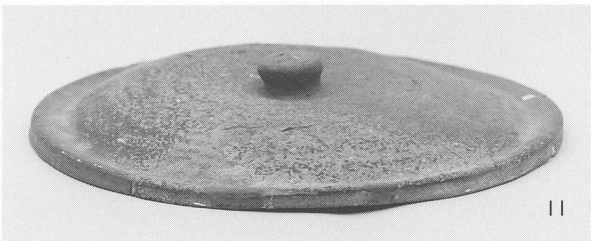


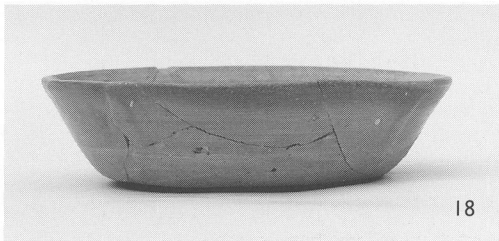


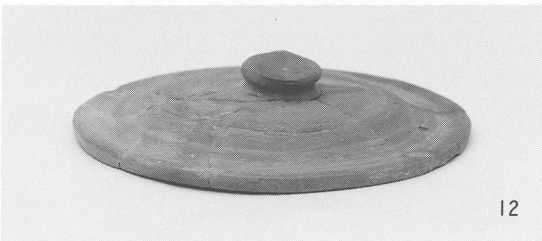


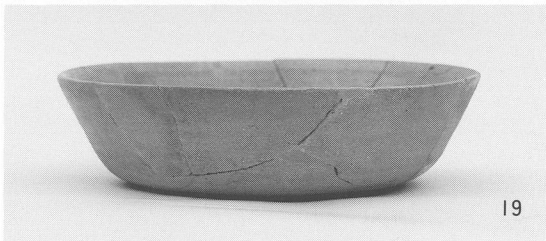
10

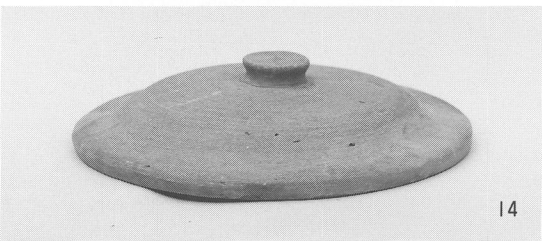

17


11

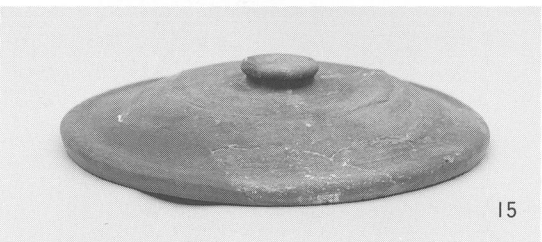

18

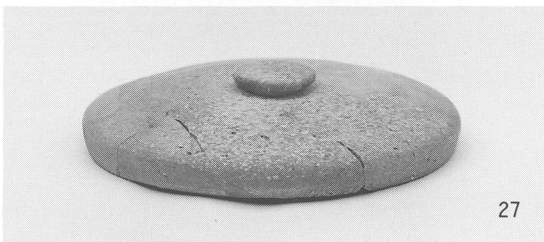

12

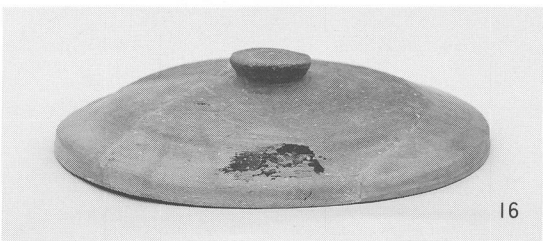

19

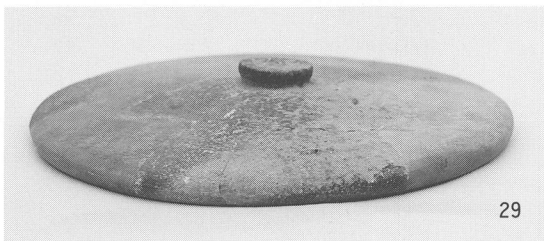

14

25


15


27


16


29

30

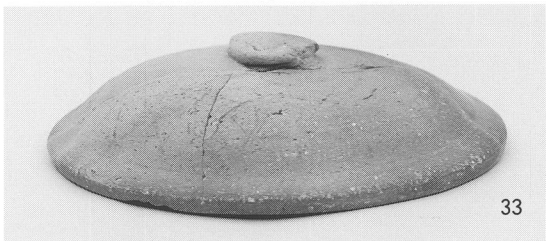
36

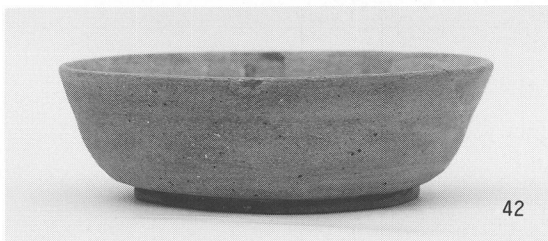
31

37

32

41

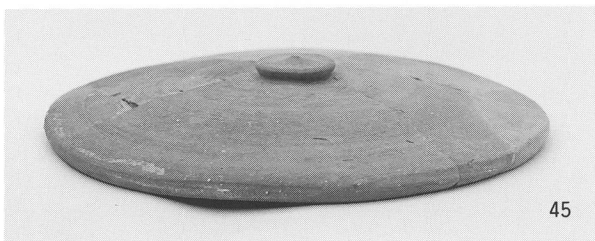

33

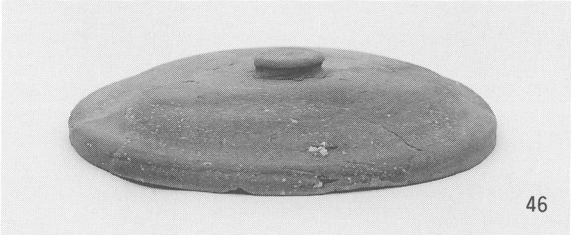

42

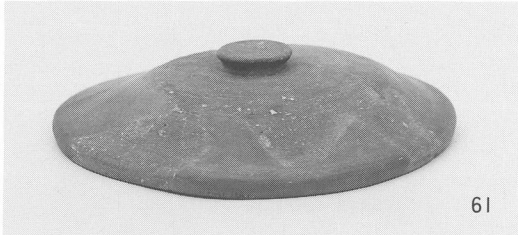
34

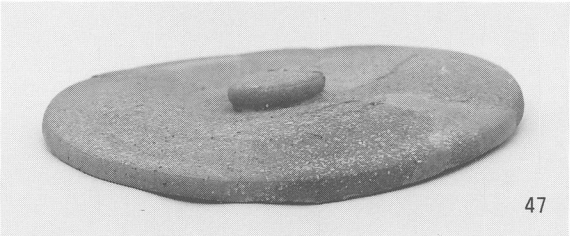
44

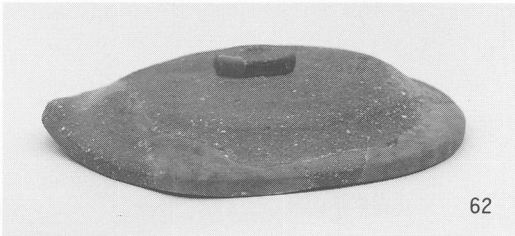
35

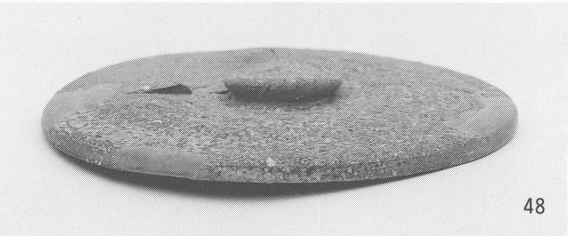

45

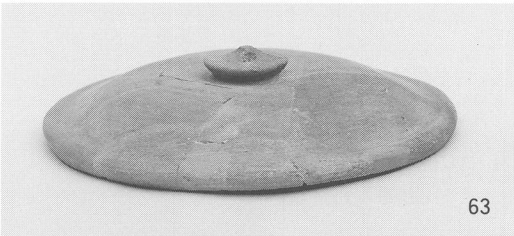

46


61

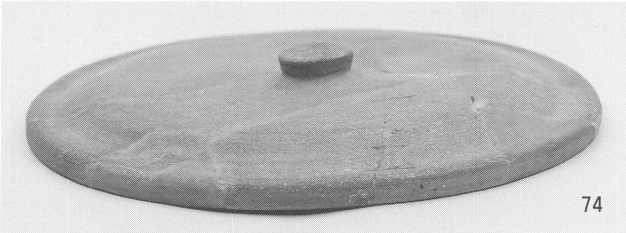

47

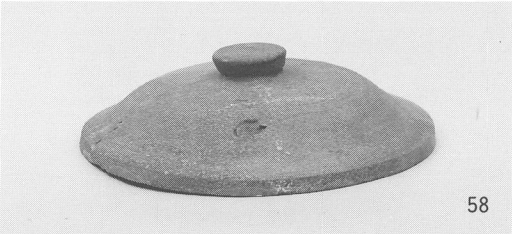

62

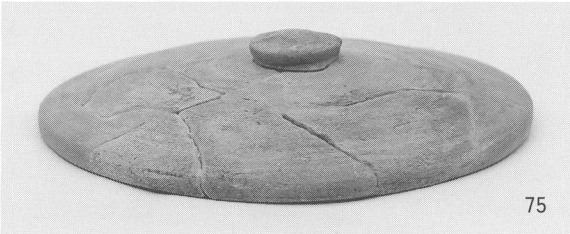

48

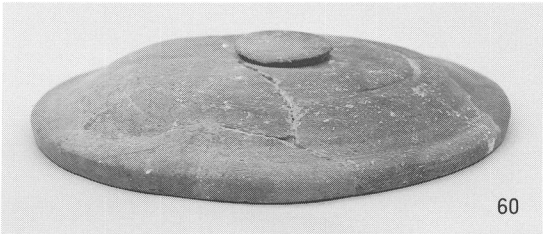

63

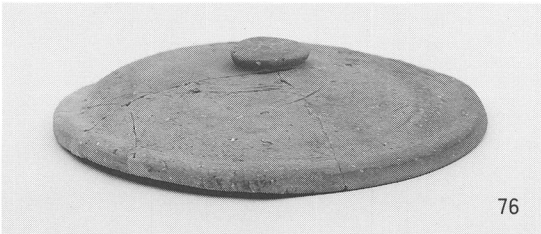
49

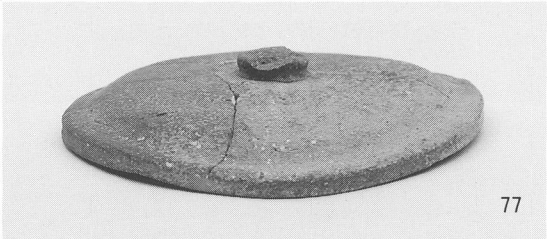

74


58

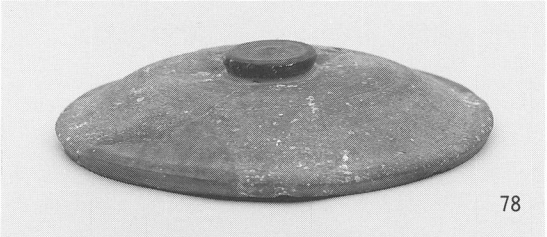

75


60


76


77

122

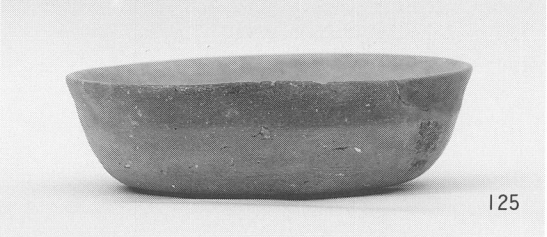

78

123

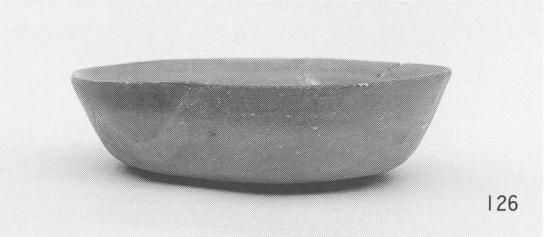
118

124

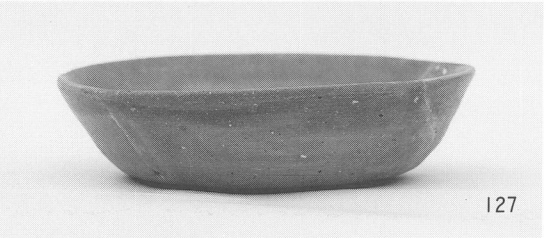
119


125

120

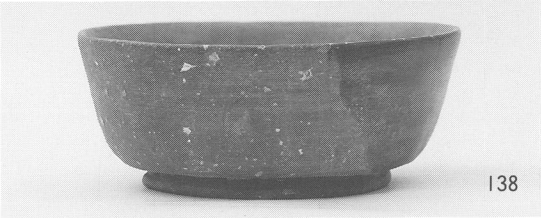

126

121

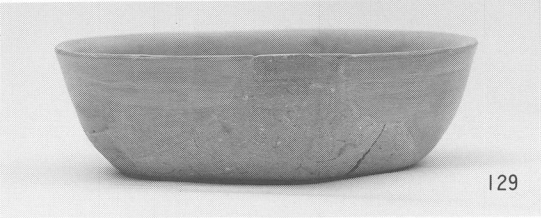

127

128

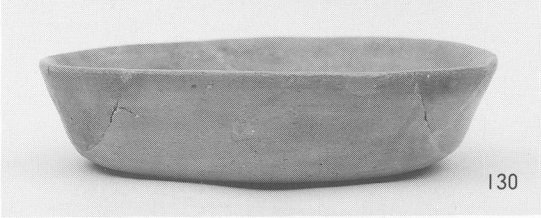
139


138

142

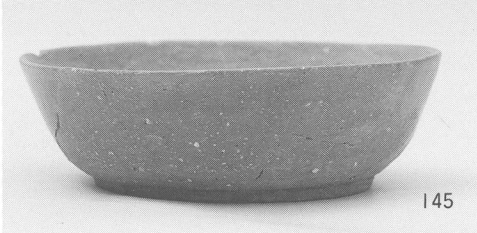

129

143


130

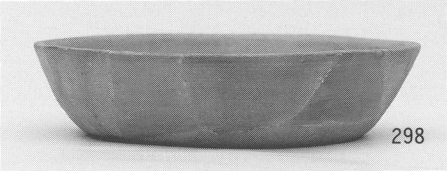
144

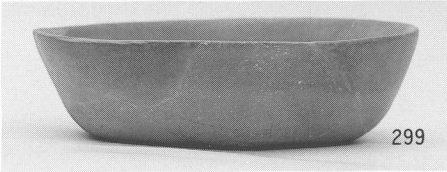
132


145

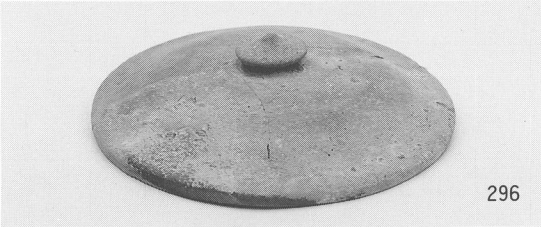
137

146

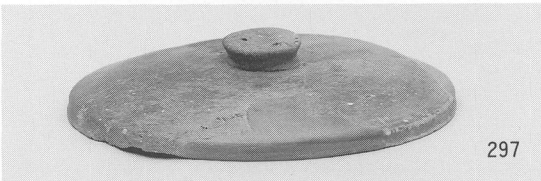

298


299

301


296

302


297

303

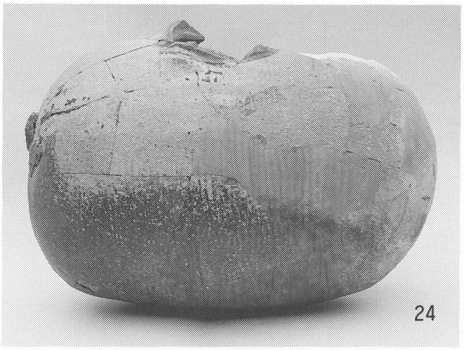
305

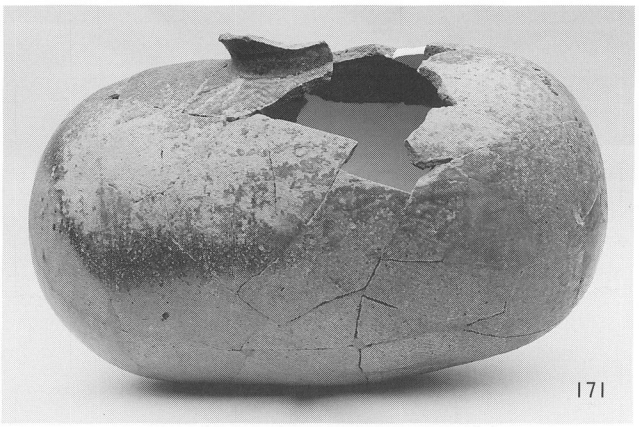
300

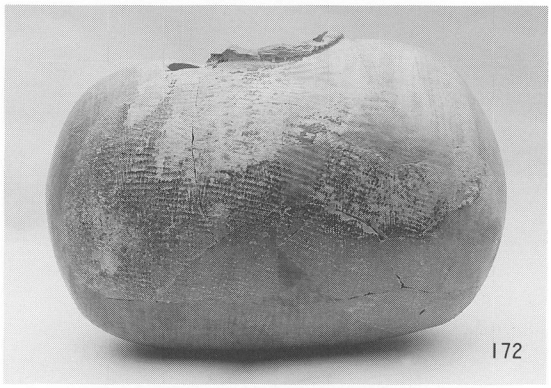
151

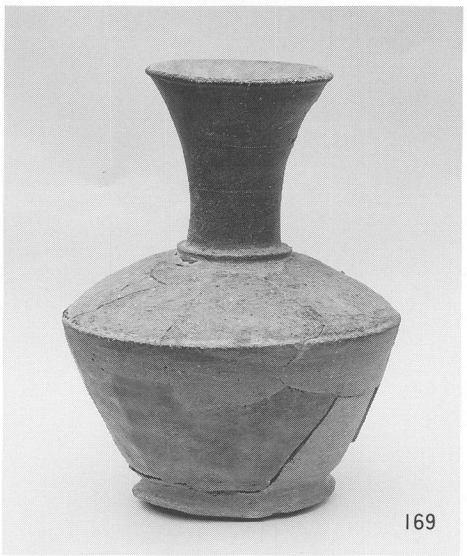
304

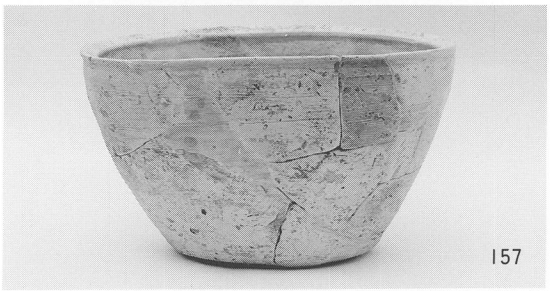
306

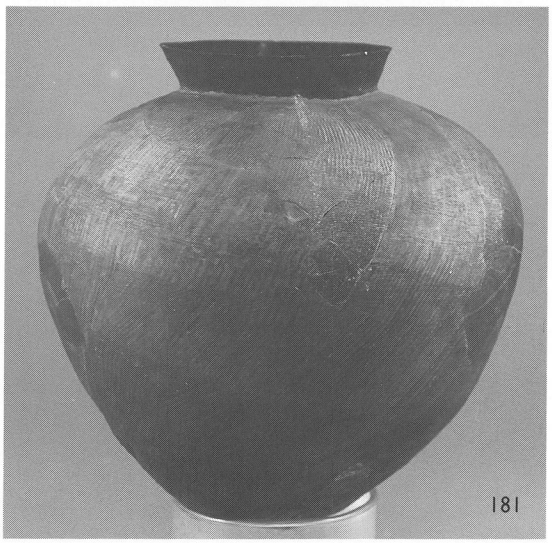

24

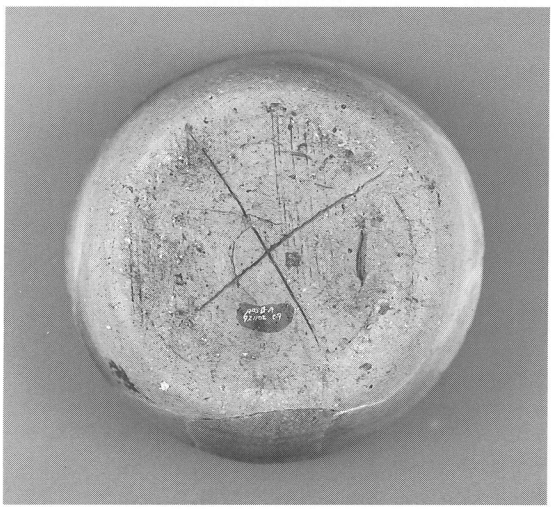

171

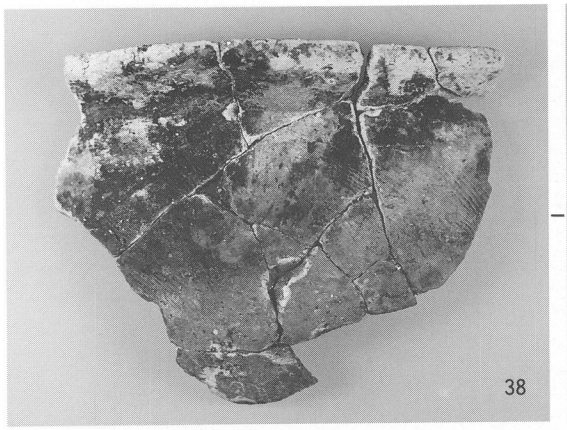

172

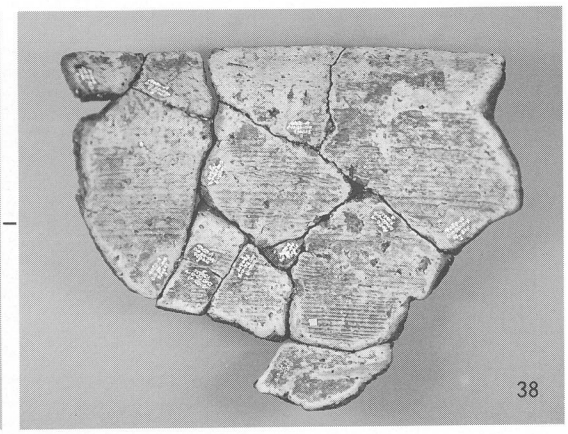

169

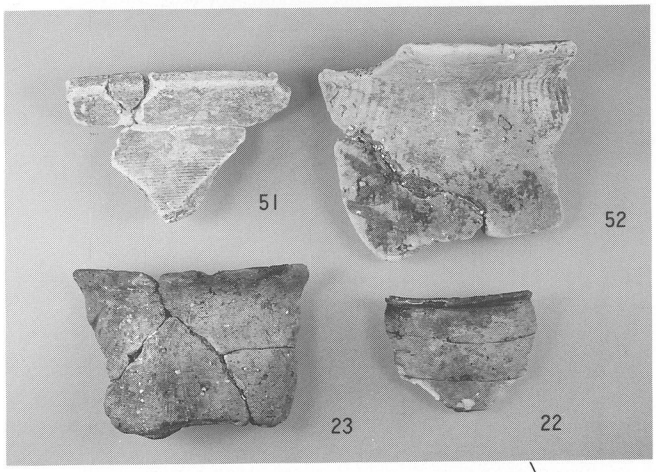

157

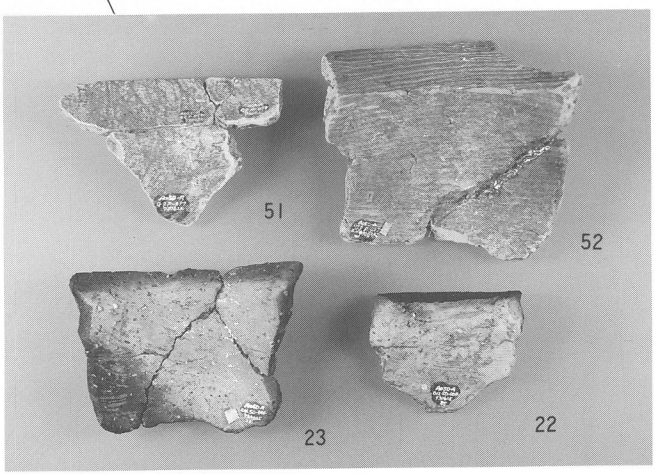

181

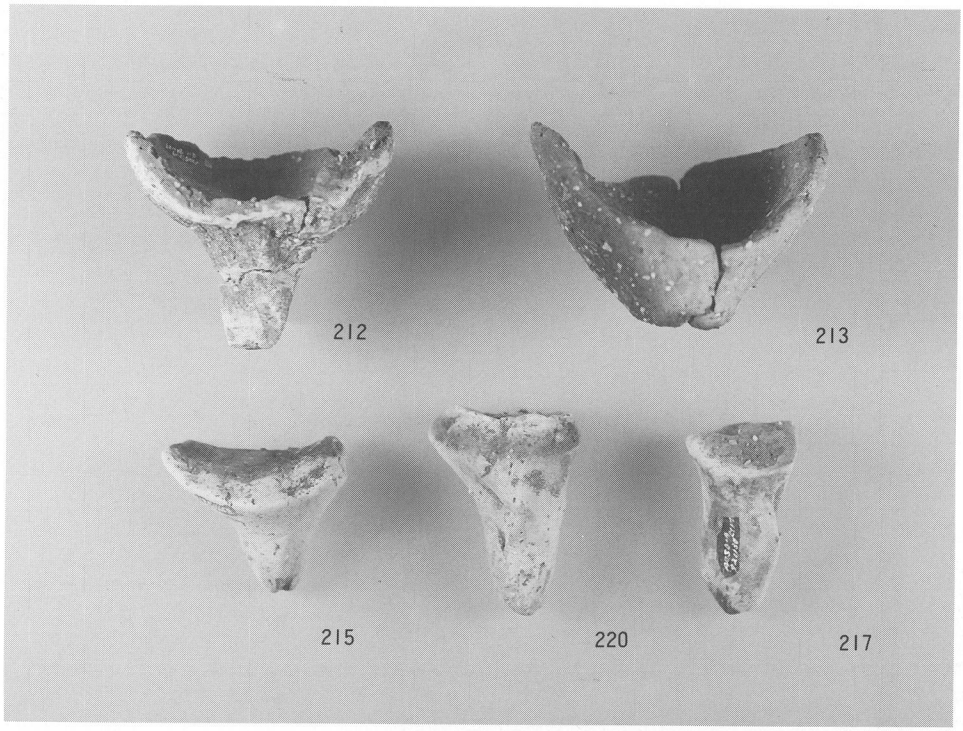

ヘラ記号・工具痕の例：121底面


38

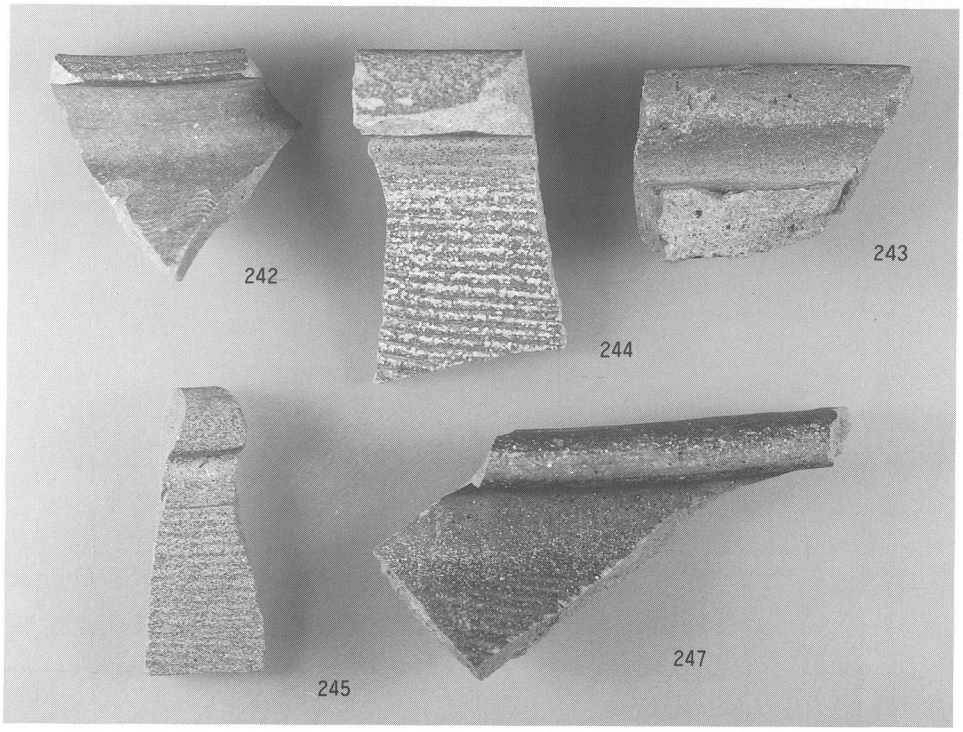

38


51
52
23
22

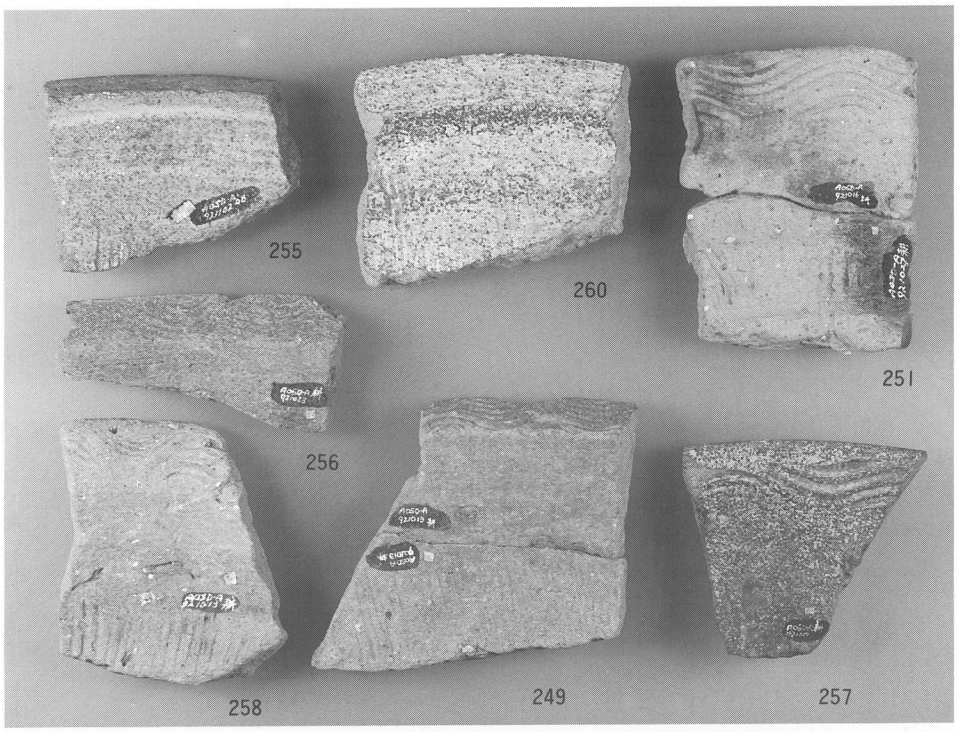

51
52
23
22



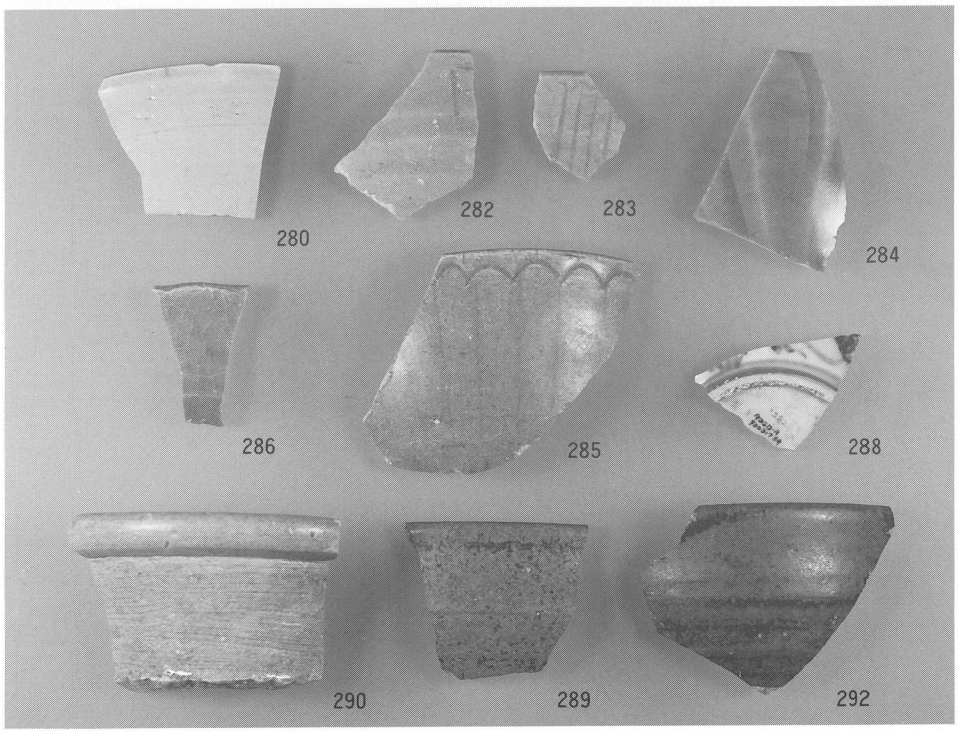
製塩土器



珠洲


255
260
251
256
258
249
257

珠洲


280
282
283
284
286
285
288
290
289
292

陶磁器

図版16　阿尾島尾山砦跡遠景

阿尾島尾山砦跡遠景（西から）

阿尾島尾山砦跡遠景（東から）

報告書抄録

ふりがな	ひみばいぱすかんれんいせきちょうさほうこく４
書名	氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅳ
副書名	阿尾島田Ａ遺跡・阿尾島尾山砦跡
巻次	４
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第22冊
編著者名	大野究
編集機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935　富山県氷見市本町４番９号　ＴＥＬ 0766－74－8215
発行年月日	１９９６年3月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				m²	
阿尾島田（あおしまだ）Ａ遺跡	富山県（とやまけん）氷見市（ひみし）阿尾（あお）	16205	88	36°52′41″	136°59′10″	19920914↓19930929	1500	国道建設
阿尾島尾山砦（あおしまおやま）跡	富山県（とやまけん）氷見市（ひみし）阿尾（あお）	16205	26	36°52′49″	136°59′20″	19930801↓19931015	900	国道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿尾島田Ａ遺跡	集落	縄文 古代 中世	掘立柱建物・溝・土坑	縄文土器・古代須恵器・古代土師器・珠洲・青磁・白磁など	奈良時代の集落
阿尾島尾山砦跡	砦	中世	堀切・平坦面		

平成８年３月25日　印刷
平成８年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第22冊

氷見バイパス関連遺跡調査報告 Ⅳ

— 阿尾島田Ａ遺跡 —
— 阿尾島尾山砦跡 —

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935　富山県氷見市本町４番９号
☎０７６６（７４）８２１５
印　　刷　㈲ひふみ印刷社